
望みを謳うもの

空アゲ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

望みを謳うもの

【Nコード】

N8354P

【作者名】

空アゲ

【あらすじ】

槍を手に、魂には“クランの猛犬”を宿して。戦場を駆け抜ける一人の男のお話。彼は、どんな望みを謳うのか。——第一章説明終了——そして、死に絶えた彼が招かれたのは七人の魔術師と七つの英霊が一つしかない万能の願望器“聖杯”を求めて殺しあう生存競争だった。
バトルロイヤル

いつかは仲間だったクランの猛犬を敵に回しながらも彼は狡猾な世界を呪いながらその戦いに身を投じた。

全ては、守れなかった未練をその戦争で解き放つために——。

プロローグ&異世界へ

俺こと、青景琳あおかげりんはいままでろくな人生を送ってない。

今は27歳の運搬業をやってるが11歳で両親を事故で失い、そこからは親戚の家で暮らしてた。

暮らしてる所は都会だったが、走ることは多かった。なぜなら、親戚の人たちが爺さん、婆さんでな、スーパ―とかもかなり遠くてな、走っていかないと間に合わないことが多かったんだよ。

そのお陰か、かーなーり足が速かった。学校では負けなしだったし、全国で一つの手の指に収まる数から外れることはなかった。

よく友達から「お前は日本のボルトだ!!」と叫ばれたこともあった。

そんな俺だが、とりたてて凄い事やった訳ではなく、平凡な高校にスカウトされて、陸上部に入って、全国行つて、上位に入賞してそれを引退までやって、大学に入って、中退して、ここに至ると。ちなみに、宗教はなく、自身はケルト神話が大好きだった。特に太陽神ルーとその息子クー・フリーンがな!!

今俺は、仕事である。車はあまり好きじゃなかったからバイクで配達してた。後々、車にしときゃよかったと後悔するのだが、それはさておき。

山道を走っていると、いきなり後ろからクラクション鳴らされた。後ろを振り向くと黒い車がこちらに寄つてくるところだった。

はて、友人の中に黒い車持つてる奴居たっけ?と思いながらもその車を見つめてた。

一つ、気づいたことがある。正直、自分の正気を疑ったが、現実だった。

ドライバーが居なかった。ハンドルしか見えないのだ。

「は？」

声が出てしまったのは仕方が無いだろう、非日常を見てしまったのだから。

車は見たな！と言うかのようにクラクションを短くならし、俺の横に付き、並走してきた。

離脱しようとしたが、いつの間にか後ろにもドライバーなしの車が付いていた。

目の前にはカーブ、ここは山道、墜ちたら死、しかあるまい。

これが、運搬用のトラックだったら押し返せたかもしれないが、バイクであつた。

黒い車は、カーブを曲がろうとせずに真っ直ぐ走る、走る。

それに伴い、俺が運転するバイクは曲がりきれず、

「夢か？これ」

なーんて、つまらない最後の思考を残し、青景琳はこの世界から消滅した。

in????

目が覚めた。

横になっていた俺は身を起こし、周りを見る。

蒼い空みたいな色調の部屋だった。

—— 思い出せ、俺は何をしてた？

朝起きて、飯食って、会社行って、いつもみたく仕事して、きた——
く？

違う、帰宅する前になにかあったはず、なんだっけ？
思い出せない。

諦めよう。

そんな思考をして、とりあえずこの変な部屋からでようと試みる。
ガチャガチャドタンボタン！！ガン！！！！↑苛立つて叩いた音
開きませんでした、ですよー

「ちくしょう、なんで開かないんだよ！！」
椅子に座り、溜息をついてると、

「うるせエよ、坊主」

青いタイトの変態さんがご入場してきました、はい。
よくよくみると、とてもイケメンでした。とても羨ましいです。
と、ちよいまち、坊主だと？

「おい、青タイト、坊主ってどういう事だよ。おそらくはお前と同
じくらいの年齢だぞ？」

しまった、といった感じでこちらを見る青タイト。

「悪いな、ちとそれが慣れてたもんでな」

「間違いなら構わないさ。」

だつて俺だもん！！

「ほんと、悪いわ。こつちの手違いで殺しちゃうわ、立派な大人を
坊主呼ばわりなんて。」

「は？」

なんで、知っている。というかこいつがおれを殺したのか？

「どういうことだ！お前は何を知っている！？俺を殺したのは「落ち着けよ、俺達が説明してやるから」」

話の途中を折られたためか少し冷静になった。

それと、青タイツが話すときにこっちを見たときの眼が怖くなったからだと思う。

「よし、落ち着いたか。いいぞ、話をしてやる」

そういつて俺の対面に腰を掛けて暇そうに話し始めた。

「俺の親父がな、少し長い眠りに着いていたんだ。」

「？、病気かなんかか？」

「まあな、そんなもんだ。それでな、ようやく昨日回復したんだ。」

「そうなのか、おめでとう。でも、それが俺の死になんの関係があるんだ？」

「まあ、その前に俺の名前を覚えておこう。——俺の名前はクー・フリーン、そして問題の父親だが太陽神ルーだ」

「おい、クー・フリーンとやら、これはドッキリか？扉に隠しカメラでもあるのか？」

笑いながら彼に聞いた。だってクー・フリーンはずっと昔に死んだはずだぞ。太陽神ルーだって神に違いない。それがなぜ一市民の俺を殺す必要がある？

「まあ、嘘っぱちだと思うのも仕方がねえとおもうが、証拠を見せればいいのか？そしたら信じてくれるか？」

「まあ、証拠を見せてくれるなら見よう。信じるも何も今、この状況を見ればここが夢の中では無いとしか感じられない。それで俺は他の何を信じる選択肢がある？」

「それもそうだな、ここが親父の作った空間だからな。夢ではないことは確かだ。」

「なんだと？いや、お前の父さんが本当に太陽神ならありえるか。」

「んじゃ、証拠つてもあまり確かなものじゃねえけどな。」

クー・フリーンは椅子から立ち、少し離れると、

「
アンサズ

「
F」

なんてことを言いながら空中にFを書いた。

ぼうつ、と炎が文字から流れ出る。渦を巻き、クー・フリーンの周りを踊る。踊る。

「ちょ、ここが燃えるぞ！？」

「大丈夫だよ、おまえさんも心配性だな。」

笑いながら、腕を横に差し出した。

ヴウオン、と音を立ててクー・フリーンの手に、紅い槍が現れた。

・・・あれは、伝説の

「ゲイボルクか？」

「ああ、そうだよ。」

クー・フリーンは槍を器用に片手で回しだし、炎を吹き散らしていく。

一分しないうちに炎は消え去っていった。

「証拠はこれ、お前さんの日常ではこんなもの存在しないだろ？」

「ああ、こんな便利な物は確かに存在しなかった。——認めよう、ここはもとの世界じゃないってことを。」

「よし、それじゃあなんでうちの親父がお前さんを殺したのは回復して、つい、すっかり騒いじまったんだ。」

「神様は、信仰が薄れると力が弱くなるんだ。太陽神ルーは昔はとてつもない力を有していた。しかし、現在に近づくほどに信仰が薄れ、いつしか眠りについていた。そして、信仰してくれた奴が存在し、俺の親父は回復したんだ。」

「なんだと？それじゃおれはあんたの親父に関係大有りだよ。俺はあんたとあんたの父親がケルト神話の中では特に好きだった。配達する前は時間がたっぷりあったからかなり祈ってたよ。それが原因か？」

「そのところは親父に聞くしか無い。で、その親父だがそろそろ来るからしっかり聞いとけよ。」

「わかった。しっかり聞いとく。それと、すこしでいい、ゲイボルクを貸してくれないか？」

「駄目だ、それはなつてはならん」

口調が見事変わったよ。おい、**ただ**大事なんだよ。・・・まあ、ゲイボルクはクー・フリーンの象徴シンボルみたいなもんだからな。

「分かった、それじゃな」

「おう、またな」

そういつてクー・フリーンは扉をあけて外に出た。すれ違いで白いヒゲを生やした、立派な爺がやってきた。

「この度は済まなかった。青景琳——待っていた、理由を説明する時間がない。二つ選べ、

一つ、異世界に能力付きで飛ばされるか。

二つ、この場で力尽きるか」

ええーと、一つ目は新しい世界で無双おk？みたいな感じになるのかな。ぜひとも行きたい。

二つ目はこの場で力尽きる、ふむふむ、……ざけんじゃねえ

！！選択肢二つとかいつてるが実質一つだ！！！！

「能力というのは何がもらえるんだ？」

「我が息子、クー・フリーンを護衛として連れていかせよう。そして……ケルト神話以前からの英雄たち、ジークフリードもそうだな。そやつらの能力をお主に与えよう。」

「念のため二つ目を聞いておこう」

「この場で私に殺されるだけだ」

「問題大アリだな。」

「まあな」

「（、Ａ） ケツ！分かった、異世界に行きます！！」

「よかるう、ならば何の英雄を取り込む？」

「クー・フリーンを貰おう、そして、護衛は要らない」

「なんと、・・・分かった。しかし、何らかの能力を与えなければ平等ではなくなってしまう。欲しい物を言え」

「よし、分かった。ならば、身体能力」まあ、筋力、敏捷、眼の良さ、それと、回復能力を高くしてくれ」

「あい分かった。世界に付きし頃に付加されているだろう」

「ありがとう、それでは世界について説明はあるのかい？」

「この世界におけるゲームみたいなものだ、職業があり、ＨＰ（体力）、ＭＰ（精神力）、モンスターありの、ギルドあり、人の営みももちろんある。国の争いもある、十分に気をつける」

「わかった。ところで——どうやっていくんだ？」

「この扉からだ、早く行き給え」

「了解、それでは」

歩いて、扉に近づく。

手すりに手を掛けて、引く。

カチャ、と音がして簡単に開いた。

なんだ、結構楽に引けたな。
足を踏み出した。

なーんて事を考えて、扉の向こうに

ブログ&異世界へ（後書き）

side いたほうがいいかな？

第1話異世界に到着した、一般人（前書き）

感想、評価がらんお願いします!!

第1話異世界に到着した、一般人

フリーフォールってどんな感じが皆考えたことはあるかい？
今、僕は！！最高に恐怖してるぜ！！

なんせ、いきなり空から落ちてるんだからな！！

「ヒャッフウーーーーーイ！！！！！！！！」
いやいや、テンションMAXだぜ！！

で、どうしよう？

今、俺は仰向けの体勢で落ちているが周りが陸地しか見えないことに恐怖してるぜ。

出来れば俺の真下に湖があることを祈ろう！！

うつ伏せになって状況確認しないと、

ってことで、三、ハイ

「やった！！湖だ！！」

嬉しいことに湖があった。神様もちゃんと考えてるんだな！！

「着地準備！！」

自分に言いかけて頑張ろう！！

体勢をさらに変えて足から落ちる準備をする。

3、2、1

バツシャアアアアアン、と音を立てて着地した。

ひどいっす、湖それなり深いっす。

コポコポ音を立てて沈んでいく。

「がぁぽぽぽぽ（このまんまだと死ぬじゃん！！）」
急いで這い上がる。

「ゲホッ、ゲホッ」

陸地に辿り着いたよ、やったー。

……………

一難さつてまた1難、着地時の音でやってきたモンスター達がこちらをみている。

狼型、犬型（あんま変わってないww）、鳥型、……………恐竜型

「「「ガアアアアアアア」」」

「「「キエエエエエエエエ」」」

「うるせえっす」

でも、武器がないのも事実です。

（おい、青景。とりあえず説明してやる。俺の能力を受け継いでるから、紅の魔槍も^{ゲイボルグ}だせる。だから念じて腕をだせ）

（おまえ、クー・フリーンか？）

いきなり呼ばれて気が狂わなかった俺を褒めてくれ、ジーザス！！

（いかにも、早く出さねえと——死ぬぞ？）

心が冷える一言、すげえブルったぜ……

そいう事をしている間に距離を詰めてきた動物大サーカス団一行

↑（いま命名）を前にして腕を突き出して念じる。

（その調子だ！それじゃ、ちと寝るわ）

(ホワアアアアアアア！？なぜ！？今このタイミングで寝る！？)

(・・・・・・・・・・・・・・・・)

「最悪だぜ、無理だ」

そう、ばやきながら手に収まった槍を見て、

「でも、勝てるな」

矛盾することをいって駆け出した。

sideシメライド・スルヴァ

「隊長！！報告です！！」

騒々しい隊員が言ってきた。

「言ってみろ、本音で」

「空から人が降ってきた。目撃者は他ならぬ俺だ、さっさと調査に行きたいから命令下せ、くそやろっ」

「分かった。今、この場で腹切れ貴様アアアアア！！！！」

「冗談だ、行くぞ、隊長」

隊長に向かってこんな暴言を吐いて来るのはカライド・シャームール、一応、部下という枠組みに嵌っている。

「分かった。行くぞ」

そう言つて俺達は現場に向かったのさ。

side 青景 琳

皆さんはスプリンクラーというのはご存知だろうか。

水を吐いて吐いて吐きまくる変な装置・・・というのが俺の見方である。

「うげえ・・・きもつ・・・」

なぜそんな話をしたかというと、目の前のクマ型のモンスターが心臓貫かれて血液がびゅうびゅう噴いていて、なんか似てるなーって思ったからである。

駆け出した後の事は簡単に説明すると、目の前に居た狼型モンスター（ヤラレ役の定番）を顔面踏みつけて飛んで、そこから槍を流星群のごとく突き出しまくってた。

「グアアアアアア！！！！」

「ギエエエエエエ！！！！」

「ノオオオオオオオ！！！！」

ん？なんか不思議な断末魔が聞こえたような・・・気のせいかな。

「オラオラオラオラオラ！！！！」

着地してからも四方八方に槍を突き出して串刺しにしまくってた。

もう動物の亡骸が周りにあつて鬱陶しいね。殺しまくってたからだよー、考えて始末すればよかった。

しかし、さすがは魔槍、切れ味が全然違うね。むしろ血を吸って軽

くなってる感じが・・・
ゲイボルクかぁ、

・・・
・・・
・・・

「天啓！！！！！！！！」

閃いた、閃いた。

一つの技を思いついてしまった。

「F t e見ててよかった・・・」

そう、俺はアニメで見たゲイボルクを作り上げる気満々で跳び始めた。

ぴょんぴょん跳んでるとモンスター共がじっとこちらを見てくる。

「くつ、純真な眼でみるなっ！」

狼、熊はいい、けれど、鳥、犬型モンスターに見られるときついな。

「けれどっ！お前らは消す！！」

大きくジャンプして10mの距離をとる。後ろにも動物共モンスターがいるが、さっきの惨劇をみて恐れをなしたかじりっ、と後ろに下がっていた。ありがたいっ！！

上に向かって大きくジャンプ、目指すは天のみ！！

「消し飛べ！！突き穿つ（ゲイ）」

動物たちが魔槍の雰囲気を押されてか、懸命に鳴きはじめた。しかし、もう遅いつ、遅すぎるっ！！

「死翔ボルクの槍ウウウ！！！！」

神速で放たれた魔槍は、運悪く着地地点にいたクマ型モンスターの頭を粉碎し、体を貫いて——地面に着いた。

ヴウオオオオオオオオオオ、といった音を立てて地面が抉れてく、動物達モンスターが消えていく。

近くの森も巻き込んで、ひたすらひたすら消し去る、存在を拒否して敵を粉碎していく。

「つと、ふう〜」

クレーターに佇んでいる魔槍の上に器用に着地して周りを見渡す。

「モンスター動物がいない。モンスターというか、魔物の方がいいかな？　というか流石対軍隊の宝具だな・・・」

いいのかな？　ソツチの方がいいのかな・・・？
ガチャガチャ、と金属と金属が重なる音がして我に帰った。危なかった・・・。

焼き焦げた森↑（さきほど己がやったこと）からでてきた人影、一人、二人・・・大量だあ〜。

ゴホンツ、30人ぐらいかな？

「全員ッ！！、整列！！」

ザッ、と音を立てて足を揃えて整列した謎軍隊↑（俺命名）
その先頭から一人の男が出てきた。

こちらに歩み寄り、あつ、なんか声だしそう。

「貴殿は何者だ！！答える！！」

本当に声出しました〜。しかも上から視線〜、イラつきます。はい。
「答える義理はないっ！！」

どうだ〜、上から視線だからだよ〜

「総員！！戦闘体勢！！」

つて早っ！！沸点低いな！！〜！どんだけだよ、おいおい！！

「かかってこい！！貴様ら全員打ちのめしてやる！！」
あるえ〜？　売り言葉に買い言葉ってこの事だよな〜。

・・・

（セタンタ、お前が言ったな？）

（いかにも、その通りだ）

開き直って言いやがって、寝てたからって油断してた!!

「待て、決闘をしよう、一対軍隊だこちらの品位が疑われる。」

願ってもない申し出だった。しかし、裏があるんじゃないかと思う。だけでも――

「良いだろう!! 決闘だ!!」

私の中の誇り高き戦士が黙ってなかった。はぁ・・・

「いざ、尋常に!!」

審判による掛け声の後に・・・

「始め!!」

距離は25か?

相手・・・騎士風の鎧に剣、王道って感じの装備

自分・・・F t eのランサーな感じの装備。かっこいいぜ!!

「我が名はヘルグス!! ハアアアアアアア!!」

先手は相手に取られた、が!!

「甘い、甘い甘い甘い!! そんなんで俺を倒せると思うな!!」

全てをいなしで、弾いて、逸らしまくる。

ガァン、ヒュン、キィン

あゝ、五月蠅いな金属音、鼓膜破れるゝ

「甘いっ!!」

叫ぶやいなやヘルグスの剣を弾き飛ばす。

キィィン↑（俺がヘルグスの剣を弾き飛ばす音）

ヒュンヒュン↑（剣が飛んでいく音、初めて見た）

グサリ↑（荒地に剣が突き刺さる音）

俺はヘルグ스에剣を突きつけて

「お前の、負けだ」

こう、言いたかったんだ。

「おお・・・！！隊長が負けた・・・」

わーわー、と外野が叫んでいるが無視無視、それよりも、

「あんだ、こんな腕で隊長やってるの？」

この、上から目線の野郎を罵倒しないと気が済まないZE。

「くっ・・・」

ヘルグスさんが呻いてマース、せんせーい、気分が悪そーデース。

「俺が勝ったんだからここはバイなーらー」

そう言ってその場を後にした。

（おい、琳！！なんで終わりにしたんだよ！！金でももらっときやいいのによ）

（・・・・・・）

（おい？琳？もしかして凶星か？）

（うるさいぞ！！ランサー、寝てろ！！）

俺は、上を向いて走り出した。なんでかって？気分の問題だよ！！

——これにて、猛犬を抱えた一般人の一日が終わる——

第1話異世界に到着した、一般人（後書き）

ども、空アゲです。

今回は2作目を作ってしまったて申し訳ない・・・

しかし、感想、評価、どんなにきつくても結構です。

是非是非、お願いします。

それでは、これにて・・・

第2話 一般人から何になる？（前書き）

どうも、空アゲです。

評価、感想がらんお願いします。

それでは、妄想の世界にレッツゴー

第2話 一般人から何になる？

決闘の2日後、俺たちは湖に水を注いでる川の上流に向かって歩き続けていた。

なぜかって？川の近くには人が住んでいる可能性が高いからだよ。

（それもこれも、あの騎士野郎に聞いとけばよかったのによ）

（セタンタ、それ何回聞いたと思ってる？）

（そう言いたくなるんだよ。何時間歩いたと思ってる？）

（ぐっ・・・まあ、良いじゃないか、自然を楽しめて）

（まあな・・・おっと、人の気配がするぞ？）

（なんだと！？）

（嘘ついてどうするんだよ！！いいことあれば悪いことありだ、俺たちの事敵だと思っっているみたいだ。囲まれてるぞ）

（まじかよ・・・）

確かに、なんか殺気がバンバン浴びせられている感じがするな・・・

ヒュン カカツ

（矢が飛んできたぁー！！）

（落ち着けっ大丈夫だ、俺には矢よけの加護がついてるからな・・・
そうそう当たることは）

ヒュンヒュンヒュン カカカカカブス・・・カラント

（当たったぞ！！ってか当たってるのに弾くってどういう体してるの??）

（いや、俺も分からん）

（そうか・・・でもさ、このまま矢の雨降らされるよりは制圧した
ほうが良くないか？）

俺が提案すると

（その通りだ、ぱっぱと片つけるぞ）

同意の意向を示してくれたセタンタさん（27歳）

「んじゃ、行きますか」

気分は散歩で、手には魔槍で・・・不釣合いだな・・・

森の中に潜んでる奴を片っぱしから伸ばしていった

五分後・・・

「「申し訳ございませんでした」」

脅・・・ゲフン！！話を聞くに、盗賊だと勘違いしたらしい

「怪我がなかったから良かったよ」

まあ、後ろから動くな、って言って槍突き出したただけなんだけども
！！

楽しかったな・・・リアルメタ　ア、久しぶりにやりたくなったな・
・メ　ギア。ハア・・・

「お詫びと言ってはなんですが私たちの村に来ませんか？」

「是非頼む、こっちも飯がなくて危なかったんだ」

「そうでしたか、それではこちらに」

そう言っ代表らしき若い男はこちらに背を向けて歩き出した。後
ろからもさつき俺が取り押さえた奴らがぞろぞろついて行っ

「着いて行くか・・・」

呟いて槍を担いで集団を追いかけた。

「ここでございます・・・えー・・・」

「名乗ってなかったな、青景だ、青景琳。」

「アオカゲ様ですね、我が村にようこそ、村長として迎えましょう。
私の名前はバレロ・スカータッタと申します」

え？この人村長？

（ああ？そうみてえだな）

眠そうにしながら話しかけてくるセタンタ・スルーしよう

「よろしく、バレロ」

なるべくにこやかに返答した。

「それでは、あちらの宿でお待ちください、金の方はこちらで持ちますので」

「分かった、それじゃ」

そう言って俺は宿の方に行った。

（おい、これからどうするんだよ？行く当てないんじゃない？また食料無くなるぞ）

（そうだな、村の人々に聞くしかねえかな？）

（そうだな、そういう方針で行こうじゃねえか）

その後もいろいろな事についてセタンタに聞いていた。

流石は戦士だなんてことも色々聞いた。

「アオカゲ様！！夕食の準備ができました！！」
赤い髪をした女の子が声を掛けてきた。

「おう、ありがとう、行くよ。」

声を返してから立ち上がって食事の場に急いだ・・・冷めると不味いからな。

夕食の最中に聞いたことなんだが

- ・ギルド↑（冒険者に依頼する場）が存在する
- ・ステータスカードというのが存在して、念じれば出てくる
- ・4つの国が存在し、それぞれが敵対している、三つ巴ならぬ、四つ巴、ちなみにこの村は東に位置する国、カサミ国だそうで、西にアルカシャ帝国、北にトール帝国で、南にはソールド帝国が存在し、他にも小国が存在するのだがほとんどがさっき述べた4つの国に吸収されているということだ。
- ・上の国々は常に兵隊を募集していて、腕が立つ者はたとえ最低身分でも將軍に成り得るという事らしい。

という事を聞いた俺達は・・・

（どう思う？セタンタ）

（4つの国全て回っていい国王がいるかどうか確認して仕えるのもいいだろうな）

仕える、という言葉が出てくる辺り流石はクー・フリーンだけのことはあるな。

（けどな、4つすべての国王が仕えるに値しないカスだったらどうする？4つの国滅ぼすか？）

（それもいいかもな・・・今のお前の力は一騎当万ぐらいの力はあるからな）

（まじかよ・・・すげえな俺、人外だろ・・・）

（なんてったってこの俺が憑依してるんだからな）

自信満々の答えが返ってくる辺り流石は英雄だろう、っても俺は反英雄になりそうだな。主に人殺しで・・・

そんなこんなで夕食も終わり、村長と村人の前に居た。

「バレロ、俺、もう行くな。カサミ国の首都って何処にある？」

「ここから歩いて一週間ぐらいの場所です。その間の食料の調達場所は真っすぐ行ったら3日程で見つかりますので、ご安心を」

「おう、なにからなにまでありがとな、・・・それと、少し、食料を分けてくれないか？」

もともと、現地調達が基本だったからな、動物がそう都合よく出てくるわけではないので食料があれば儲け物って感じである。

「食料をこの者に」

「了解しました」

食料を分けてもらい、村をでた俺達は、

「グルウウウウ」

狼さんに襲われている。めんどくさい。

（まあ、そういうなよ、ここらへんで俺の力完璧にしとけよ）

「はいはい・・・」

思わず言葉に出してしまったが問題ないだろう。

槍をこの手に持って狼に歩み寄る

セヤー

ドカバキ

グシャ

めんどいので省略しました。すいませんでしたー

「ん？なんだあれ？」

視界のなんつーかな一番見えにくい端の方に「NEW」ってマークが見える・・・

ひとまずステータスカードを見てみることにした。

このステータスカードは交換することができて、それをいつでも見れるのでガンガン交換して相手のステータスを眺めるのもいいかもしれない。

説明が分からなかった人は、フレンド登録だと思ってくれればいいと思う。

今、俺が持つてるのは村長のみ、寂しすぎる。

（ステータスカード表示）と念じるとすぐに手のひらに出てきた。

・・・

名：アオカゲ リン

性：男

人：人間

筋力：B 魔力：C 耐久：C 幸運：E 敏捷：A 宝具：B

スキル

一般人の気配・・・A+

効果：名前のまんま、他の者から「こいつ・・・できる！！」と思われにくくなる。

適応能力・・・C

混乱からの復帰がランクが上がれば上がるほど早くなる。異世界に飛ばされても、10分あれば完全に復帰できる。

セタンタ・・・A+

英雄との同化、このランクまで行くと経験のみならず能力、スキル

がおなじになる。思考は少しだけ染まる。意識が飛んでる時代わることもできる。二重人格に近い。

戦闘続行：A

往生際が悪く、瀕死の状態でも戦闘を続行するスキル。

仕切り直し：C

戦闘から離脱する能力。

ルーン：B

北欧の魔術刻印・ルーンを保有。

ルーン文字は北欧神話の主神オーディンが、自身の命を呪に巨人から盗んだものである。

矢よけの加護：B

視界内からの飛び道具の攻撃への対処能力。

ただし、超遠距離（ゴルゴ13とか？）や広範囲攻撃（乖離剣エア？）には無効。

ランサーの射的武器への耐性は“風切り音と敵の殺気”から軌道を読む。

神性：B

神霊適性の高さ。高ければ高いほど、神との交わりが深いことをしめしている。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「なかなか高いな。流石は英雄、そんじょそこの奴とはモノが違う！！・・・バレロはどうだろ」

.....

名：バレロ・スカータッタ

性：男

人：人間

職：村長

筋力：E - 魔力：E - 耐久：E 幸運：D 敏捷：E - -

スキル

無し

.....

（おい、英雄の俺と比べるとちとひどいから比べるなよ）

（わかってるよ・・・でも、他に比べる奴が居ないんだよ・・・）

（一応、補足しておくが一般人のステータスと騎士のステータスを入れておくぜ）

（ありがとう、助かるよ）

.....

名：一般人平均

性：|

人：人間、エルフ

職：平民

筋力：F「F」 魔力：E「C」 耐久：E - 「F」 幸運：D「E」 敏捷：E - 「D」

スキル

一般人の気配・・・A+

効果：名前のまんま、他の者から「こいつ・・・できる!」と思われるようになる。

エルフスキル

千里眼：D

純粋な視力の良さ。遠距離視や動体視力の向上。

.....

名：騎士平均

性：|

人：人間、エルフ

職：騎士

筋力：D「E」 魔力：C「B」 耐久：D - 「E」 幸運C「D」
「敏捷：E - 「C」

スキル

戦神の加護

この国の戦神カラフルドによる加護、騎士職になった者に与えられる。

敏捷を除くステータスがワンランクアップさせる。いろいろと凄いスキル。

カラフルドは足が遅かったという逸話からきている。

ちなみに、騎士職に就いたものは一般人より約3倍の力があると言われるている。

・・・・・・・・・・・・・・・・

（うーん・・・）

（どうした？）

なんというか、その・・・低いんだ、ステータスが・・・衛士郎
だってここまでひどくないって・・・

「・・・でも、自分、反則^{チート}だからいつか」
自分でも思う、人外だな・・・と

第3話英雄が示す。力の差（前書き）

ども、空アゲです。

お気に入り登録してくれた方、本当にありがとうございます。
評価してくれた方、とてもうれしいです。

感想を書いてくれたら嬉しいです。

感想をお願いします！！

第3話英雄が示す。力の差

かるく凹んだ後、俺たち（人一名、魂一つ）は、村長に教えてもらったカサミ国へと向かっている。

街道を歩いて、一日、二日、三日目の夜に、ある出来事が起こったんだ・・・

「兄ちゃん、すこーしまってもらえねえかな？」
（あん）

声が掛かってきた方向を見ると、ガラの悪そうな男達6名が腰に佩いてある剣をぺちぺちと叩きながらにやにやと笑っている。・・・
歯、汚いな・・・

「おい、きいてんのかよ!？」

腕が伸びてくる、うわ! 爪も汚い!!・・・つと失礼。

「身の程をわきまえろ、下衆」

ひゃほーい、言っちゃったぜ、5人で1人とか可哀想なんだな!

「なんだと!？てめえ!! つぎけてんじゃねえぞ!!」

「・・・・・・・・」

今日の天気は挑発のち、だんまりです。

「つの野郎!! てめえら!! やつちまえ!!」

リーダー格の人は我慢できないみたいです。残念です。

（おい、琳、覚悟はできてんのか？）

セタンタは心配そうに声をかけてくる。・・・はて？何の覚悟だか

（何の覚悟だ？ここまで挑発してんだから、殺られる覚悟はできてるよ。）

（・・・ちげーよ、あの奴らを殺す覚悟はあんのか？）
なかった・・・、体のどこを見ても、殺す覚悟なんてもんはなかった。

（甘いんだよ！！そんな半端な気持ちならこの場でくたばれ！！）
セタンタの口調はきつい、それは、俺を心配する言葉でもあることにも気づいてた。

（・・・すまなかった。俺はこの力に酔ってたんだと思う）
口から出てきたのは謝罪の言葉、ほかに出てくるものは、無かった。

（分かればいいんだよ、俺は、お前は！！こんなところでくたばっていい奴じゃねえ、力に酔うな、自制して、相手をぶちのめす、なんて覚悟じゃだめだ、殺す覚悟をもって相手を蹂躪しつくせ！！）

「なあ——あんだ」

俺は目の前にいる盗賊に対し言葉をかけた。

「なんだよ、これからお前は死ぬんだから言葉を残しておきたいのか？」

「そうだそうだ！！やつちまえ！！　なんて言葉を浴びせてくる。」

「あんだ、死ぬ覚悟はあるよな？」

「はあ？なに言ってんだあんだ、この人数差を見「だまれよ」

瞬間で槍を持ち、無造作に心臓に突き出した。といってもその一撃

は高速なので避けれるわけも無かったのだが・・・
どちゅ、水っぱい音を立てて体から朱槍を生やしている。
自分でやっててなんだがものっそいグロイ・・・おえっ

（これに慣れるようなことがあるのなら――）

唐突にセタンタが口を挟む、これみて平然としてやがる。

（あるのなら？なんだよ？）

（お前は歴史に名を連ねし反英雄となれる）

（それは結構つらいな・・・）

（お前さんがいまから行く道だよ・・・）

（まじかよ・・・？俺何しようとした？）

（下手したら4つの国を滅ぼす）

何人殺すことか・・・と呟くセタンタを心のなかで悪態ついて・・・
いつの間にか消え去った殺人への嫌悪感に驚きつつも

・・・

「なあ、あんた達…この場でこれみたく死ぬかい？」

膝を折って胸から槍を生やしている物を一瞥して盗賊に話しかけ始めた。

「ひい!？」

まあ、抵抗感なくあっさり殺した俺に話しかけられたら恐いだろう
に・・・抵抗感なかったのは自分でもびっくりしたが。

「うわぁ!!!」

あーあ、行っちゃった…………。

（お前、傍からみるとすげえ怖いぞ、俺みたいだ……）

そーいや、クーパー・リンは戦闘時に顔が酷くおかしくなるって伝承があつたな。

「行くぞ、ここに用はないよ」

元・盗賊から槍を引き抜くと勢い良く血が飛び出して顔、体にかかった。

「これ、お気に入りだったんだけど……」
残念だ、とても気に入ってる服だったのに……

（俺の装束ならやるぞ？いくらでも作れるから）

「本当か？それならくれないか？」

願ってもない申し出だった。このまま国に向かったら間違いなく冷たい床の上にGO！！する羽目になるからな。

（なら、目を瞑って手をだせ、実体化させてやる）

「分かった……」

ぐっ、と目を瞑る、1、2、3……おぉーなんか重みが来るね

……しばらくお待ちください……

「すげえな、アンダー・マーミみたいだ。」

(なに?なんつつた?アン　ーアーマーってなんだよ?)

「俺の世界のスポーツ用のとても優秀な服のことだよ。」
すこし誤魔化して伝える。

しかし、この戦装束はすごい、要所要所にはしっかりとした鎧があり、しかも軽い、とてもすばらしい、最速の英雄として祀られたことはある。

国へと再び歩き始める俺達、街道をのんびりと歩きだす。

sideヘルグス

「隊長!!隊長!!!いい知らせが入りましたよ!!!」

声を掛けてくるのは生意気カライドではなく、立派な俺の部下で忠誠を誓ってくれている、自慢の部下である。

「なんだ!?!どうしたんだ?そんなに大声を出して」

こいつはもうちょっと冷静かと思ってたのだが、意外に熱血だった。

「隊長!街から約4ダル(4キロ)のところに最近、街道に出没する盗賊団が集結しているとのことですよ。」

驚いた、奴らは単独、または少数の団体で行動し、隠れ家に奪った物を集めている、という情報しかなく、私たちの軍、他の軍にも見つかったことはないという慎重な盗賊団だったのだが、今回は何かがおかしい。

「スルト！他の軍にはこの知らせは届いているか？」

他の軍のものに手柄を取られてはこいつらに褒美をやれないからな、急がねば。

「いえ、他の者には知られては居ないはずです。急ぎましょう！」

「ヘルグス隊全員に知らせろ！4半刻…（15分後）に出るぞ！準備をしろ！！」

「分かりました！！それでは！！」
そういつてスルトは部屋から出て行った。

「なんかおかしいぞ？今のこの世界は……」
いままで、モンスターが大量に集まる、なんて事は無かった。

神出鬼没の盗賊団がいきなり大集合、これも何十年という歴史の中でもなかった。

それに……

「あの、青装束の奴、何者だ……？」
呟きは、部屋の中で消えた。

side 青景・琳

「どうしてさ………」

（お前はもう、英雄だ！！）
セタンタの声も届くわけがない、目の前には群れがいた、とても多い、一千ぐらいは居るんじゃないだろうか………はあ、最悪

（大方報復だろうよ、昨日の奴はリーダーっぽかったしな）
街道を行った俺達、一日目はなんにもなく、このまま国へとつける
かと思っただがそうは行かなかった。

「こ・ろ・せー！殺せー！！」

盗賊たちの大合唱……正直うっさい、どんだけ妬んでんだよ。

「あのお方は！！我々を導いてくれた恩人なのだ！！」
心読んだか？あのおっさん……きもっ！

「全員！！戦闘準備！！あのお方を殺したあいつを！！あのお方へ
の土産としよう！！」

「応！！」

「かかれっ！！！！」

「ちょー！本当に来てるんですけど！！意外と遠いけどずっとく土気
高いし！！」

（慌てるな、まだ時間はある）

セタンタ！！君はやはり英雄だよ！こんな時でも冷静だと安心する
ぜ！！

（急いで奴らの鼻っ面を叩いて奴らの進行速度を落とす、その後は
……）

「その後は？なんなんだ？」

（翔んで、宝具発動しろ、対軍隊の宝具がある、それを放つて後は暴れる、暴れて、暴れて、暴れつくせ、あらゆる技を使っても全滅させる！これは、2対軍隊だ。勢いに負けたら押しつぶされるぞ！！）

「分かった……不安だがやってみる」

気持ちは落ち着かない、こんな時にもう一人でもいれば変わるだろうに……いや、居ないんだから考えたって仕方がない。

「よしっ！！行くぜえ！！！！」

目の前にはひたすら前進してくる盗賊の群れ、統率のとれていない軍隊は不測の事態に弱いつてのが定番。例えば……

「一人に軍隊を止められるとかかな。」

走りは止めずに軍隊に直撃コースで走り続ける。

「おい、なんだあいつ？自殺かよ」

声が聞こえてきた、それだけ近いってことだ。

相手は駆け足、真っ先に導師を殺した輩を殺すと呪って。

俺は疾走、誰よりも速く進みたいと願って。

「しゃああああ！！！！」

槍を突き出して一人目、抜いて、払う、竿状にしまった槍は3人纏めて吹き飛ばした。……鎧付けてないから内蔵破裂したろうな。

「おい、あいつ無茶苦茶強いぞ！！」

よし、相手は浮き足だつてゐる。素人でも分かる。

「オラオラオラオラオラオラ……オルァ！！！！！」

突いて突いて突きまくる、抜く暇すら惜しく、相手突き殺した。相手は先頭から後ろにかけて広がっていく蜂矢の陣もどきを組んでいる。もどきなのはバラバラに並んでいて血気盛んな奴は前に、逆の奴は後ろに、といった感じです。

いま、俺は、先端を潰して、台形の形まで変形させた。

「おい、お前いけよっ」

「っざけんなよ、お前行け！！」

「誰か、行け！後から続く！！」

だれだって、死に行くのは嫌だろう。その心理が俺を助けてくれるのだが……周りには死体が積み重なって身動きがあまり取れない、此処を囲まれて叩かれたら不味いので、後ろに跳躍して再度突貫。

「おおおお、おいっ！来たぞ！！誰か受け止めるよ！！」

「巫山戯んな！！お前行けよ！！」

さらに混乱している敵陣、ざまあみろだ。

相手の先頭の盗賊の目の前に接近する。おいおい、白目向いて「お母さん、じゃあね……」なんて呟いてんじゃねーよ。

膝を折り、跳躍。それだけでステータスに後押しされた筋力は常人のそれを軽く超える。

—— 20mはいったか？

下をちらと見ると上を見て唾然としている盗賊ども。

「驚いてんじゃねえ、これからの事に驚け」
呟いた言葉は誰にも届かず――

「突き穿つ^{グイ}」

体を弓のようにしならせて、

「死翔^{ボルク}の槍^{ホルク}！！」

シュン、と腕から紅い極光を放ちながら消え去った魔槍。

放たれた魔槍は誰にも見つからずに軍隊の真ん中に着弾した。

放った使い手が見たのは、マツハ2に到達しえる速度で着弾した所にいた盗賊が肉片に変わり、飛び散るところだった。

その一瞬で軍隊は瓦解し、狂乱し、恐慌状態へと移行し始めた。

「バケモンだ！！奴はダーカライドの化身だったんだ！！俺達が出してはいけない者だったんだ！！！」

盗賊の一人がきっかけになり、盗賊たちは一斉に逃げ出した。

『ダーカライドってなんだよ？』

（おい、今のお前、さいっこーに輝いてるぜ）

おい、セタンタ。体からつまみ出すぞ。

（人殺して輝くのは魔人ぐらいだよ）

失礼だと思わないのか。仮にも一般人だぞ。

慌てて逃げ出す盗賊……10分の1ぐらいに減った。主に宝具の一撃は壊滅的だった。

その向こうからまた土煙が見える。盗賊の援軍か？だとしたら逃げ

てくれるといいな。

「おっ、おい！！軍だっ！！カサミのゲルニチアの軍隊だ！！俺達
はもうおしまいだ！！」

ん？なんか騒いでる？

あっ！なんか一気に潰されてる。盗賊団消滅した。

ちょー、ゲルニチアの軍だっけ？こっちに来てるんだけど！？
槍向こうだし！！取りに行かねえと！！

（おい！琳！！速く取りに行け！！捕まるぞ！？）

「まじかよ……」

急いでゲイボルクの所に急いで取りに行く。
クレーターのところに行って引きぬく。

急いで槍を構え、クレーターを昇り……

「動くな！！囲まれているぞ！！」

此処に、猛犬を抱えた数日を記す……………

第3話英雄が示す。力の差（後書き）

ええ、少しグダグダになってしていないか心配になっている空アゲです。

見てくれる方、できれば、できれば！感想をお願いします。

それだけで元気に成ります。

それでは、次回作にて！！

第4話槍兵は、力を示す。(前書き)

どうも……私はきついです。

すいません。めちゃくちゃです!!

5話目スイッチオン!!

第4話槍兵は、力を示す。

話をしよう

「動くな！！囲まれているぞ！！」

周りを見渡すと、はい、今度は訓練された兵隊さんです。まだ国に喧嘩を売る時期ではない……そう判断して、

「参った…降参だ。」

両手を出してゲイボルクを地面に突き刺す。その後、両手をゆつくり挙げた。

「名を名乗れ！！」

ん？この声聞いたことある気がする……

挑発的で、俺に喧嘩売ってきて、ボコボコにされた……

「ヘルグスか？」

「なぜ私の名前を知っている！？何処で出会った！？」

怒りながら問いただしてくる金髪ロング君、ヘルグス。

「決闘して俺に負けた騎士サマ、俺の顔を忘れたかい？」

俯き加減の顔を上げてヘルグスを見据え、笑ってやる。

「お前！？あの時の無礼者か！？」

ヘルグスの横から出てきた赤髪のイケメン様、この世界ってイケメン率高いな……

（気、落とすなよ♪ま、俺は結構マシな方だから気にはしないけど

な！！！)

(セタンタ、お前は一回話しあおう、宝具喰らわしてやるから、な！??)

「おいつ！貴様！！聞いてるのか！！」
赤髪さんが怒鳴ってくる。五月蠅いっす。

「あつ、はい。聞いてますよ。」

「スルト、少し待て、こいつに事情を聞かねばいかぬ」
あ、なんかキヤラ変わってる……

「っ、申し訳ありません。」

そう言つてスルト、と呼ばれた兵士は一步下がって待機している。

「なあ、聞いてなかったのだがお前の名前はなんだ？決闘の時は私が名乗りを上げたがお前は上げてないだろう！！」

あーあー、五月蠅いっす。熱血です。松 修造です。

「よかるう！！俺の名はアオカゲだ！！よく覚えておけ！！！！」

(てめっ！！セタンタ！！勝手に名乗りあげやがったな！！)
くっ！このまま黙秘を続けて怒らせようとしてたのに！！

(なんの事だ？俺が勝手に名乗りあげてどうするんだよ？)

(とばけんじゃねえ！勝手に乗っ取りやがって！！)

(……………ZZZ)

狸寝入りか…………よく知ってたな。

「アオカゲ！盗賊どもについて何か知ってるか？」

ヘルグスは歩きながらこちらに問いかけてくる。金髪目立つな……ハッ！イー　ツク

そう、君の名前は飯野くん！！

「おい、聞ってるのか？」

おっと、妄想の世界にinしていたぜ。

「盗賊どもか？……この前、盗賊の首領格の奴を殺したんだ。そして、集結してこつちを殺そうとした。だから、撃退した。」
殺そうと、というところを強調して、正当防衛ということアピールした。

「続きを」

ヘルグスが促してくる。

「九割方は壊滅させれたよ」

「……」

あれっ？なんか不味った？

「ハハハハハッハハハッ、おい！！聞いたか？お前ら！！一人であの数を相手できると思うか？」

前の方の兵士が我慢出来ないとばかりに笑い出した。顔、覚えたかな……

他にも、兵士の皆さんはちらほらと笑いをこらえているのが分かる。

「…………アオカゲ、その話本当か？」

イー ックは疑いを表面に出した眼をこちらに向けてきた。

「紛れもない事実だ、今さっきまでは盗賊という名の証人がいたんだが……、どこかの軍勢に皆殺しされてしまったよ。」

皮肉を交えて声をだす。そうしないとこの軍勢に舐められてしまう、それはいかん

「ムッ……、ならばお前が証明しろ。」

「どういうことだ？」

「兵士二十人とスルト、計二十一名と一斉に戦ってもらう、それができたらお前のやったことを認めてやってもいい、……この者たちは厳しい鍛錬に耐えてきた、盗賊とは格が違うぞ？」

誇らしげに語るヘルグスは嬉しそうだ。

「そして、その者たちからさらに選ばれた、一人ひとりが一騎当百は実現できるぞ？」

挑発も交えてきた、俺は…………

「お前らが一騎当百？笑わせんな！それなら民だって戦えるぜ？」
殺気がこちらに向く。歴戦の勇者なのだろう、一人ひとりの気迫が盗賊とは比べ物にならない。

「それに、俺は一騎当万を軽く越して見せよう」

火に油を注ぐ、とはこの事だ。よく、小説で『殺気で人が殺せるよ
うだ』というが、なかなか的を射ている。

……残念ながら、猛犬を抱えた俺のアイアンハートはそんなモ
ノで萎縮などしない。

むしろ……

「ヒイ!？」

圧倒させてもらおう!受けてみよ!!--一週間ほどで溜まりに溜まっ
たストレスを力に変えて……!!

「……………早く始めるぞ」

あらら、ヘルグスが拗ねてしまった。

「私は拗ねてなどいないぞ!!--」

「お前、心読めんのかよ!!--」

驚きだ。この世界はこれだから素晴らしい!!--

（お前、適応能力異常に高いよな……………）

（一般的だと思うが?）

やりとりをして、決戦の場に向かう……………

二十一人がこちらに対して平行に並んでいる。

相手の装備は、刃つきの槍、剣、斧、思い思いの武器を持っている。
対するこちらは魔槍一本、大変、数の差が開いている。

「用意はいいか?……………始め!!--」

スルトが悔しそうにしているが、残りの15人は「おい、どうする…?」「一斉もだめだった」と戦略を練っている。
俺はというと…

「ほれほれ、そんなものか？」
挑発してます。

「行くぞ!!」
3人が剣を持って駆け出してきた。後ろにまた4人が囲み、次に8人が囲んでいる。スルトは後ろにいるが、無視

「かかってこい!!」
自分、ハイテンションですから……

「ハアアアアアア!!」
剣士が切りかかる、

「シャアアアア!!!!」
振り下ろされる剣に対し、横つ面を叩くように槍を呷ぐ、――こ
れは相当な筋力と、眼が無ければ実現不可能な高等技術。みんな、
憧れたってできるものじゃないからやめとけよ!!

カアアアアアアアアン!!

クルンクルン

グサッ

「な…んだと…ゲフウ!!」
剣士Aはその場に膝をついた。

「ま、まだまだ!!」

剣士Bが猛然と打ちかかる、それを

「無駄無駄無駄無駄無駄!!」
全部避けきっていた。

「クウオオオ!!」

囲まれた第二陣からも斧がくる、剣が来る、槍が突き出される。それもすべて、

「無駄無駄無駄無駄無駄!!」
避ける避ける。

そして……

「無駄あ!!」
なぎ払う。――対多数だところの方が都合がいいのだ。

「「グア!!」」
ポーンと吹き飛んでいく、

「「うわっ!!」」

ドンガラガッシャーン!!
巻き込んでほとんどの奴が気を失っている。
居るのは、

「まだ俺が居るぞ!!」
スルトのみだった。

ゲイボルクを背中にかけて、腕を回す。

空いた手で、親指を人差し指と中指の間に入れて親指の付け根を下に向けて、

「掛かって来い!!」

「てめえ!!ふざけてんじゃねえぞ!!うおおおおお!!!!」
突き立てられていた大剣を抜き、肩に担いで突撃してきた。

「ふっ!!やああ!!」

ブン!

「シャアアア!!」

横に移動して振り下ろされた大剣を避ける。

ガアアン!

うわ………めり込んでるし、

ズボッ!!

………大剣の形で溝が出来てる………。

「なんのお!!せえいやああ!!」

ブン!!

「負けるかあ!!」

ブン!カキンッ!!!

「ぬおっ!?!」

蹈躑を踏んだのはスルト、さらに踏み込むは俺。

ガァァン！ギイーン！！ガァン！！

スルトの顔が見る見るうちに苦悶の表情に変わる。

「それぞれそれ！！」

ガァン！キュウン！！クルンツ、クルンツ……………グサツ

ドサツ

スルトが膝をつく、剣を吹き飛ばされて戦意喪失したのだろう。

「俺の勝ちだ……………スルト」

「ああ、私の敗北だ……………」

「……………ん？なんか既視感が……………はてっ？

こうして、力を見せ付けた琳は、イー　ツク……………っとヘルグスの元
に向かう……………」

第5話槍兵は、王と出会う。(前書き)

6話目、馬鹿げた寸劇のはじまりはじまり、

第5話 槍兵は、王と出会う。

あらずじ〜

場所は変わってカサミ国への道中。

チートはうわあ〜で21もの兵を退けた青景は、ヘルグスの軍隊に
先導されて隊の真ん中にいる。

注：スルト含め琳と戦った者は死んではおりません。ゲイボルクを
使った、という描写はありましたが、石突きなどで、気絶させたり、
獲物を吹き飛ばして（強制）リタイアさせて、青景琳の力を証明さ
せました。決して、死んではいません。大事なので2回言いました。
そして、琳は、今ヘルグス達に話を聞いている。

「なあ、琳。お前はなんでそんなに強いんだ？」

聞いてくるのはスルト。俺にはホモの気はないのであしからず。

「強いからさ」

「それ、答えになつとらん……」

「だな」

「ヘルグス？」

ヘルグスに助けを求める。

「なんだ？」

爽やかに返事を返してくるヘルグスさん、もう一度言う。俺にホモの気はない。

「カサミ国とは何故栄えている？」

「それは、カサミ国は近くに山脈と上質な水があるからな、それで民が移動してきたり、強い装備が作れるんだ。」

ふむふむ、カサミ国は水と装備ね。

「他の三国について何か知っていることはないか？」

「ふむ……アルカシヤ帝国は屈強な兵士が多いことで有名だな。

近くに火山があるからそれ故に上質な鉱石が採れるそうだ、山を使った鍛錬で兵士たちは強力になってるらしいな。……ソールド帝国はな、これといった特徴はないがとにかく人が多い。数で押し切られるためになかなか他の国は手を出せないんだ。」

……アルカシヤ帝国は屈強、良い武器、ソールドはひたすら数の暴力……一番厄介だな。

「なんといつてもトール帝国の兵士には驚くべきものがある。……それはな、足の速さだ。琳、戦闘において足が速い部隊が一つでもあると厄介なことがある。……なんだと思う？」

ヘルグスは此方に目を向けて尋ねてくる。……答えは……

「奇襲か？」

「正解だ、だがもう一つあるのだが、それは遊撃が行なわれるんだ。これほど厄介な物はない、いきなり現れていきなり消えるのだから

な。」

確かに、奇襲も厄介だが、それだけの手札で生き残れるわけ無いな。戦闘の面ではなかなかいい国のような。」

「我がカサミ国は兵の練度では他の3国に優れている。武具、防具ともに上質だから、敗走はなかなか無いぞ。」

「ならば、カサミ国の王はどうだ？」

問題はここだ、俺達の目的は仕えるに値する王がいれば仕えるし、いないなら……滅ぼす。我ながら馬鹿げた大望だということは分かっている。……でも、俺は………

(……心の底から、この大陸を滅ぼしたい!!)

(お前、大概腐ってるな………)

心外な事を言われた……泣きそうだぜ!!

「我が国の王は………」

「なんだ？我が国の王は？」

「それは、我が国についてからだな。」

(なんか、はぐらかされた感じが否めない………)

(俺もそう思う………)

おお！！心の友よ！！！！お前はなかない奴だな！！！！！！

こうして、カサミ国への道のりを楽しんでた。カサミ国に着くまでは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「えらく何かありそうなまえふりだなあ！？」

「「「創造神ちうぞうしんにつっこむでぬわい！！」「」「」

inカサミ国

俺達は、カサミ国についた後、すぐに控え室に入れられた。
ヘルグス曰く、

「王に会いたいのなら静かにしてろ」

だそうだ。怪しいったらありやしねえ、なあ？・・・・・・・・・・・・俺、
誰と話してたんだ？

「母さん、俺、頭狂ったよ……」

（大丈夫だ、問題ない）

セタンタ、それは《著作けーんに反する》だ！！

イノック！！！！！！

コンコンッ

ガチャ

「入るぞ？」

ヘルグス……………

「言う前に入ってるよね？君。」

「固いこと言うな、老人になるぞ？」

プライベートな空間を邪魔されて怒らない奴はいない……………

「それで？なんの用だ？」

「我が王が謁見を許可した。付いて来い」

漸くか……………長く待たせたものだ……………

「分かった、準備をしてすぐ行く。外で待っていてくれ。」

「了解した」

そういつてヘルグスは外に出た。……………さて、

（ゲイボルクはいつでも出せるか？装備は予備あるのか？）

（両方共YESだ。安心して行け。）

これは善哉^{ぜんさい}、急いでいかねば。

ガチャ

「ヘルグス、行こう。」

「ああ、こちらだ。」

くるりと背を向けて歩き出す。

5分後

「此処だ、待ってろ……………我が主！！客を通します！！！」
そついつて扉を開けてこちらを呼ぶ。

「行きますか。」

呟いて、王の間に入った。

「旅人よ、待っておったぞ。」

「はっ」

「聞けば、ヘルグスを一騎打ちで負かせたという。」

「はっ」

「さらに、盗賊どもを一人で殲滅したという」

「はっ」

……… なんて、「はっ」しかいってないんだって？それは
な………

俺だって頂垂れてないで顔上げたいよ。でもね……… 王様が、

顔の造形間違えてて、

でぶっちょで、

脂ぎってて、

トロそうで、

力無さそうで、

見るからに無能ですよアピールしている奴には会いたくはなかった。
顔見たくない………

「汝、何を求める？」

「はっ、なにもいりませぬ。」

俺、いまだに顔を上げない。

「何もいらないと申すか、これは良い人材だ。ぜひとも我が国に来
ないか？褒美も出すぞ？」

「はっ、考えておきまする」

「あーだこーだ」

王様

「はっ」

俺

上ループして、

「……………やっと終わった……………」

「リン、話をしないかい？調練の場に行こう。」

おお、ヘルグス、君は何故のあの王に仕える？

「行くぞ、リン。」

ずるずる、

「俺は肯定してない……………」
眩きは、届かなかった。

（セタンタ）

（なんだ？）

（俺の言いたいこと分かるか？）

（分かるな……………嫌というほど）

（そうか、言ってみろ）

（カサミ国、滅ぼす、みんな、happy!）

（お前がカタコト使うとはなあ!？）

嘔吐の、……………失礼。王との出会いは終了。
これから何を考えて、何処に行く？

ふらふら道中記は始まったばかり……………

第5話槍兵は、王と出会う。（後書き）

カサミ国はどうなるのでしょうか。
作者にも分かりません。

それでは、次回作にて……………

第6話俺は訓練で、新能力で（前書き）

やったーやったーっいてーる。

男の人ならっいてーる。

えー、7話目です。どうぞ。

第6話俺は訓練で、新能力で。

今日は、快晴だ……………

なんて、美しいんだ……………

俺は……………なんで……………

なんで……………

「手合わせしてんだよお……………!!!!!!」

ジャキッ

四方八方から鳴らされる武骨な鉄の音。

相手はフル装備で8人で囲んでいるんだが、俺の装備は……………

……………チャキッ（情けない木の槍）

母さん、俺もうだめだよ。どうしてこうなったんだよ……………

side out

ヘルグスに連れてこられたのは訓練場。

「おい、アオカゲ！さっそく手合わせといこうか。」

「遠慮しておくよ。ははは」

「おい、そっちから8人呼んでこーい」

「「応っ！！」」

えー、武人というのはスルースキル高いだろ………
《B+》ぐらいあるだろ。

話が逸れた…

「「よろしく願いします！！」」

「遠慮します！！」

ジャキッ

「おい！……武器ねえぞ！？殺す気か？」

まあ、出せるんだけどさ、ゲイボルク。怪我させたらまずいな。

「ほらっ、受け取れっ」

ヒュンッ

カサッ

音が頼りないなあ！？カサッ、ってなんだよ！！

刺さっている槍を抜いて検分すると、

木の槍：攻撃力+5（MAX）

防御力-3（無効）

（頼りないな…………セタンタ。）

（そうだな…………琳。）

「ほれ、いくぞ？」

「ヘルグス、そこで待っている。…………直ぐにぶん殴るから。」

「ちょ！？アオカゲ？それは、不味い…………」

なんか言ってるけど無視無視。それよりも、戦わないとな。

「ぬうおお！！ぬんりやああ！！ぬうらあ！！」

掛け声と共に突っ込む俺。…………しまった！！世紀末覇者の掛け声に！！

ガン！ガイン！！ボクッ！！！！

…最後のは俺の武器が相手の鳩尾に入った音な。

「次っ！！」

「お願いします！！…………セイツ！！」

兵士は剣を振りかざした！！

アオカゲは槍をガードに回した！！

バギッ！！

テレレ〜ン、アオカゲの武器は壊れた！！

「……………なんでやねん！！！！」

空に突っ込んだが、返事は剣だった。

ブンッ！ブンッ！ブンッ！

「ぬうおおおお！！！！」

アオカゲは拳を振り回した。

ガスッガンガンっドスドスドス

「オボオアオオオオ！！」

可哀想に兵士よ、今楽にしてやるからな……

（お前が足掛けて転ばして上獲ってガスガスぶん殴ってるからだろ……）

（気にするなよ……）

「次っ！！」

「お願いしま……おぶう!!」

(お前外道だろ……)

(違う……と思う……)

あれ?なんか自分の事なのに断言できない……

…まあ、気にしないでいこう!!

「次っ!!全員掛かって来い!!」

「「お願いします……ぎゃああ!!」」

全員一撃で沈めて、すぐにヘルグスの所にダッシュする。

「畜生。居なくなったか……」

覚えとけよ!!…と心に刻んでその場を後にする。

side out

side???

訓練の最中に異変は起きた。

なぜか、部下が訓練をしないで訓練場の真ん中の方を見ているので

すぐに分かった。

「おい！！休んで言いといった覚えはないぞ！！」

その言葉で気付いたのは少数の兵だけだった。……こういう時に女の声は大声を出しにくいから困る。

ふと、気になってその場に行った。

「わ、わ！申し訳ありません！！アリニチュア殿！！」

「何故、余所見をしていた？」

他の者達も気付いたようで此方に向いて敬礼している。

……答えが返って来ない。

「何故だ？」

再度、問う。

「……………それは、少し、手合わせを見ていたもので。先ほど来た旅人と手合わせしていたので、つい……………」

「そうか、……………全員、二人一組になって打ち合え！！」

「」「応！！」「」

指示をだして、先ほど、兵士たちが見ていた方を見る。

……………途端、見惚れた。見惚れてしまった。

手合わせしている黒髪の男は蒼い服を着て、それに三人の兵士が掛

かつて行ってる。

近くには吹っ飛ばされたであろう兵士が伸びている。
男は無手というわけでは無かったらしく、折れた槍の残骸が転がっていた。

……そんな事はどうでも良かった。手合わせしている兵士はそこらの兵士なら十人掛かつて行っても倒せるほどに屈強な兵士である。
それなのに、あの男は軽々と避けている。

受け止める、なら分かる。実力が上なら受け止めるぐらいならでき
る。……しかし、避けるというのはなかなか出来るものではない。

………戦ってみたいと、思った。

「おい！！その旅人！！私と勝負しろ！！」

いつの間にか、槍を取り出してぶん投げてた。

s i d e o u t

s i d e アオカゲ

「おい！！その旅人！！私と勝負しろ！！」
ん？あんた誰だし……って。

（琳！！逃げる！！）

「分かってるっーの！！」

槍が飛んできてた。しかも俺のいる場所ジャストでな！！

すぐさま回避行動をとるのだが、戦闘終了直後ということで俺も、セタンタも油断してたんだと思う。

（おい！！能力解放しろ！！今なら出来る！！）

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

（んなこと説明してる暇なんてねえ！！開放の言葉は最速の英雄だ
キワード
！！）

（いやいや、それなんて厨二病？）

「死ぬぞ？」

確かに聞こえた。

そこにいる女が呟いたのが確かに聞こえた。

「はっ？巫山戯るなよ？……最速の英雄」
クイ・フリーン

髪は逆立ち、目は蒼くなり、筋肉は膨張し、背は高くなり、槍が出現し、槍は赤く紅くなり。

……とにかく、

強くなったのは分かった。

女が投げた槍は直ぐそこまで近づいていた。前の自分なら避けられない距離、速さ。弾けない速さ、距離。

でも、

今なら、躲すことができる。……弾くことができる。

ガキンッ

ゲイボルクで一閃すると弾いた。

落ちてくる槍を掴んで女の元に投げる。

「きゃ!？」

女の足元に刺さった。

……やべ。やっちまった。

「大丈夫ですか？」

……自分でやっというてなにしてたよ。ただの挑発にしか聞こえねえじゃねえか。

「くっ……もう一度言います!!勝負をしなさい!!」

「断りますっ!!」

俺の心からの叫びは

「勝負だ!!」

武人によるスルースキルで滅殺された。

トトトトトトト……ズサッ

「いざ……尋常に勝負!!」
そう言って槍を突き出してきた。

「見るが良い!!人間の限界を!!」

サツサツサツ（ただの横ステップ）

「全部避けただと!？」

「見るが良い!!人類の進化を!!」

ヴァサア（ただの足払い）

「うわぁ!!」

「見るが良い!!新宿の若者を!!」

ピタッ（ゲイボルクを首に突きつける）

「……降参」

両手をあげて《負け》を表示する女。

「よし、んじゃばいばい」

これ以上厄介ことは嫌だ。

「なっ!?!待ちなさい。旅人!!」

「旅人じゃない!!アオカゲだぁ!!」

そういつて、調練場を後にした。

第6話俺は調練で、新能力で。（後書き）

いざー！！ここから何が起こるかはお楽しみに。

空アゲの「英霊の魂を持った旅人」も見てください！！

第7話蒼き槍兵、欠席す

sideアリニチュア

あの男はアオカゲと名乗った。あの男は強く、第一突撃隊の隊長すなわち、戦闘力というと国の中で1、2を争うはずの私が簡単に負けてしまった。それこそ赤子の手を捻るかのよう。あそ……ま！」ここまで簡単に負けたのは師匠にしかない、それにあの時は幼い時で、この国に入隊するときは「……様！」師匠にも負けることは無かったのに……ハッ！なんでここまであの男について考えているのだろうか？「アリニチュア様！」

「な、なんだ！！いきなり！！」

「何回も呼びましたよ！何を考え事してたんですか？……ひょつとして、さっきアリニチュア様を負かした男について考えていたのですか？」

「なっ！！馬鹿な事をいつてるんじゃない！！あの男はな……（中略）意外に格好良くてな……（後略）しかし、私が惚れた訳ではないぞ！？……（全略）……分かったか！？」

嗚呼、かわいそうに、この部下は何分もこの人の色恋話に付き合われる事に……南無。

「よーするに、アリニチュア様はアオカゲ様が好きなんですね。」

「なっ！？そんな訳ないだろう！！」

必死になつて否定する彼女だが、紅くなつた頬は隠せずにいた。

「そうなんですか。」

「ところで、なんで私を呼んだんだ？」

「おお！！思い出した。国王が呼んでいましたよ。なんだか会議のようでしたが……」

「お前っ！！それなんと言わなかつたんだ！！」

「すみません、忘れていました。」

てへっ、といったかんじで笑っている部下。1人漫才をしている部下を尻目に慌てて城へと向かうアリニチュア。

side アオカゲ

「まったく、なんだったんだ。さっきの女は……」

（まったくだ。だが、奴は武人としては結構強い方だと思うぞ。この国とやり合うなら注意しろよ）

「真面目に国と戦おうと策を練っているお前がすげえよ……」

（はっ、俺は早く強え奴と戦いたいだけだよ。）

「そうか、そうか。それはいいな……、作者も今後についてまったく見通しがついてないらしいしな、まったくもって未来はわからない。だが！それがいい、未来が分かってちゃあつまらないと思う。お前もそう思うだろ？」

（リン、お前、さっき不穏な発言が聞こえたのだが……作者って……ヘブツ……！）

「おい……！どうした？セタンタ？セタ ヘブツ……！」

なんだ……？上から金ダライが……ガクッ

side???

「報告いたします。世界の招来者がカサミ国に入りました。」

「そうか、いい。下がれ」

「御意」

：招来者が何をするのか。我が国に有益なことが、はたまた災厄を
もたら
齎すのか、一度会ってみなければな。

常に赤き鎧を纏い、腰には豪勢な装飾がしてある剣を下げている。
ソールド帝国：総帥：ナガルディ・ソールドは、玉座の間を後にし
た。

side???

「報告します。例の男がカサミ国に入りました。：如何いたしましたし

「よう？」

「フム……」

アルカシヤ帝国、王のメルデス・アルカシヤはゆったりとした服・ローブに近い。

銀に輝くヒゲが特徴的で、キンムのマーリンみただったが、目が鋭い。

「細作を放っておけ、数は……30だ。」

「……ッ……30、でございますか」

「そうだ、正体を必ず突き止める。」

「ハッ！」

そう言っつて細作は闇に消えた。一人になったメルデスは……

side???

俺ことエイゲン・トールは、王になっても前線に出ることをやめず、

ひたすら敵に負けることなく戦い続けた。その結果が、《無敵王》という称号だった。他の、ナガルディ、メルデス、そして、異端者を迎え入れた、《愚王》ウェイバー・カサミにはない、武芸の心得、それも、前線に立つことで士気を上げて戦い続けた。そのお陰で此処まで生き延びれた、と思う。

しかし、今、この大陸に異端者が現れて、4国の均衡が破られることは必至。四つ巴になったときに、真っ先に負けるのが自国だろう。そう考えている。他の臣下からすれば、我が国が最強だ！！と思っているかもしれないが、我が国は、弱い、その為に、あの《異端者》を我が国に入れるほかない。

《異端者》の二つ名は多々ある。《蒼い鬼人》だとか、何千のも賊を単騎で打ち破ったことから《化物》などと呼ばれている。

そのような者がくると我が国にとってとても有益なこと、是非とも来てほしい。

そして、一番《異端者》が来てほしいのは盗賊たちを単騎で打ち破った。ということが欲しい。民にとってもそのような者が居るとそれだけで民が安心する。そのために、

「細作を遣わせい！！」

声を掛けると直ぐに部隊の者がやってくる。女も居るらしく、この隊員は男のようだった。

「いかがいたしました？」

「《異端者》に使いを、他の細作に気取られぬように、あらゆる手を使ってでも連れて来い」

「御意に」

シュバツ、と直ぐに消えてなくなる。

「さて、これからどうなる……………」

sideアオカゲ

「んっ…………うわっ！！やめろよっ！！…………アッ…………！！」
危なかった、あと少しで禁断の場に入る所だった。

「やらないか？」

「…幻聴幻聴」

（やめろっ！やめろ！てめっ！！アッ……………！！）

お前もか、セタンタ…………

合掌

s
i
d
e
o
u
t

第7話蒼き槍兵、欠席す（後書き）

他の三国が動きを見せ始める。《愚王》の称号をもつウェイバーだけが動きを診せない。

青景琳を中心とする渦はどこまで広がっていくか。

次回！！「茶漬けはやっぱりモ○ナガ！！」

レッツ！空アゲでした。

第8話三国が暗躍 槍兵は…（前書き）

空アゲです。

この作品の方針は、戦闘でガンガンいこうぜ。ですので、恋愛がくるかどうか分かりません。しかし、戦闘が好きな方はガンガン来ようぜ。の方針でもあります。

さて、評価、感想。ガンガン来いや！！バッチコーイ。

第8話三国が暗躍 槍兵は…

sideアオカゲ

「ん・・・？」

ムクツ、と体を起こす。なぜか中庭で寝ていた。それもうつ伏せで。そこから導き出せる答えは……

「曲者だあ！！曲者だあ！！出会えー！出会えー！」

くそっ！いつの間にかやられてた！油断してたぜ…。しかし、近くに金ダライだあるのが気になる。

あつ、なんか頭痛い。毒盛られたか？

…そうだっ！セタンタが居たんだ。どこ行つた？

「セタンタ、居るか？」

返答、無言。

「まっ、寝てんだろう。」

あいつの事だからそうだろう。いつも俺の心をぐちゃぐちゃに踏み荒らしてくれる英雄がいないと、嬉しいなあ！！

シュタツ

「アオカゲ様。ですか？」

「誰だ？あんた」

「死んでもらおう」

いきなり言ってから此方に突っ込んできた！！

シュタツ

「アオカゲ様！お守りいたします！！」

ジャキツ

俺も直ぐにゲイボルクを取り出し、構える。

「そこに居てください！直ぐに片付けます！！」

その言葉通り、二、三合打ち合って、切り捨てていた。

「ふう、危なかったですね」

此方に歩み寄ってくる

「お前、誰だ？」

「その前に、武器をしまってくださいませんか？敵対の意思は有りません。」

手をひらひらさせながら腕をあげて降参のポーズを取っている、が、

「油断したら即、殺される」

構えを解かない。こいつが信用できるまで、決して信頼ではない。

「それでは、このまま。…トール国国王、エイゲン様が貴方をお待

ちしています。急ぎ、私と共に来てください。」

「信用できん、いけるか。」

…心配がする。

「おい、お前、名前は？」

「セルでございます」

「そうか、セル、…近くに変な奴がいるんだが、お前の差し金か？」

「…！、いえ、私の他には細作は放っておりません」

細作…スパイの事が。

「ならば、セル、お前が殺してみる。数は5、殺さないと、今、此処で、貴様を殺す。いいな？」

セルは直ぐに周りを伺っている。

「はっ、それでは、中庭でお会いしましょう、そうですね…4半刻ください、5人全て殺して見せましょう。」

「4半刻…わかった。ちょっと待て」

4半刻…タイムを計測しないとな。携帯はつと、

「？…それでは」

そういつて歩き出すセル。おっ！5人全員着いていった。…ってことは俺が目的じゃない？

俺も中庭へと向かった。

「!?!」

テレーン!くそう!見つかった!!

「1、2、5、8、10、13、15…っち!」

15人着いてきやがった。おいおいおい、全員殺すか?いや、殺さ
んでいいか。

■

「in中庭…って事でやって参りました。青景です。」
悲しい一人実況してます。

「暇だな・・・」
と、呟く。

呟くと、余計暇になつてきて、

「暇だな・・・」
また、呟く。

このまま、永遠のループになると思いきや、

「アオカゲ様、終わりました。」
セルがこちらに来ていた。…ループ、しなかったな。

「アオカゲ様、御明察です。ぴったし5人居ました。」

「そうか、ちょっといいか、……あと15人いる。お前の所か？」

「いいえ、私の方の国ではありません。」

「信用してもいいか？」

「もちろん」

短い会話ですませる。

「ならば、信用しよう。」

「ありがたい」

「此处、カサミ国に用は無いや、トール国に連れて行ってくれ。」

「了解しました」

セルがそう言つと、徐におもむろ

「水よ、この者を隠匿せよ」

と、眩き、琳の体が薄い青色の水に包まれた。

「これは？」

「この魔法は隠匿の魔法です。……まあ、大きな魔力を持つ者と女性の魔法使いには一瞬で見つかりますから気休め程度ですね」

「そっか、戦闘になると破れるのか？」

琳が質問すると、

「はい、戦闘以外でも強い衝撃が加わると破れますね」と、セルが言う。

「それでは、行きましょう。この国から早く出ないと細作にバレます。」

「分かった」

「それと、…風よ、我らの話を阻害せよ」

風が一瞬吹いて、琳とセルの周りを一周して消えた。

「聞いたところ、他の者に俺達の会話を聞こえさせなくする魔法か？」

「その通りです。…さっ、行きましょう」

——— こうして、俺達はカサミ国から出ることにした。

■

side???

カサミ国某所

上からいきなり招集されて呼ばれると、同業者が何人も居た。時々

見た顔もある。

いきなり手紙が渡された。なんの説明も無しにだ。

「これにて解散する。」

前に立っている男がそう言つと、同業者たちが一斉に立ち上がり、そろそろと帰り始めた。

俺も外に出て誰にも見つからない所を見つけるとそこに行つて手紙を開けた。

依頼：アルカシャ帝国から

目標：アオカゲ リン

依頼内容：同上の者を偵察し、危険性がある場合は速やかに抹殺せよ

報酬：貴族の位にする

—— 大変だ。アオカゲといえば《鬼人》として名を轟かせている。その者を抹殺とは……いや、しかし暗殺なら話は別だろう。俺でも十分に殺れる。

手紙の下には、

読み終えた場合、速やかに燃やして処分せよ

と、書かれていた。

「火よ、燃えろ」

魔法を唱えて直ぐに処分する。

「急がねば」

直ぐに路地裏の闇に消えていった。

第8話三国が暗躍 槍兵は…（後書き）

感想、評価くださいね

第9話トール国（前書き）

評価、感想ガンガン行こうぜ。

第9話 トール国

side アオカゲ

パカラ、パカラ、パカラ

「なあ、セル？ トール国まで何日かかるんだ？」
前にいるセルに疑問を投げかける

「カサミ国から徒歩で4日、馬は2日で行けます」
すばやく返答するセル。…こういう時、セルは秘書めいた感じがする。

「そっか……」

パカラ、パカラ、パカラ

馬を走らせて3時間ぐらいだろうか。見るものは前にいるセルの黒装束と、青空だけ、いい加減うんざりしている。

「なあ、セル？」

「何でしょう」

「何日かかるんだっけ？」

「徒歩で4日、馬で2日です」

「そっか……」

もう無理だ……こんな暇な時間何をせよと？

パカラ、パカラ、パカラ、パカラ

馬の蹄が地面をうつ音が耳に心地いい、すこし、眠くなるね。

「アオカゲ様、そろそろ夕暮れですし、野宿いたしましょう」
振り向いて言うてくるセル。…気づいたら、夜がもう近づいていた。

「そうだな。…ここ、なんか獣類出る？」
ぴたりと馬を止めて、少し考えてから、

「こちら辺は来たことがありませんけど、同業者の話では、ベアウルフが出るそうです。…ベアウルフというのは、オオカミがいるでしょう？そいつの力が熊並みに強くなった変異種のことですね」
セルは、説明しながらも補足をいれてくれて、分かりやすい。

「ってことは、そのベアウルフが出てくるのみにと、そういうことだろう？」

「はい、その通りです」

「んじゃ、いつも旅人はどうしてるんだ？」

「普通ですね、気にせず寝てます。ベアウルフは基本昼間しか動きませんから。」

「そうなのか……、でさあ、天幕とかはどうする？見たところそんな物持つてる様子はないけど。」

実際、剣と、小さいポーチだけである。——あつ、魔法で作るのか？

「この、袋のなかです。」

ポンポン、とポーチを叩いてそう、言い切った。

「その中？嘘言つなよ…魔法で作るんじゃないのか？」

「いえ、魔法で作るんじゃないくて、魔法で袋の中身を広げてるだけです。結構高いんですよ？」

便利な魔法だね、羨ましいよ。俺も使ってみてえな。

（やめとけ、つーが無理だ。お前さんには魔術しか使えねえよ）

ああ眠い死にそうだ、と呟くセタンタ——胡座かいて欠伸してる様子が目に浮かぶ

（おお！俺の中の悪魔！！いままでどうしてたんだ？）

（いきなり悪魔とはいいい挨拶じゃねえか、……死なすぞ？…主に索敵で報告なし）

（ふっ、甘いなあ、俺が死んだらお前の魂も死ぬぜ？）

そうだったー忘れてたぜーチクシヨオオオオと叫んでいる。——正直うるさい。

「アオカゲ様？聞いてますか？」

怪訝そうに聞いてくるセル。——しまった、セタンタとの会話ですっかり失念してた。

「悪い悪い、ちと考え事してた。」

「そうですか、それで、もう一回言い直しますね、…今日は此処で夜を明かしますけれど、夜明けと共に出立します、それで、馬に乗って一日走り通せば都市に着くでしょう。ちなみに、トール国の首都の名前は《コーンウォール》です。覚えといてくださいね。…そして、初日は街を歩きます。本来、あと数日時間があつたので。」

――長文ありがとうございました。

「わかった。それで、俺はトール国に着いたら俺はどうするんだ？王様に謁見でもするんか？」

「はい、まずは秘密裏に会ってもらい、そこから、公式的に謁見してもらいます。」
とセル

「そっか、……カサミ国はどうなってるんだ？」

「おそらく、大混乱でしょう。総手を上げて搜索又は、殺害のどちらかでしょう。…トール国に着いたらそのようなことはありません。ご安心を」

「そうか、んじゃ、これで質問は終わりだな。…天幕を張ろう」
おれは、敢えて明るく振舞うことにした。《殺害》という単語が出てくると、やっぱり怖い。自分も人を殺したというのに殺されるのが怖い。なんて、

「なんて、エゴ」

そう、呟いた。呟いて、自分があまりにも愚かしくて、

「ははっ……」

乾いた嗤いしか出てこなかった。

「どうしましたか？体調が優れないのですか？」

心配そうにこちらを見ているセル

「大丈夫だ、問題ない」

そういつて、既に組み立てられていた天幕の中に入る。

——すこし、時間が経つのが早かったようだ。

「悪い、すべて任せちゃって」

「いいですよ、楽だったんです」

丁寧な言葉を返すセル、それに俺は、

「ありがとな、おやすみ」

と返す事しかできなかった。

「おやすみなさい、アオカゲ様」

セルの言葉を背に、天幕の中に入った。

sideセル

「ふう・・・」

ようやく、一息つけた。周りには草木などは無く、青景 琳を殺そうとする輩は隠れることはできない。——— もっとも、隠蔽の魔法を天幕に刻み込んでいて、それこそ、最高の魔法使いが来ない限り破られないような最高の魔法であるので、安心できる。これで、アオカゲ様を無事に我が国に送り届ければいいのだが……

すでに、青景 琳の名前は大陸中に広がっている。単身で数千の盗賊を壊滅に追い込んだのだから当然といえば当然である。

周りの様子を窺ってから天幕の中に入り、セルも眠りに着いた。

s i d e ???

「ここの近くだよな？」

「ああ、そのはずだ。隠蔽の魔法がかかっているても大丈夫だ。
解呪^{アンチ・マジック}

の巻物を持ってきているからな、大丈夫だろ」

青景に危険が迫る……………

第9話ツール国（後書き）

はい、空アゲです。

感想、評価ガンガン来てください。ユーザー登録してない方でも感想行けますので、よろしくう！！

第10話 戦闘準備〜戦闘開始（前書き）

9話における補足を致します。・・・本来、9話のあとがきに書くべきなんですが、筆者が未熟ゆえに忘れておりました。

「コーンウォール」とは、

コーンウォールとは、アーサー王伝説で有名です。

Fate/zeroでは、セイバー（アルトリア）の宝具であるヴァロンが出土した場所です。

第10話 戦闘準備→戦闘開始

sideアオカゲ

—— 目え覚ませ

パチリと目が覚める。

身を起こし、周りを見るとセルは寝台の上にはいなかった。

「・・・どうということだ？」

疑問は声になって出てきた。

しかも、気になることは幾つかある。—— 一つ目は、周りの音がしないこと、二つ目は、自身に魔法が掛けられている事。青いベールが自身に掛かっていることから隠匿の魔法だろう、と見当をつける。

万が一の為に小声にして話しかける。

「セタンタ？いるか？」

（おう、漸く目覚めたか、結構声掛けたんだぜ？）

元気そうな声が聞こえて、無意識に緊張が緩んだ。—— セタ

ンタはやっぱり信頼できる。今回のことでしたっけ検証された。

「周りの状況は？わかるか？」

（……あまり分からない。セル？というやつがいきなり跳ね起きて出て行ったのはついさっき。）

その報告を聞いた俺は迷わず天幕の外に出て行ってた。

s i d e セル

カランッ

カランッ

カランッ

「……」

結界の警鐘が鳴っている。我々に害を為そうとしている輩にしかないはずの警鐘が鳴る。

その結果にたどり着いた自分は跳ね起きる。そして、アオカゲ様の所を見る。

—— 幸い、アオカゲ様の身柄は確保されていない、即ち、まだ結界を破ろうとしている段階、対処は十分に間に合う。そう、答えを出して外に飛び出た。

s i d e ????

カランッ

カランッ

カランッ

「おいっ！まずいぞ！！結界の防衛装置が発動したぞ！！」

俺の相棒が声を掛けてくる、けど、

「ちくしょう！なんでっ！！」

アンチ・マジック

解呪の巻物は十全に発動している、だけど、結界を解除できなかった。

逆に、こちらに害を為そうとしている魔法が自動で発動している。

これだけのことが出来る魔法使いはなかなかいない。

前の報告では、「セル」という人物は《剣の腕前は上・魔法の扱いは下》という報告がでている。その為、アンチ・マジック解呪の性能もそれなりの物で済ませたのだ。

「おいっ！くるぞっ！おそらく《セル》だ！」

そういつて腰から剣を抜き距離をおく俺達、天幕の扉が勢いよく開け放たれた——！！！！

sideアオカゲ

外に出ると、セルが2人組みの男と戦っている光景が自分の網膜に投影された。

「セル！！」

「なっ！！アオカゲ様！！危険です。下がってください！！」

かなり切迫した表情をしながら叫んでいるセルを見て、自分は、

「だが！断る！！」

叫んでかき消した。

「ちょ！？アオカゲ様あ！？」

セルはなにやら慌てているがそんな事知ったことか、付き合いは短い仲間、友人であることに変わりはない。

「出る」

腕を突き出して魔槍ガイボルクを呼び出す。それとほぼ同時に、

（おっ！？殺り合うのか？なら……俺に戦わせろよ！！）

セタンタが叫んだ瞬間体の自由が効かなくなった。……畜生、セタンタの野郎、無理やり奪いやがった。

「さて、と。……んで、てめえらは俺の敵でいいんだよなあ！？」
槍の穂先で襲撃者を指している自分の体を見つめている自分、……ほんとう、変な感じた、……なんで俺、こんな冷静なんだろう。訳が分からない。

「アオカゲ様！？本当にアオカゲ様ですか？」
あっ…セルがなんか混乱してるし…まあ、いきなり人が変わったように口調が変わってるんだから無理もない。

「ああ、俺は青景だよ、この体はなあ！」
自分の体が一瞬で屈んで飛び跳ねた。……全身が麻酔かけられたみたいだ。

飛び跳ねたと錯覚したほどに素早く走り、襲撃者の右手の男に接近して槍の竿の部分で横薙ぎにする。それだけの動作は、

奴らには、捉えられなかった。

「ゴフッ！！」

比較的大柄な男がそれだけで吹き飛ぶ。……転がった奴は気絶して

るみたいだ。

「なっ！大丈夫か！？」

小柄で、如何にも魔法使うぜ！！って奴が驚愕の声がこちらの耳に届く。

「他人の心配するなら自分のしてな！！」

背中越しに柄を突き出す。柄は魔法使い風の男に当たったが、男がぎりぎりで後ろに跳んだことと、セタンタが相手を甘く見て、力を緩めてたことで脇腹を掠めるだけで終わった。

「痛うつ！くそっ！！瞬間移動！！」
レポート

男は膝をつくと、すばやく懷から巻物を取り出して叫んだ。……瞬間、男の体は白い粒子で包まれて、消えた。

「つくそ！！逃がしたか！」

後ろからセルが悔しがる声がある。……あんな口調すんのだな、素は。

「おいっ琳、代わるぞ」

セタンタが小声で呟いて体の自由が戻った。

「後で話がある」

俺はセタンタに声をかけた。

（へいへい、覚悟してまあす。）

あくまで適当にかえすセタンタ。……見てろよ。

必ず、痛い目みるぜい？

第10話 戦闘準備〜戦闘開始（後書き）

評価、感想。

お願いします。それだけで作者はうれしいです。
これといった効果はありません。

第11話 青景だよ！全員集合！！（前書き）

題名にこれといった理由は有りません。

評価、感想、お願いします。

第11話 青景だよ！全員集合！！

sideセル

「セル！！」

アオカゲ様が天幕から出てきた。彼の二つ名も忘れて、

「なっ！！アオカゲ様！！危険です。下がってください！！」
と、叫んでしまった。

「だが、断る！！」

「ちょ！？アオカゲ様あ！？」

何を言ってるんだこの人！！護衛の対象なのにノコノコやって来るとか「俺のこと殺してください」と言ってるようなもののに！！頭沸いたでしょ！この人お！！

「出る」

槍が空間から出てきた。あれ魔法で出来たかな、空間魔法なんてそう出来ないはず。

「さて、と。……んで、てめえらは俺の敵でいいんだよなあ！？」

あ、なんか人が変わったみたいに性格がおかしくなった。

本当にこの人アオカゲ様なのかな？乗っ取られてんじゃないのかな、悪霊とかに。

「アオカゲ様！？本当にアオカゲ様ですか？」
疑問形でぶつけてみる。

「ああ、俺は青景だよ、この体はなあ！」

なんか、アオカゲ様じゃない気が……心なしか目が真っ赤だし。

いきなり、アオカゲは消えたかのように走りだして、大柄の男に肉薄して槍を呷いだ。……すごい、先端が霞んで見えた。

「ゴフツ！！」

大柄な男が飛んでいく、あの力は何処から出てくる？あの、細い体の何処に。

「なっ！大丈夫か！？」

一瞬で相方を片付けられたのが相当驚いたのだろう、体が相方の方へ向いている。

「他人の心配するなら自分のしてな！！」

アオカゲ様は右の脇から抜くように槍の柄を突き出して小柄な男を狙う。しかし、狙いは外れ、男の脇腹を掠めるに終わった。

「痛うつ！くそっ！！瞬間移動^{テレポート}」

「つくそ！！逃がしたか！」

あそこで小さな方の男が逃げたのは不味い。やるなら二人とも捕まえるべきだったのだが……まあ、大柄な男をとことん拷問すればなんとかなるか。

私は、大柄な男を縄で縛るため男のほうに近づいた。男はうつ伏せで、気絶しているようだった。

「セル、怪我はねえか？」

アオカゲ様も此方に合流するようにやって来る。

「はい、大丈夫です。」

男に近づくと、

「水よ、彼者を縛れ!!」

すると、私の手から水が迸り出て、細く細くなりながら絡みつき、縄の形を取り、男の腕を締め上げて拘束する。これで、まず拘束が解除されることはないが念の為に、

「（ゴソゴソ）…… よつと、…… 魔法封じ（マジックブレイク）」

巻物から紫色の紋様が飛び出て男の体の大きさに合わせて広がり、巻きついた。

「セル、今のは？」

アオカゲ様が不思議そうに聞いてくる。

「今のは魔法封じ…マジックブレイクと言って、自身の魔力を込めて発動する形の巻物で、込めた魔力の2倍の魔力を込められるまで封じ続けるというくそつたれな巻物です。」

「ということは、セルの魔力の何割かを預けて、男の動きを完璧に封じた」と

「そういう事です」

アオカゲ様の理解の速さには助かる。此方の者は頭の回転が遅いものばかりで困っていたところですよ、ますます此方の国にいいじゃないですか。

「しかし、油断は出来ませんので、先に問題を解決しておきましょう

う。」

「……どんなやり方だ？」

何をやるか、とも聞かないとは本当に頭が切れる方だ。

「まずは簡単に出来ることから、……^{これ}之を」

さて、私に取り出した物はナイフと蠟燭。

「ククク…お主も悪よのう」

「アオカゲ様……いえ、お代官様も負けておりませぬよ」
む？どっかから変な流れを感じる……

さて、私に取り出した物はナイフと蠟燭。

「お、んじゃちょっといいか？」

アオカゲ様がなにやら楽しそうに笑いながらこっちに来る。

「どうしました？」

「いや、火、着けようと思ってさ」

「そうでしたか、それでは」

私は蠟燭を彼に渡す。

「ありがとう、んじゃ」

アオカゲ様は蠟燭を目の前に突き出して指を動かす、それだけで蠟

燭に火がついた。

「すごいですね、詠唱なしで行えるんですか」

「ん、まあそんなところ」

いま起こったことに満足しているのかうんうんと頷いている。

本当に、おかしな方だ。

槍を持てば戦神の化身、かといったら魔法の行使ひとつで満足している。

——おかしな方だ。……大事なことなので二回思った。

「それでは、L e t s、サイエンス！」

「れつつ？さいえんす？なんですかそれ？異世界の言葉ですか？」

「おお！横文字おkかと思ったらアウトなのかよ。……まあ、いいか」

「まあ、あとで聞きますからね、それでは始めましょう」
火がついた蠟燭も丁度いい感じに蠟が垂れ始めているので。

そして、アオカゲ様が蠟燭を傾けて気絶している男の頭に蠟を垂らした——！！

第11話 青景だよ！全員集合！！（後書き）

だいぶ手抜き感が否めない作者です。

投石でも降槍でも感想でも評価でも受け付ける作者ですのでこれから宜しくお願いします。

第12話 メキシコって日本の裏側だったような……いや、違うか？（前書き）

2話連続で全く意味のない題名を付けている空アゲです。

評価が増えないのでちと凹んでいます。評価をたのもー！！

第12話 メキシコって日本の裏側だったような…いや、違うか？

sideアオカゲ

垂れた蠟は男の首筋に直撃し、直ぐに冷え、固まる。

「ぬお お」

男が苦悶の表情を浮かべてはいるが、まだ気絶からは回復していない。

メタ アから元ネタを……

「おいっ、起きろっ」

声を掛けながら体を3回叩く。

「ううん」

クソッ、まだ起きぬか、しぶとい奴め。

「おーいつ、起きろよ」

また体を3回叩く。

「うつ、なんだ？ 一体……」

おーおー、漸く起き始めたか。

——あと一息

「起きろつつつてんだろう！」

一転、荒々しくぶっ叩く。

「アオカゲ様……そんな趣味が……」

「なにいつてんだ馬鹿者！」
俺はそっちの趣味はねえ。

（氣い抜いてると《アアー——！！》ってしちまうってか？）

（セタンタ、お前はそのネタ何処で仕入れた……）
なんかもう、疲れてきた。

「！！……畜生、捕まっただかって……痛い！」

「それ当たり前、蟬垂らしたんだから」
男がもぐが拘束の魔法がそれを許さない。

バカめ、うではまほうがかかっている！！

ちよいとドラク　みたくなっちゃったが関係ねえ、さっさと話を聞くとするか。

「なあ、お前、なんて名前なんだ？」
交渉は優しくいきましようと母親に言われた気がする。

「（、A）　ケツ！お前に名乗る名前はねえよ」
いや、めっちゃ睨まれてんだけど、しかも台詞に顔文字入ってる気がする。

……ともかく、

「名乗らないのか、それじゃ仕方がない、名無しの権兵衛よ、お前を遣わせた馬鹿野郎は何処の何奴だ？」

「俺が言つと思つてんのかよ!」

「いや、思つてないけども……念の為に、ね」

優しく笑いかけてから、（お前の笑いは不気味だよ……）失礼な。

「セル、やああつておしまああい」

「あらほらさつさ」

セル、きみは電波かなんかを拾ったのか？ギャグでやったんだけどね

ともかく、だ。

セルは蠟燭を垂らしている。

ポタ、ポタ。と垂らされる。

「熱うつああああ!」

あーあー、悲鳴が痛々しい。

「さて、誰が遣わせたの?」

「はーはあー、言つかよ……」

「あんた、しぶといねエ、黙つてると自分の為にはならないんだけどねえ」

そういうと俺はゲイボルグを取り出した。すると、

「ヒイ!分かった!言つよ、言つからやめてくれえ!!」

うわ、トラウマ化してるよ……

「それでは、誰なんですか？」

セルが蠟燭の火を首もとに当てながら問う。

「カサミ国の王から直々に依頼されたんだよ、断つたら即処罰って感じでな。成功しても失敗しても報酬がたんまりもらえるから引き受けたが、捕まっちゃったもんは仕方がねえ、もともと自由に依頼を受けているからな。殺されなければそちらの国でも働くさ。」

なかなか骨がある奴で。こういう奴はいい奴だと相場がきまってる。

しかし、こういう話は覚えていると為にならないので、俺は英雄クー・フリーンが覚えた唯一の魔術きせきを行使する。

「なあ、あんた。……名前、教えてくれねえか？」

「うゝん……まあ、あんたなら良いだろ。……俺の名前はカルマ。しかし、なんで聞いたんだ？もう会うことは叶わないだろうし」

「……許せ、お前の為だ。」

「なんだと？」

カルマが懐疑の眼差しと声を掛けてくるが俺の指はカルマの額に引っ付き、文字を刻んだ。

刻んだルーンは「N」意味は《忘却》、名前の通り、記憶をなくす魔術である。

「アオカゲ様！何を……！！」

セルが慌てて指を止めようとするが遅い、完璧に文字を投影した。ルーン魔術も効果を発揮し始める。

「てめ…え！なにを…しようと……（ガクッ）」

記憶が消去されるために眠りについたカルマ、それを見届けると、

「セル、ツール国へ行こう。これ以上こういう奴に襲われると困る。」

セルにそういうとすぐにセルは「分かりました」と言って天幕を仕舞いだす。



「アオカゲ様！終わりました、出立しましょう！！」

「おうよ、了解」

返事をする馬に跨りセルがこちらに来るのを待つ。

「お待たせしました」

程なくしてセルもやってくる。……本当、こいつは行動が早い。

「んじゃ、出発するか…」

パカラッパカラッ と蹄が地面を打つ。

余計な話だが、馬は時速60kmで走り、最大で80km

を出すと言われている。

それだけの速さを出す馬だが馬で走っても一日二日かかるのだから相当にこの大陸はでかいのだろうと推測できる。少なくともユーラシア大陸以上は。

（セタンタ、お前、剣使えるか？）

聞いたのは気まぐれ、もしかして、と思って聞いただけの事。

（ああ、人並み以上にはつかえるぜ）

流石は英雄、全てにおいて秀でていると思っていて間違いは無いかもしれない。

（んじゃ、後で教えてくれ、実体化とかは出来るのか？）

（たぶん出来る筈だ。物に触ったりするのは駄目だろうけどな）

（分かった。それじゃご教授願うよ。）

（俺のはスパルタだぜい？覚悟しておきな！！）

セタンタの剣捌きを想像しながら馬を走らせる。

side
r

太陽神が蘇ったことでさまざまな変化が起きた。

ただの一般人が転生したり、神々での会議が行われたり。

会議では世界の秩序… バランスが崩れるために一人の男が殺されることが決定されたり、色々あった。

俺が復活するということはまた、神々の最終決戦ラグナロクがおきる要因が増えることに繋がる。よって俺は行動を起こさずに、静観を決め込んでいる。

それから、異世界に飛ばされた青年は会議の議題に出されて、いろいろな意見が交わされていた。

秩序の崩壊に繋がるから殺せ、だの出ていたため煩わしかった俺は出て行ってしまって結果は知らないが。

確かに、《転生》と銘うつておきながらもその実、異世界に吹っ飛ばしただけであるので世界の調整が面倒なのだ。

《霊長の守護者》はありとあらゆる世界に現れる。注意するのだな

……一般人……

「青景 琳よ…」

神の眩きは炎となって燃え尽きた。

第12話 メキシコって日本の裏側だったような…いや、違うか？（後書き）

ちょっと早めに投稿しました。空アゲです。

評価、感想頼みます。

それだけで俺の胃腸の痛みが和らぐ…気がする。

第13話 そうだった。日本の裏側はブラジルだっ！！（前書き）

3話連続で馬鹿らしい題名をつける作者を許しておくね。

題名が思いつかないのだよ。

題名スランプ（笑）になってもうた。

それでは、この作品を引き続き宜しくお願いします。

第13話 そうだった。日本の裏側はブラジルだっ！！

忘却のルーンを使った青景は、その場を離れ、ツール国を目指して馬を走らせていた。

パカラツパカラツ と腰を突きあげられる感覚。

馬は時速60kmで走ることが出来ると言われている。最高時速は80kmとも言われている。

さて、そんな些細なことは放っておいて、その猛スピードで走る馬の前に人間が躍り出るとどんなふうになるか、見てみたいと思うのが人の性、交通事故が起こったならその場に行きたくないだろう。野次馬、という奴である。……なぜ、そんな話をするのかと問われたら、俺：青景琳は今、この場に於いてなら断言してみよう。

「轢いちまったからだ、現実逃避のためだと。」

sideアオカゲ

「……はっ！」

イカンイカン、微睡んでいたらしい。馬を走らせているのに寝るとは我ながら器用なものだとしみじみ思う。

「アオカゲ様？大丈夫ですか？」

ほらみる、自分のせいでセルを心配させてしまった。これに……り……た……

「っあああー!」

やべえ、やべえよ、なんでこんな眠いんだよ!馬を走らせているのに衝撃が全くとっていいほど感じられない。ほんとに……こんなに眠いと完璧に眠るぞ……………

「ね……」(パタッ)

「アオカゲ様!?大丈夫ですか!」

その言語を最後に俺は深い眠りへと墜ちた。

sideル

今さっき、私が召喚した男を呼び出した。

「起きたか、青景琳」

重い言葉とともに青景の体がピクリと動く。すぐに体は持ち上がり、青景の意識は覚醒したようだ。

「なっ……!お前……だれだっけ?」

「戯け、神の名前を忘れる馬鹿がおるか」

馬鹿馬鹿しい、こういう人間がおるから神の力は衰えていくのだ。

「あー、ちょっと待って、あともうちよいで思い出すから」

「阿呆、そんなに時間は取ってられん。本題に入るぞ。……体は慣れたか。クー・フリーンの理念は見極めたか。体の使い方は覚えたか。」

「ちょ、ちよつと待てよ。そんなに聞かれたら分かる訳ないつつの。聖徳太子じゃあるまいし」

…聖徳太子。嗚呼、青景の祖国の者だったな。友人から聞いたところ、馬から生まれ、耳は4つであらゆる事を聞けると言われているそう。

「青景よ。聖徳太子になりたいのか。耳が4つあるような人外に」とすると、青景は「ちょ！聖徳太子つてもうちよい人間っぽいはずでしょ！？」と叫んでいたが問題ないと判断して。

「して、話を戻そう。今の自分には慣れたか？」

「ううん。まだ、駄目。セタンタの生き方も、戦いの仕方、何もかもが不足しているよ。」

のろまな奴め。時間は無いというに。

「急げよ。お前に残された時間は少ない。」

「おい、父さん。ちつとばかり急ぎすぎでんじゃねえのか？」

青景の後ろ、死角のところからクー・フリーンが姿を見せた。

「どうした、クー・フリーン。お前も分かっているのだろう。」

「ああ、分かっているよ。だが、琳にも少しばかり説明したっていいだろう！」

「情が移ったか。クー・フリーン……分かった。説明しよう。」
まったく、我が息子ながら面倒な男に育ったもんだよ。

「青景琳。全てを知る覚悟は出来たか。」

私は、重々しい言葉で青景に告げた。

「それでは、全てを話そう——」

後に、青景の顔は驚愕に染まることになる。

《太陽神》ルー

《クランの猛犬》クー・フリーン

《一般人だけど英雄憑き》青景琳

三者が交わるとき、齒車が動き出す。

話は序盤。

この物語は

全てに

つながる物語

第13話 そうだった。日本の裏側はブラジルだっ！！（後書き）

スイマセンです。

大変短くなってしまった。

こんな話でもいいなら評価、感想を待っていますよ。

第14話 やっほー、南極って大陸じゃないんだぜ！氷の塊なんだぜ！！（前書

データが一回消えてマジオワタ。

頑張った俺を讃えて！

第14話 やっほー、南極って大陸じゃないんだぜ！氷の塊なんだぜ！！

sideアオカゲ

トール国に着いた。

コーンウォールにつくと、すぐに俺は城の一部屋に案内された。

一時間後…（体感時間）

「アオカゲ様。エイゲン様がお呼びです。すぐに来てください」

「わかったよ、セル」

案内係はセルだった。まあ、当たり前だろう。見ず知らずの奴よりはよっぽどか信用できる。

ゴソゴソ… ゴソゴソ…

「よし、準備終わったよ」 ↑大して準備無い

「そうですか、それでは、行くのでしょうか」

ガチャ

（扉を開ける、足を鳴らせ。王に我が力を見せ付けろ！）

（セタンタ、どうした？頭逝ったか？）

(……)

ちっ、と舌を鳴らして無視に対する抗議をする。

「アオカゲ様？早くしていただかないと遅刻いたしますよ！」

おっと、あんな遠くに行くとはセルはなかなかやるな。

「おゝ悪い、悪い」

そう言ってかるく走ってセルに追いつく……ん？なんキロ出したって？60キロだよ！！

また、歩き出す

3分後

「此処です、……それでは少しお待ちを」

セルは手を広げて静止のポーズを取ってから大きな扉を滾滾こんこんと2回叩く。

「我が主エイゲン様！客人が見えました！通しますぞー！！」

なかなかのBigボイスだ。一言言ってくれば対処できるのに、耳がきこえねえぜ全く…

ガチャ

扉が開く。長く、赤い絨毯の先には玉座、その主は堂々と居座っていた。

「アオカゲ様、それでは」

セルが囁く、その後にセルは一步、二歩と離れていきながら絨毯の脇に整然と並んでいる者達の横についた。

「ちょ！セル！」

小声で引き止めるも完全無視。にやろっ、後で覚えとけよ…

ここで行かねば漢が廃る！という気概で玉座へと足を進めた。

sideル

「ふむ、そろそろ潮時か……」

青景琳の中に居るクー・フリーンを介して青景の視覚、聴覚を同調させ、状況を把握した後、復活し始めた力を使って青景琳がいる《世界》に干渉する。

「干渉、再生、調和、崩壊」
ブレイ バランス シャットアウト

言葉と共に作り出した幻想を世界に注入していく。

「破壊破壊破壊」
ブレイクブレイクブレイク

剣を取り出して《世界》に投げつける

バシャアアン と水をコンクリに叩きつけたのような音と共に剣は《世界》に入っていた。

「ふっ」

短い笑いが込みあげた。

「破壊」
ブレイク

最後に短く唱えてから拳を振るい、《世界》を殴りつける。

臥^{ガシユ}殊 と音を立てて狂^{グルグル}と回る。回って廻ってわまってわまって…

……

壊れた

s i d e アオカゲ

「ヌシはアオカゲか否か」

重い神託のような声で問いかける、嘘を許さない声音だった。

「青景琳という者だ……です。」

いつも通りの口調でしゃべりだすのを押さえて、むりやり敬語にする。

生前はなかなか敬語を使う必要がなかったので危うい口調だった。

「そうか……アオカゲよ、儂に仕える「お断りします」……」

途中で遮り、断る。

「なっ……！こいつ……！」

断ったことか、話を遮ったことか、はたまた両方が分からないが怒りも露あらわに、剣を抜き放った若者が口調を荒らげて俺に問いかけてきた。

「なぜだっ！なぜエイゲン様の話を断った！！」

「俺に利点がないからだ」

熱くなっている者に対して、自身も熱くなったら終わりのない問答になることに間違いなしなので冷静に対処することが大切なんだと、仕事の上司はいつも言っていた。

その上司は数日後口論から発展して喧嘩を起こして減給処分になっていた。その上司の言葉を胸に、次の男の言葉を待つ。

しかし、男の言葉はいつまでも俺の耳朵に届くことは無かった。

なぜなら……エイゲン・ツールが腰から剣を抜き放ち、男の首もとギリギリのライン、俗にいう寸止め、の状態で男の言葉を封じていたからだ。

「やめんか、愚か者」

重々しい声で男に声を掛ける。

男は我に帰ったかのように腰に剣を戻すと、

「はっ！申し訳有りませんでした！」

と、俺に向かって頭を下げてすぐに列に戻った。

「アオカゲ君、悪かったな。こちらの責任だ」

「いえ、気にしてませんので」

「……参考の為に理由を聞かせてもらおう、ある程度のことならば此方で直せるが？」

「…俺より弱いヤツには従わないからです」

「ほう…言ってくれるな、良かろう、私と死合ってから決めてもらえるかな？」

エイゲンは腰から剣を抜き放ち、ピタリと此方に向けてきた。

「分かりました、剣で語れというのならいいでしょう。やってやりますよ」

あー、やべー。王様に啖呵切っちった。斬首？絞首？どっちなの？

ふと、周りを見渡すと、なんかもう「ざわ…ざわざわざわ…ざわ…」ってな感じになってて、「あいつキモくない？」「あそこまでくさい台詞吐けるのは10歳までだよー」とか聞こえてきそうで怖い。

「よし、…きたまえ、すぐに始めるとしよう」

エイゲン・ツールは玉座から立つと颯爽とマントを靡かせながら俺の脇を通り抜ける。

「私も本気を出すでしょう」

などと、心臓に悪い台詞を宣^{のたま}いやがったエイゲンは扉を抜けて外に出ていた。

「ちょ！…セル、何処に行ったか分かる？エイ…王様は」

「付いて来てください、くれぐれも離れないように」

真顔で忠告してくるセルに対して俺は頷きを返して早足で去ってい

くセルの背中を追いかけた。

場所は……城の前、街の広場
時は……太陽が真上に上る時
そして……周りは……

「よってらっしゃあーい！焼きコーン安いよー！」
「ほらほら！お酒は如何ですか？」

人、人、人の状況。
一歩歩くごとに肩が当たること必至の状況である。

「セル！？何処だ！？」
当然、こんな人混みには流されるままに流されていると、セルが視
界から消えた。
焦った、ちよいとばかり冷や汗がだらだらと流れた。

「……ここです！……オカゲ様！」

人を掻き分けてセルが姿を表した。安心した俺はセルの背中を追いかけた。

「済まなかったな、こんな事になろうとは」

「いえ、大丈夫です。……ですが、家臣たちは置いてきても大丈夫だったんですか？それに、一国の王が怪しい男と決闘なんて」

「構わん、それよりも早く構えろ、早く闘いたい」

（おいおい、こいつバトルジャンキー戦闘狂だぜ）

「（うつせい、お前も十分戦闘狂だよ。セタンタ）」

（俺が戦ってもいいか？……つか頼む、戦わしてくれ）
懇願してくるセタンタに、俺は

「（だが、断る）」

バツサリ斬った。

（てめ！ひでえぞ！！）

無視しよう、そう思った俺はすぐに兵士からもらった槍を手にとった。

「さて、始めようか」

エイゲンは腰から剣を抜き放ち半身で構える。……もちろん、刃は潰してある。背中から出した盾を左手に構えて防御中心の構えを執

っている。

俺はいつも通り槍を両手で持って構える。

「セル、開始の合図、頼めるか」

「はい、分かりました。我が主よ。……それでは、始め!!」

瞬間、槍を突き出して奴の顔面を突く。

槍は、その形状から、真っ直ぐに突き出された槍は点にしか見えず、距離感がつかめないのだから払いづらいのだ。

だが、奴は簡単に剣で払い盾を水平に構えて、突き出してきた。

「ぬんっ!」

「はああ!」

気合と共にバックダッシュ、それで奴の攻撃をかわす。瞬間でまた前にダッシュして槍を薙ぐ。

ガカアアン、と槍の柄の部分と、奴の盾が衝突し、激しい音を立てる。

「なかなかだな、アオカゲ君」

「いえ、あなたのほうが素晴らしいですよっ!」

言葉と共に突く、薙ぐ、唐竹割りの要領で振り下ろす。

カアン、ギイン、ガカアン 三連撃全てを弾かれてすこしばかし硬直する。

奴はすぐに剣を構えて斬りかかって来る。

「流石は《鬼神》と呼ばれるだけあるなアオカゲ君」

《鬼神》……厨二病乙、by俺

また、バックダッシュして距離をとるとすぐにダッシュして距離を詰めて、突き出す。

カァン、と澄んだ音と共にエイゲンの剣が突き出される。

「オオオオッ！」

槍を回転させて剣を弾いた。……運が良かった。あれで当たるなんてなかなかないのに。

「なにっ！」

驚愕の声エイゲンの口から漏れる。

しかし、俺が突き出した槍を盾で弾くので、呆けては居ないようだな。安心した。

「オオオオオオオオ！」

「ハァアァアァア！」

渾身の力を振り絞って槍を突き出す。もう無理、体限界。

エイゲンもおそらくは全力を載せたであろう一撃を見舞ってくる。

槍と剣は、互いに交差し、軌跡を逸らされて、互いの体の横に外れた。

瞬間、限界にきていた訓練用の剣と槍は、

パキリ

と壊れた。

「なあ、エイゲン？」

「なんだ、アオカゲ君？」

「この場合はどっちが勝ちなんだ？」

「そうだな…引き分け、ということでもいいじゃないのか？」

「そうだな…んじゃ、そういう事で」

俺達は、突き出した体勢、振り切った体勢で固まっていたが、体を戻すと、歩み寄って行って。

「いい闘いだった。アオカゲ君」

「そう、だな。いい闘いだった」

俺達は、手を握り合って、互いの健闘を喜んだ。

そして、エイゲンは、城へと戻っていった。
ふと、歩みを止めて、

「そうそう、アオカゲ君、明日、私の城へ来るように」

「ああ、分かった」

エイゲンは、城へ戻る最中、

「エイゲン様！凄い戦いでした！」

「流石です！エイゲン様！」

老若男女様々な人に声を掛けられていた。

一方、

「はぁ……………」

誰ひとりとして声を掛けてもらえない俺はOTL↑の格好になって沈んでいた。

「アオカゲ様、頑張ってください」

嗚呼、セルの声がうれしいぜ。

もう、無理だな…俺、やってけねエよ。

第14話 やっほー、南極って大陸じゃないんだぜ！氷の塊なんだぜ！！（後書

評価、感想お願い、まじでやってけないかも。

お知らせという名のアンケート〜これからの行く末（前書き）

空アゲです。

今回はアンケートという形で行きたいと思います。

お知らせという名のアンケート〜これからの行く末

ピンポンパンポーン

ピンポンパンポーン

ピンポンパンポーン

ピンポ

ンパンポーン

「お知らせです。空アゲが喜びの余り、ハチャメチャなことをしたいと言いました。」

「そこで、私たちは、三日三晩考えてこのお知らせをします」
アナウンサーはそこで一旦区切り、

「恋姫夢想の世界に行くか、F a t eの世界に行くか、オリジナル続行か、アンケートを取ります。
繰り返します、恋姫無双の世界に行くか、F a t e / s t a y n i g h tの世界に行くか、オリジナルの世界を続行するか、アンケートを取ります。」

文字数を稼ぐために、アナウンサー作者は繰り返して。

「喜べ作者、君の願いは私が叶える」 ドヤッ！

「といった気持ちでアンケートをお願いします。それでは、次回予告！〜！」

見事、エイゲンを下した青景は、「こんな国に仕えられるかー！」とキレて城を粉々に破壊してしまう。ルーの神様は「いかんっ！これではいかーん！」と叫びだして、慌てて青景を精鋭部隊に襲わせる。「そんなもの効くかー！」と青景は叫ぶが無念、兵士が突き出した槍が彼の脇腹を刺し貫く。

「くっ……無念だ…最後には、たくさんの美女と息子、娘に囲まれて死にたかったよ…」と言い残してこの世界を去る。「残念ながらゲームオーバーだ、青景君」新たな世界に青景は行けるのだろうか？

「次回！其れを、自業自得と呼ぶ！！お楽しみに」

第14話 其れを、無謀と呼ぶ。ゝ勇氣と蛮勇は大いに違うゝ（前書き）

期間が空いてしまったのは、大変申し訳ないと思っています。

それでは、どぞぞ。

プレゼントバイ 空アゲ

実に急展開だぜ！

第14話 其れを、無謀と呼ぶ。ゝ勇氣と蛮勇は大いに違うゝ

俺は、エイゲンに呼ばれ、城へと向かっていた。

「お早う御座います」

「ああ、おはよう」

おそらくは侍女だろうと思われる女性が声を掛けてくれた。

なかなか可愛いのは俺達だけの内緒だZE！

しばらくすると、玉座の間についた。

「失礼します！」

一声掛けて扉を開ける。瞬間

「シャアアイ！」

裏拳で、飛来してきた物体をたたき落とした。

華蘭^{からん}と音をたてて墜ちた矢、放たれた先を見ると――？

「ハッハッハ！なかなかな反応では無いか！」

「いやアンタ！ちよつと表出る！！」

矢尻潰してねえし、顔面直撃コースだし…………死ぬぜ？あれ。

「まあ、あのような些細なことは放っておけ」

「人の生死を些細な事と断ずるんですか!？」

もつともな意見だな、セル。……………つか、いつからそこに居た？

「アオカゲ様が来る少し前です」

「セル、考えを読むな!!」

「アー、おほん! いいかな？」

エイゲン、空気嫁

「おう、いつでもいいぜ」

エイゲンは、腰に差している剣をガシャンと叩き、

「すこし、軍の訓練を頼みたいのだが」

「あいよ、了解」

「それでは、訓練場に向かってくれ」

「んじゃ、いつてくら」

という訳で、俺は、調練場へと向かった。

ガヤガヤガヤ……………ガヤガヤガヤ

ども、青景です。結構つつさいので……………

「者共！よく聞け！！」

ガヤガヤガヤ……………ピタリ

「この度、今回の調練を任された青景という者だ！！」

「まじかよ……………来ていたとは聞いていたけど……………」

「あいつ誰？」「お前知らないのかよ」「結構有名だぜ」

フッフッフ、有名というのはいいものだぜ……………

とはいえ、このまま放置するのもアウトなので、

「全員！10列で並べ！！」

「「応っ！！」」「

ザッ と並ぶむさい男達。

「内周3周！足が揃わないのならいくらでも走り続ける！！」

「「応っ！！」」

ザッザッザッ……………

3
周目

「足が揃ってない！右から3番目、前から9番目！」

「応！」

誰だ！気持ち悪い返事した奴！

4
周目

「足揃ってない！さっきと同じ奴！」

「お、応！」

5
周目

「駄目！左4、後ろから3！」

「応！」

6
周目

「よし、よく出来た！3分休憩後、隊列の確認！」

「「応！」」

そうやって、俺達は、鍛錬をこなしていたんだ、俺も、その時は、
この時が崩れるとは夢にも思わなかったのだ………
……

「よし！今日はここでおしまいだ！みんなよく頑張ったな！解散！
」！」

「押忍！！」

掛け声を変えたのは秘密だぜ

「アオカゲ様！！大変です！！」

「どうした！セル！！」

切羽つまったような声に思わず此方も真剣に対応することになる。

「他三国、カサミ国を筆頭とした、大規模な侵略軍が此方に迫ってきております！至急、玉座の間に！」

「分かった！！」

なんなんだ……………俺のせいかな？俺のせいなのか……………？

不安を他所に、兵たちに、警戒を呼びかけて、玉座の間に急いだ。

「エイゲン！状況は？」

「……………大変悪い。状況は最悪だ。我々の国は兵の精強さがうりでな、しかし、その精強さも数で群がられたら死んでしまう」

悲痛な面持ちで断言したエイゲン、その顔は絶望に染まりきっていた。

「打開方法はなにも無いのか……………？」

家臣の一人がポツリと漏らした一声、その声で絶望に染まりかけていた空気は完璧に染まりきった。

「エイゲン、お前らは全面降伏しろ、おそらくは奴らの狙いは俺だと思う」

「アオカゲ、お前は何をするつもりなんだ」

エイゲンがこちらに向き直って問いかけてくる。

「……………セル、敵の規模は？」

エイゲンの問いかけを黙殺し、セルに疑問を投げかける。おそらく、エイゲンもうすうすは気づいているのだろう。俯き気味になっている。

「お、おおよそ、200万です。此方は40万です……………」

兵力差、およそ五倍、どんな奇策を用いたとしても奴らの勝ち揺るがないだろう、なら、

――俺が、100万削って、エイゲンにそこを叩かせる！！

正直、無謀だと思っている。

今は、まだ、眠っているセタンタも、聞いたら間違いなく俺を止めるだろう、現界してでも止めようとするだろう。

せいぜい、俺一人の力で削れるのは40万がいいところだろう、宝具も追加しても、だ。

だけど、俺は、この言葉を皆に掛けてやりたかった。

「皆、聞いてくれ」

皆の顔がこっちに向くのを確認し、言葉を放った。

「俺、青景 琳は、カサミ、ソールド、アルカシャの三連合国に単

騎で突撃を仕掛ける。…これは、俺が持ってきた災いの種に対する詫びだ。異論は認めない、トール国は一旦全面降伏の形をとり、俺が死に、敵の数が、倒せそうだ、と思うぐらい削られていたら頼む、突撃を仕掛けてくれ。俺が死に、予想と反してあまり削られなかったら、自由にしてくれ、願わくば、俺の後を追うような真似はしないでくれ。」

これだけのことを言うと、俺は、確実に形を成しつつある濃密な《死》を感じながら戦場へと向かっていった。

絶、望！！

sideセル

「俺、青景 琳は、カサミ、ソールド、アルカシャの三連合国に単騎で突撃を仕掛ける。…これは、俺が持ってきた災いの種に対する詫びだ。異論は認めない、トール国は一旦全面降伏の形をとり、俺が死に、敵の数が、倒せそうだと、思うぐらい削られていたら頼む、突撃を仕掛けてくれ。俺が死に、予想と反してあまり削られなかったら、自由にしてくれ、願わくば、俺の後を追うような真似はしないでくれ。」

アオカゲ様は、包み隠さず俺は死ぬ、と言っている。また、決死の特攻が決まったら、叩き潰せ、決まらなかったら自由にしろ、と、

アオカゲ様が玉座の間から出て行った瞬間、家臣たちが主に方針を求めに行った。

「エイゲン様あゝ、全面降伏いたしましょう」

すでに弱腰な姿勢の家臣もいれば、

「何を軟弱な事を言ってるんだ！主、ここは、アオカゲ様に次いで、突撃を仕掛けましょう、あるいは勝てるかも知れません」

強気に突撃をすすめる家臣も居る。エイゲン様は誰も相手にせず、

「セル、お前はどっと思っ？」

私に意見を求めてきた。それほど重要でもない私に。

「……………降伏いたしましょう、アオカゲ様の行った通り、数が削

れたら反旗を翻し突撃、駄目だったら、雌伏の時を共に過ごしまし
よう」

「…そうか、……………者共！急ぎ、武器を隠せい！兵どもに告ぐの
だ、我々は雌伏の時を過ごすやもしれん、だが、籠城の構えで勇者
アオカゲが敵を攪乱したら、突撃を仕掛ける。とな！！」

「ハッ！了解いたしました！」

怯えていた家臣も、頭に血が登っていた家臣も、すべてを平常に戻
す声を掛け、我々は三連合団に突撃を仕掛けることとなった。

決戦まで、あと少し、我々が勝つか、奴らが勝つかは、まさしく、
あの人の活躍にかかっている。

第14話 其れを、無謀と呼ぶ。ゝ勇氣と蛮勇は大いに違うゝ（後書き）

急展開でしたがお赦してください。

感想、評価、お待ちしています。

アンケートも待ってるよ！！

第15話 一対二百万 結構なランチ、ハブられるの？ねえ、僕ハブられるの？

空アゲです。

すいません、結構空いちゃって。

頑張ります。どうぞ

第15話 一対二百万 結構なリンチ、ハブられるの？ねえ、僕ハブられるの？

どうも、琳です。

今、俺は、トール国兵士、総勢四十万の前に居る。

なんでも、エイゲン直々に命令された。「君が、兵士の士気を上げる」って、無理難題を押し付けやがって。

……ってなわけで。

「諸君！今、この国は滅亡の危機にある！それは、カサミ国を筆頭とする三連合国がこの地に襲来しようとしているからだ！お前らは、守るべきモノが居るはずだ！家族でもいい、友人でもいい、彼女だっというんだ！守ろうとしている奴は強い！私腹を肥やそうとこの地を侵略しようとする阿呆共！俺達の意地を見せてやれ！……いいか！俺達は確かに数では劣っている、しかし、安心しろ！俺が！百万の首をこの地に打ち捨ててくる！！残りの百万、お前らが喰い破れ！この鬨に負けたら、愛すべき家族、親友、彼女が失われる事となる。全員、己の全力を尽くし、俺達を襲ってきた奴らに、俺達の強さを思い知らせろ！！！」

一瞬の静寂の後、

「うおおおおおっおお おおおおおおおおおお
おおおおおおお！！！！！！！」

この地を震わせるような声が響き渡った。

（なかなかいい演説だったぜ、リン）

「（おお！お前、いたのか）」

（まあ、このごろ影になってたからな、仕方が無いんじゃないんか？作者も「やべえ、セタンタ出しづらいつて」……………ん？俺なに言ってるんだ？）

「（なんにもいつてないぜ？…へブツ！！）」

ふざけ過ぎたな。元に戻そう。

まあ、こんだけ士気を上げといてなんだけど、

「諸君！俺からの願いだ！」

諸君らはここで待機して欲しい！、と言おうとしたら、

「アオカゲ君、後は私に任せてくれ」

後ろから来たエイゲンに止められた。

エイゲンは兵たちの前に立つと、

「諸君、昨日の話は覚えているか？雌伏の時を過ごす、ということ

だ」

「「応っ！！」」

「その件だが、取り消す。俺は決めた、ここにいるものどもの礎になろうと！！俺は、アオカゲと共に死ぬ！幸い、ここへ向かう道は大きな道は2つのみ、小さい道は使い物にならんからな！その、大きな道を俺たちが死守する！！隙在らば一気に攻め込むぞ！！いいか！！」

「「お、応」」

やはり、一国の王が死ぬのは不味いよな……っておい！

「エイゲン！死ぬのは俺一人で十分だ！」

俺が持ち込み、育て、花咲かせようとする災いは俺一人で処理しなければ、と思つての行動だったのだが……裏目に出たか。

「いいや、兵には死ぬと言ったが、私は死ぬ気は無い。」

「……………そうか、エイゲン」

「なんだ？」

「死ぬなよ、絶対だ」

俺は、エイゲンをまつすぐに見据えながらそう言った。

「もちろんだ、他の馬鹿三国に一泡吹かせなければやってられん。」

そういったエイゲンは兵たちにもう一回向き直ると、

「この国を守れ、それが俺の願いでもあるし、アオカゲリンの最大の願いでもある、全員、奮闘せよ！」

「「応ッ!!」」

もう立ち直ったのか、凄いな。

国王がっえからな、兵も強いのか。

「一丁、頑張りますか。」

自分に気合を入れなおして2対100万に増えたこの戦いにおける策を考え始めた。

sideエイゲン

俺とアオカゲ、対するは200万にいくといわれる有象無象の烏合の衆、勝機はあちらにあるだろう。

並みの将なら勢いに飲まれ、100も削れずに逝く事となるだろう。だが、俺たちは、

「50万と50万ずつ削り、死兵となった精鋭20万で60万を削り、残りの20万で40万を打ち据える」

正直、この戦いに挑もうなどと思うのはカサミ国の王ぐらいなものだろう、他のものならアオカゲを差し出して逃げるのが上策だろう、しかし、俺がそれをしないのは、

「アオカゲに当てられたか」

何事にも懸命なアオカゲ、来てしばらくと経っていないが、この国にはアオカゲの性格が浸透している。どれほど絶望的な戦いでも打ち勝ってきたアオカゲの前を見続ける性格が、だ。

それに、兵たちも「アオカゲ様がいるのなら…」と感じ、この戦いが勝てると思っているのだ、もはやこの世に未練のない俺が一人逝こうと大丈夫だろう、…もっとも、道ずれは最低でも20万は持つ

ていくけどな。

「おう、エイゲン」

「アオカゲか、すこし、策がある、ちょっと来てくれ」

そういうとアオカゲは

「俺も策を思いついたんだ、すこし考え合おうぜ」

そう言って近くにある部屋に入ることになった。見張りの兵を呼び、

「ここに誰も通すな、30人ぐらいで固めろ」

「は、はい！」

結構厳重な警備を指示し、部屋に入った

「さて、アオカゲ君、私の策というのは……ここによこによひそひそ」

「おお！奇遇だな、俺も同じようなことを考えていたんだ、それと、この近くは山があったよな……」

「ああ、ある筈だ、それで？」

「こうするんだよ……いいか？ゴソゴソ、ヒソヒソ、ピーチクパーチク」

「なるほど、それはいいな」

「なら、兵2000を俺に貸してくれ、エイゲン。お前がヒソヒソ
ヒソ」

「ならその2000の兵を500の塊4つにして、敵をガソゴソガ
ソ」

「いい作戦だな、エイゲン、ちなみに、この話は他の者に言ったか
？」

「何故だ？アオカゲ」

「敵を欺くのならまず味方から、という言葉があるからな」

ほほう、なかなか面白い言葉だな…

「分かった、他言は無用としよう」

最後に、とアオカゲは前置きして俺にこう言い放った

「この戦い、勝とう！俺たちなら出来る、俺にはその秘策がある！」

と自信満々に言い切り、部屋から出て行った。

「ふう…自信満々だな」

すこし、あの自信満々な態度が羨ましくなってきたな、毎回毎回ぎ

りぎりの戦いだっ たからな…

s i d e アオカゲ

ふう……言い切っちゃった。「勝てる」なんて言っちゃった。

秘策？んなもんねえー、……。在るか。

「（セタンタ？）」

（んだよ？なんか用か？）

「（ああ、すこし質問なんだけど…宝具の連続使用ってできる？）」

（ん？まあ、この世界には大源^{マナ}がたくさんあるからな、俺が勝手に小源^{オド}に変換するからな、宝具の連続使用も問題ないはずだ）

「（あんがと、おそらくこの戦いがお前にとって最後の（出番）戦いになるとおもう）」

（なんか不安だぜ…まあいいか、アオカゲ）

「（なんだ？英雄さん、俺にありがたい言葉でもかけてくれるのか？）」

俺は、これから迫りくる戦いに備え、茶化しながら言った。

（生き残れよ、お前が死んだら俺はどうなる。絶対生き残れ）

「（……………分かった、善処する）」

……………見せてやるよ、

「本当の三国（連合にたいして）無双^{じゆうふ}をな！！」

第15話 一対二百万 結構なリンチ、ハブられるの？ねえ、僕ハブられるの？

すみません、エイゲンは公の場だと「俺」になるんだけど私的だと「私」になります。

それでは次回で！

第16話 死兵となっても死なないと気合が空回りして「あゝあ」ってなる（前

どうも、空アゲです。

疲れていますた。

どうぞ、どうぞ

今日のメニューは「駄文」でございます。
お腹を壊さないようにご注意ください。

第16話 死兵となっても死なないと気合が空回りして「あゝあ」ってなる

俺達が戦の準備をして3日が経った。

まずは、計画の全貌を話さずに兵士に罫を張り、策を張り巡らした。

それで、一日が過ぎた。

次に、短期間だけだが、セタンタに実体化してもらい、兵30の訓練を頼んだ。

そしたら、皆、死に難くなり、防御力が上がった。（カンスト）

エイゲンと最終戦争に向けての話をした。

それで、二日が経過した。

死兵となり、突貫する戦士33人は皆、家族などに別れを告げた。俺は、特別そういう人が居なかったからここはぶらぶらしていた。

そして、出発する日を迎えることとなった。

城門前

「エイゲン、確か、決戦予定地は山々に囲まれたところだよな」

エイゲンと最後になると思われる話をしていた。…正直、怖くなってきた。

「そうだな、私達はそこで待つこととなるだろう。」

エイゲンは向こうを見据えたまま返事をしてきた。余談だが、エイゲンは妻子持ちで、別れを告げるとき一番長かった。……その事を言つと怒り狂いそうなので言わない。

「アオカゲ様、なんの話をしているのですか？」

セルが此方を見ながら尋ねてきた。またまた余談だがセルの年齢は27歳、妻子持ちだそうだ。……これも言つと面倒なこととなるので声に出して言うことは無しとしよう。

「……別に、すこし世間話さ」

俺はすました顔で答えたつもりなんだがセル曰く「嘘をつくときに致命的な反応がある」とのこと、ついつい顔を背けてしまう、という弱点がバレるわけがない、あれは孔：セルの罠だ、と言い聞かせて乗り切ってきた。……大丈夫、あれはハツタリに違いない。

「やはり、分かりやすい方です。」

すこしばかり小声でセルは呟いたが、何をつぶやいたのかは聞き取ることが出来なかった。

「……まあ、いいか。……そろそろ行こうぜ、待つてて損は無い」

「分かった、そろそろ出発しよう、皆の者、着いて来い！」

エイゲンは馬を走らせる、30人の兵士全員に馬を与え、それでか

なりの速さの行軍を可能にしている。……らしい。

「まあ、俺は走ったほうが速いんじゃないの…?」

ちよつとした疑問を口に出してしまうが幸いにも聞き取る者は居なかった。

そして、馬を走らせ、走らせて2日が経過した。

「ちよ、腰が……きつい……セル、たすけ……ぐふっ」

助けを呼ぼうとしても力尽きる俺の体、慣れというのは大切です。

s i d e セル

決戦予定地に私たちはやってきた。

周りを見渡すと山々に囲まれ、3人が通れるのがやっと、という細い道が続いている。

そして、大きな川があり、その向こうにはひらけた場所があり、決戦する場合、敵はそこに陣を構えるだろう。…其れを知らないアオカゲ様ではないので勿論罫を張っているだろう。

あとは、たった33人の兵でどれだけ兵士を道連れにできるか、後続として総戦力の半分の20万は出発しているが、それがやって来るのは戦場となった途中になるだろう。

「セル様、報告が……」

直属の部下からも死兵になる通告が着ていた。しかし、その手紙を貰ったものは「国のためなら……」と喜んでいた。つまり、この31人はトール国を命がけで守ろうとする人達である。その忠義は確かなものだと思っている。

「どうした？」

「はっ……実は……………」

「分かった、もういいぞ」

そう言うと兵の一人は下がっていった。

この時セルは、忠義は時として味方をも貫くという教訓を戦場の最中知ることになるうとは思ひもしなかった。

放った斥候により、軍勢がこの付近に近付いているということを聞いた。

そして、その軍勢が目測で200万程であることも聞いた。

さらに、その軍勢の行軍スピードはかなりのもの、と聞いた。

着く時間は2時間もないらしい。

そして、戻ってくる時間も合わせて、

「残り、1時間あるかないかな…」

俺が漏らした呟きはこの静寂の中ではよく通り、全員に聞こえた。

途端にざわめく兵たち、エイゲン、セル、その他将になっっている者たちはうろたえていないのだが、半数はざわめいている、そこで

「うろたえるな！既に死に行く定めの人たちよ、ここで失敗し、愛する者たちを死に至らしめる気か！」

エイゲンの一喝により、ざわめきは消えた。

「アオカゲ、今から行った方がいいんじゃないのかね？」

小声で俺に話しかけてくるのはエイゲン、一喝した後すぐに俺に話しかけてきた。

「そだな、今から準備するとしますよ。」

俺は、そう言い、馬に跨った。

—— 45分後（体感時間） ——

真昼間に申し訳ないけど、こんばんは！

絶体絶命のアオカゲです。内容を説明する前に、俺が今立っている場所を教えて差し上げます。

それは、《橋》の上です。はい。

これから、三国史の中でも有名なワンシーンをやりたいと思ってる。だけど、そんなに現実には甘くない。

「「「オオオオオオオオオオオオ！……！！！」」」

目の前には100万を超える軍勢、後続にも人、人…… e t c。

はっ！思いついたぜ！！

「見ろっ！人がゴミのよ」「「ウオオオオオオオオ！……！！」「」」
「……すいませんでした」

やっぱジ○リのパクリは邪魔される運命にあるというのか…嗚呼、無情なり。

さてと、おふざけもここまでにして、と。

「彼の張飛翼徳も100万の軍勢を退けたという、俺は、張飛翼徳にならない、一喝したいと思う」

静かに、橋の向こうに聞こえぬように呟き、

「我こそは青景！いざ、ここにどちらが死するかを決しよう！！」

目の前の兵を殺すことだけを考え始める俺は、その一小節を言うと同時に飛び出した。

「ここにいるは俺が尊敬する英雄の在り方、軍勢がどうした、死を恐れぬものはかって来い！！」

声を張り上げ、目の前の兵士に斬りかかった。

第16話 死兵となっても死なないと気合が空回りして「あゝあ」ってなる（後

どうですか？

腹、痛くなりませんでしたか？

100万VSなんて無理だろうと作者も思ってしまった。

次は良くなるかな？

第17話 橋の中心で敵を倒す「俺は俺の正義を通す！」（前書き）

どうも、空アゲです。

評価、感想、アンケートお待ちしております！

第17話 橋の中心で敵を倒す「俺は俺の正義を通す！」

side名もなき兵士

「オレこそは青景！いざ、ここにどちらが死するかを決しよう！！」

橋の中央に立った一人の男はそう叫ぶと俺達の方に走りより、橋まで接近していた仲間を打ち払い、貫いていった。

「す…すげえ……」

思わず呟いてしまった言葉はとなりの奴にも聞こえたらしく、

「そうだな……すげえな」

と、返事をしてくれた。

「なあ……あれって、アオカゲリンじゃねえのか？」

そういう言葉が聞こえてきた。俺自身も前線で暴れている蒼い台風を見つめる。

「違うない……あれはアオカゲだ…《鬼神》が戦場にやってきやがったんだ…」

兵士の間で広がる動揺、俺自身もアオカゲの名に震えていた。

「こ…この戦いは俺達の負けになるんだあ！！」

後ろの方で叫び声が聞こえた、それをきっかけに、逃亡をしようとする兵士を俺は見た。

s i d e アオカゲ

お、おおおおおおお！！！！

心の中で叫びながら武器を振り回している俺、正直、嫌な汗が止ま

らない。

…啖呵切ったのはいいが、こつも数が多いとな…

「ぐうあ！」

周りに群がってくる兵士を薙ぎ払う為に体をくの字にし、槍の端をもって振り回す。

フリ ニールの地上のスパミみたいな感じだと、自分は思っている。

「ふう…」

周りに兵がない、遠巻きに俺を見ている兵士が沢山いる、そこで俺は、

「死にたい奴は前に出る！」

と、叫んでみた。

すると、

「射掛けろー！」

と、号令がかかり、弓矢が雨あられのように降り注いでくる。…そうか、だから兵士は下がって行っただのか。…一人で感心していたら矢が降ってきた。

「しゃあー！」

気合を入れて矢を見据える。すると、弓矢は俺を避けるように降り注いだ。

「なんだ、あれ……、バケモンだろ……」

兵士の一人がそう言うのと戦線から離脱しようとするやつが相次いだ。しかし、後ろは状況を理解していないようだがんがん前線を押し上げようとしている。

その結果、前線の奴らは俺の前に来ることとなり、

「助けてくれえ！頼む、貴方様の軍門に下る！」

「殺さないでくれ！」

命乞いしてくる奴が多数、裏切りは重罪です、かの騎士も言いました。

「あの世で後悔しろっ！」

こんな事は言ってます、…まあ、裏切りは嫌なので殺しといた。

「さて、と……」

俺は橋の中央に戻ると、橋に突貫してきた奴らを駆逐していった。

「おおおおおおお！」

ふはははは！人間が飛んでいくぞ！

…すみません、ちょっと壊れた。

まあ、大層な事言ってるけど槍で兵士なぎ倒してるだけ。

「らあああああああ！」

突貫して、目の前の兵士に連続して突きを放つ、

「がふっ！ぼっふ！…」

あ、息絶えた。

だけど、やめずに槍を放つ。

「あああああああああ！」

頃合いを見計らい、最後の一撃で兵士を浮かせる、それと同時に、

「シヨオオオオット！」

渾身の蹴りを兵の脇腹に、すると、四方八方に広がっている兵のうち、川に背を向けて俺のほうを向いていた一団に吹き飛ばす。

「うわっ！うわああああ！」

約70kg+鎧の重量の肉の塊を喰らって立っていられるはずもなく、一団は将棋倒しの要領で川に落ちた。

「さて、と……」

この槍は大軍戦だと宝具しかいいのがないんだよね…

俺は、橋の前まで戻ると、指揮官がいるだろうと思われるところに
銃を構えた。

「^{ゲイ}突き穿つ――」

体を捻る、膝を曲げる、肩を緊張させる。発射まで、3…2…1…
…0

「死翔^{ホルク}の銃ウ！」

地上版、俺がアレンジした、投銃宝具、レンジは…一キロぐらい？
対象は…周りの人々

音速を超えてまっすぐに飛び出した銃は兵士の体突き抜けて、絶
命させて、真っ直ぐに目標へ走る。

side 指揮官（名無し）

「お逃げください！危険です！」

不意に前から声が聞こえる、前を見ると一直線に兵士が倒れている、
誰かが突貫を仕掛けたか…

「大丈夫だ、見ろ、まだあそこだぞ」

倒れているのは自分より遥かに遠い所、自分のところに来る前に死んでいるだろう。

「違います！あれは人ではありません！」

「ならばなんだと言うんだ！あれは人に決まって………は？」

自分の認識能力の甘さを呪った、倒れていないのはあまりにも早く自分を殺したため、体が立っているままなのだ、そう、あれは人間なんかじゃない、あれは…

「や……り……」

数々の兵士を屠ってきた槍は俺の体を貫いて、爆発した…

sideアオカゲ

「ふう…疲れた」

（疲れた…じゃねえ！なに俺の技改造してるんだよ！）

…セタンタが五月蠅いので兵士さんに八つ当たりでも致しましょう。

「嗚呼嗚呼あああああああああああああ！」

手に戻ってきた魔槍を振り回しながら突貫、さらに――

「レッドブランチエワズ！」

またもや突きのタイム。もうやめて！兵士の士気はもう零よ！

「はははっ！まだだ！まだ終わらんぞ！」

……っ。ついさいつの間に戻ってきたんだよ。これはテレポートですか？

（いいえ、飛んできただけです。）

「（反応ありがとう）」

（おうよ、なんか頭に単語が浮かんできただけだからな、気にすんな）

…世間一般ではそれを電波というらしいな。

「アオカゲ！私と勝負しろ！」

あら、なんか兵の奥から見慣れたようなイー○ツクが…
確か…名前は……………

「そう！○ーノツク！」

「ふざけてるのが貴様あ！」

いきなり名前不詳の飯野君が切りかかってきた。

槍と剣がぶつかり合う、金属音が戦場に響き渡る。…なにしろ剣を打ち合わせるまもなく死んでいく兵士達、たった一人と戦っているのだからあまりにも不効率、不効率だ！

「ああもう！うざったい！」

槍を叩きつけて無理やり隙を作ると後ろに跳んで間合いを取る。

輪状に広がっている兵士がいきなり飛んできた俺に驚いている。

「切捨て御免！」

槍で一刺し、絶命に至らせると剣を戴く。

「貴様あ！よくも！」

仲間の死に怒り狂った飯野君は、いきなり俺に剣を叩きつけてきた。

「こっちも後ろがいるんでね！そう簡単には負けられない！」

後方の敵を全て切り捨て、橋の中央を奪還する。

…その際剣を戴いておくのは忘れない。

「さあ！ここに全てを終わらせよう！」

飯野君に剣を投げつける、弾かれるけど投げつける、一本、二本、三本、四本…

一発一発力を込めて微妙な変化を加える。野球やってる奴は分かると思うがシュートとかカーブとか、スライダーとかね。

「ぐう！」

段々余裕が無くなっていく飯野君をあざ笑いながら剣を投げる、時々槍。

肩や腕、鎧の隙間に傷が増えていく、…すいません、自分Sじゃないです。

血とともに力を失っていく……駄目だ、思い出せない。奴の腕、俺は槍を奴に再度投げつけた。

ガスッ

奴の左肩に槍は刺さり、血を滴らせながら後ろに跳んだ、逃げる気だろう。

「そうはさせるかつーの！」

剣を投げる、回転しながら飛んでいく剣が刺さったのは飯野くんではなく兵士の一人だった。

「へ、ヘルグス様あ！お逃げください！」

肩に剣を生やしながら叫んでいる兵士

「「此处から先には行かせない！」」

いつの間にか攻める側と守る側が一転した瞬間だった。

カーン カーン カーン

カーン カーン カーン

兵の後ろから銅鑼の音が聞こえてくる。

「撤収だ！」 「撤収だと？」 「逃げろ！」

「退け！殿は私が務める！」

またもや兵士の後ろから出てくる人パート2パート3、今回は二人のゲストにお越しいただいてます。

……っーか、飯野くんヘルグスって言ったんだな。思い出したよ。

「アリニチュア様！スルト様！」

「早く逃げろ！撤収だ！」

アリニチュアーえーと。そう！俺に喧嘩売った女だ！

スルト……うーんと、あー、うん、そうだヘルグスの横にいたやつだ。

「早く行け！」

アリニチュアが兵士に叫ぶと皆撤退していった。

「さて、……我らと少し遊んでもらうわよ？」

「出来ればお引き取り願いたい。…怪我するぜ？」

手持ちの装備は……魔槍×1 一般兵の剣×5 一般兵の槍×3
(レア) ヘルグスの剣×1

……レアってなんだよ。

「「さあ！いざ尋常に！」」

「二対一は尋常じゃねえ！」

こうして、俺VSアリニチュア&スルトの一方的なリンチが幕をあけることと相成りました。

第17話 橋の中心で敵を倒す「俺は俺の正義を通す！」（後書き）

なんかもうグタグタだな。

終わったな。

うん、こんな駄文でいいなら評価感想お待ち申し上げます。

第18話 俺の起源は「追うこと」「何かを追うとき、俺の速さは3倍速さ！」

すみません、空アゲです。

なんかもー早くF a t e行きたいです。

皆も行きたいよね？行きたいな評価感想、アンケート、お待ちしてるよ。

第18話 俺の起源は「追うこと」「何かを追うとき、俺の速さは3倍速さ！」

sideアオカゲ

「おおおおおおおおお！」

ここが踏ん張りどころとばかりに槍を振るい続ける。

…………筋肉吊りソ。

突きの弾幕を張って牽制するが、カウンターを挟んでくるスルト＆アリニチュア。

甲高く鳴り響き続ける槍と剣。

全身の力を振り絞って槍を振るう。

「がぁぁぁぁぁ！」

スルトの剣が袈裟に向かう、アリニチュアの剣が足を風いでくる。タイミングが絶妙で避ける事はできない。それは一般の兵、将なら避けることはできないような二撃。

「「獲った／貰った！」」

俺は何をしたかというと、単純に槍を地面に突き刺して石突に飛び乗る

「なにつ！」

アリニチュアの剣がゲイボルクを叩いた、勢いに任せて穂先は地面から空に浮かぶ、石突から飛び降りるとそこはアリニチュアの横に降りた。

「フツ！」

俺、渾身の左ストレート、しかし、拳は開いていて、指は固く真っ直ぐにして捻りを加えている、要するに殺人技。

アリニチュアは全身鎧で固めており、狙うとしたら顔か喉のどちらか。俺は、喉を狙った。

「
■ ■ ■！」

喉を潰されて声にならない悲鳴を上げてすっ飛んで行くアリニチュア、喉からは赤い軌跡がはしっている。

「大丈夫か！アリニチュア！」

スルトが思わず吹っ飛んだ方を見る。その懷にまたもや青い影が躍り寄った。

「隙ありい！貰ったあああ！」

今回も左ストレート………

「その手は喰らわん！」

喉を剣でガードに回らせるスルト、…違う、俺が狙ってるのは………

「てめえの金玉だぁ！」

急激なフックを描き男の大事なところに趨る俺の拳、今回はコークスクリユーです。

「アァー！」

堅い金属を殴りつけるが、骨にぶつかった感触ではなく柔らかいが弾力がある物にぶつかり、押しつぶした………気がする。

「スルト、アウトォ！」

某、笑ってはいけない間諜の番組の掛け声を掛けて吹っ飛ばす。

「じゃあなー」

悶絶しているスルト、……これはあんまり絵にならないな。没！

気を失っているアリニチュア……喉から血が流れてなければねえ……良かったんだけど。

そいつらを尻目に、撤退してかなりの時間が経ち、兵士の姿は草原に消えようとしていた。

だから諦めよう。うん。

んな訳でスルトとアリニチュアを縄で縛ると担いで自分の本陣に引き返すこととした。

場所は変わってツール国、最終防衛本陣中、青景は、合流してきた本隊の者から、対多数用の武器を買っていた……………

「おおおおおお「五月蠅いです、アオカゲ様」……………すみん、セル」

兵士が3人がかりの荷車付きで持ってきたのは……………

「こりやまたデケエハルバートだな」

俺が掲げているのは3mに迫ろうかという程の斧だった、一般的な斧とは違い、槍が先端に付いており、どちらかというと戟に近い。

「これは……………聞いたことがあります、確か……………遙か昔、ツール国の地に一人の流離いの男がやってきたらしいのですが、その男の身なりは珍妙なもので、赤い外套を着ており、二振りの剣を持ち、どこからか剣を取り出す奇術師であつたそうです。一人の鍛冶屋がその男に、「振り回すけど、斧ではない、突くことが出来るが槍ではない、そういう不思議なものも作れるんだろ？」と挑発したそうです、すると、その男は「私を誰だと思っているのかね？

テンションMAXだぜ！今の俺には不可能はなあい！！

そう言って俺はハルバートを片手で担いで外に飛び出した。

「ハハッ！盛り上がってまいりましたア！！！」

全力で敵陣に向かっていった。

「俺の起源は追うこと！何かを追うとき、俺の速さは三倍速さあ！」

なにやら頭の中にきた言葉を叫びながら敵陣を強襲することにした。

……この時、敵陣では……

「この際、カサミ国の兵士でここに残ってもらい、他のアルカシャ、ソールドは別の道からツール国を奪取、そのまま挟撃に入ろう。」

「分かった、ならすぐに行動しよう」

第18話 俺の起源は「追うこと」「何かを追うとき、俺の速さは3倍速さ！」

.....早く、Fateの世界に入りたいよお。

評価、感想、アパチア山脈、アンケートベると

お待ちしております。

第19話 赤い流れ星、決してシャアではない！（前書き）

駄文ですがどうぞ、それと、本を読みあさり、文字の表現などが変わったかも知れませんがよろしくです

第19話 赤い流れ星、決してシャアではない！

彼は、セルから槍斧^{ハルバート}を貰い、そのテンションのままに敵陣へと襲撃を決意、同刻、三国連盟がなにやら怪しげな作戦を立て始めて…

——自分でも馬鹿らしく思えてきた、昼間の戦いでそれなりの数は減らせたがかなりの数が敵陣にいるのは必至、昼間送り込んできたのは先鋒と置いていい、今度はそれを超える数と相對するこ
となるというのに。

琳の心中は意外にも冷静だった、鍊鉄の英霊から授かった槍斧を手にしたときは手に負えぬハイテンションだったが、流石に敵陣に近づいてくるとその気持ちも薄れてきて段々と戦闘用にシフトし始めているようだった。

そんな彼に声を掛ける者が居た、無論、かなりのスピードで敵陣へと走っており、生半可なスピードでは置いてけぼりを喰らう程の速さ、声を掛けようなんて思うものは居ないはずなのだが、

（おい、お前、死ぬ気か？つーか死ぬだろ）

紛れもなく、彼の中に眠っていたセタンタその人だった。この数話、出てきていないのは作者の都合である。

「（んあ？死ぬ気なんてさらさらねえよ、敵陣を強襲後、宝具の一撃を追加で与えて離脱する予定だけど？追っ手は全員、槍斧^{ハルバート}で仕留めて暗殺者^{アサシン}のそれにするつもりだけど？）」

勢いで突っ込んできた割には作戦は練っているようでこれにはセタンタも反撃することは叶わなかった、いや、する気がないだけだった。

（あつそ、それと、その槍斧捨てる、あのいけ好かない野郎が作った武器なんて持ちたかねえ）

——そういえば、セタンタ…ランサーとアーチャーは馬が合わなかったみたいだったな。

「（ワリイ、そりや無理な話だ、この武器気に入ってるからな）」

チツ、っと舌打ちして黙り込んだセタンタ、琳も知るもんかと無視を貫き、とうとう敵陣へと到着した。

「っと、到着したか」

ザッ、と彼は崖の上から盆地に構えてある敵の陣地を睥睨した。崖の上のリンというのも語呂がとてもいい。是非使ってみてくれ。

話は逸れたが、

（なんだこの陣地の敷き方、三国の指揮官、馬鹿だろ）

「（おう、俺もそう思った、こんな布陣が分かりやすいと、糧食を攻撃してくださいって言ってるものだろ、…あそこだろ？糧食庫）」

彼が指さしたのは、陣地の最後方の右手、火が常に付いていて警備員が4～5人周りを彷徨っている。

（攻撃、仕掛けるならあそこだな、一番手前の左手にゲイボルク放て）

一見するとそこは天幕も敷いてないが武器などが貯蔵されている場所のようだ、ここまで分かった琳はすぐにその意味を把握し、魔槍を具現化させた。

——さて。ここで一丁壊滅的なダメージ受けてくれないかなあ？

三国が同盟を結んでまで攻撃してきたというのにツール国は俺を引き入れてもらった、その恩義を今此処で返させてもらおう。

思いを力にかえて今、三国に英雄と呼ばれる所以を、見せ付ける。

「^{ゲイ}突き穿つ

——^{ボルク}死翔の槍」

呟いただけの宝具の一撃は、瞬間すら生温い速さで敵陣の武器庫を壊滅へと追いやった。

途端に警鐘がなる、流石ファンタジーの世界、結界が張られていたがゲイボルクはそれを一瞬で突き破ってしまい、結界がけたたましい警報を鳴らした。

「があ！うつせい！」

それを予想だにしていなかった琳は悪態をつきながら糧食庫へと走った。

「大変だア！敵襲だア！」 「武器庫がヤラれたみたいだ！」 「近くにいるはずだぞ！探しだせ！」

残念、兵士の一人が叫んだ事は外れていた。琳はそのころ人外の速さで疾走し、見られたときは槍斧でたたき潰して悲鳴すら上げせなかった。

「ここか？ここだろ」

一人で疑問を発し、一人で完結させるという変なことをしながら糧食庫前に到着。

「火がない…どしよ？」

見回りをすり抜けてやってきた琳だが、見回りを殺すと色々と面倒なので火をもらいに行くことはできなくなった。

「（セタンタ、俺ってルーン使えるっけ？）」

（使えるよ）

「（使えるのかよ！）」

あまりの返事の軽さについつい突っ込んでしまった、神秘の結晶である魔術がこうもやすやすと使えると不安な気もするけど嬉しい気もする。…まあ、此処で浮かれているのもあれなのですぐに見様見真似で指先を動かし始めた。

（火のイメージをしながら大きくFと書け）

「火…火…火」

必死に念じながら指先を動かした、すると、空中にオレンジの文字

がFの形を作った、瞬間

「うわぁお！」

文字の部分から火が吐き出され、糧食庫が火に包まれた。

「火事だ！逃げろ！」 「敵襲か！？」 「それはないだろ！逃げろ！」

これまた兵士の言葉を聞きながら敵陣から脱出の道を取ろうと足を動かす、が。

「敵だア！」

某老いた蛇のようにはいかず、敵に見つかってしまった。

「ええい！」

止む無く槍を突き出す、が、兵士は後ろに下がろうとしたら石につまりき転ぶ、そのせいで槍の穂先は兵士の方を掠めるに終わった。

「しゃんと立ってる！てめえ男か！」

苛立ち、罵声を浴びせたがここは兵士のLUKが高かったようで、増援がやってきた。

「敵だぞ！殺せ！」

兵士の一人がそう叫ぶと兵士たちが放射状に広がり、琳を包もうとした、しかし、そうはさせじと槍斧に持ち替え振り回す。

「ぐわあ！」

包囲網に穴ができた、その穴から脱出し、琳は闇の中に紛れ込み走りだした。

「畜生っ！腰抜けが！」

若干、作戦の失敗のせいで悪態をついているが痩せても枯れても英雄の魂を宿している男、敵兵の死角を突いて後ろから首に手を伸ばす。

「ぐっ……………」

音を立てて崩れ落ちた敵兵、その体が完璧に地につくまでには琳はその場には居なかった。

「（セタンタッ！こっからどうする？）」

（……………）

「（セタンタッ！返事しろっ！）」

（全員、ぶち殺せ、盛大に声を上げて、あらゆる敵を殺しまくれ、一人も残すな）

冷徹に、一人の英雄に因ってこの場に居る兵士の死は決定付けられた。

第19話 赤い流れ星、決してシャアではない！（後書き）

ええーと、すいません。

どうでしたか？こっちのほうがいいですかね？

駄目なら感想でバッシングしてください、それはもう盛大に。

よろしく願います。

第20話 そろそろ幕切れ、ネタ切れ、魔力切れ。（前書き）

こんにちわ、こんばんは、おはよう。

なんだか挨拶の順番が違う気がするけど華麗にスルーと行こう。

作風、またまた変わりますね。ごめんなさい。よかったら感想を

第20話 そろそろ幕切れ、ネタ切れ、魔力切れ。

ついに、俺はその場一帯にいる兵士を片付けるのに成功した。

正直に言つと、出来るとは思わなかった、槍と槍斧ハルバートの変則二刀流。

グルグル廻つて突き殺すとかエグすぎだと自分でも思った。それと、自分の筋力の半端無さに。

「あああ、……………疲れた……………」

魂までも吐き出すようなため息をついた。その手で片付けた人数は1000や2000じゃないと思う。

わらわらと押し寄せてくる人の壁に絶望したのは余談である。

1000人超えたあたりで《これぞ真の三國無双じゃ》って聞こえた気がする。きつと幻聴じゃない。

まあ、かなりの量を食い尽くしたら奴らもビビったようで陣をほっぽり出して逃げてくれた。

無論、宝具で追撃を仕掛けたけどさ。

(……………よく殺った。褒めてやるよ)

「(そりゃどうも、疲れたけどね。)」

8000ぐらいまではカウントしてたけど後は目が回り始めてやめ

ちゃった。

「あつ、また来た。…………鬱だ、死のう、絶望したア！」

絶望な人の壁パート2、そろそろ退却な予感。

「「わあああああああ！！！！」」

「ふはははは！蒼天死す！黄天再来！」

もはや、俺のテンションも危ういところに来てる。

「いたぞー！アオカ——」

「黙れエ！頼むからお願いしますう！！！」

また俺無双するなんて嫌だ！

勢いで唐竹割りで真つ二つ！すげえ！二枚おろし。

（お前、そろそろやばいんじゃないかねえのか？）

うん、そう思ってた、逃げよう。

「兵士諸君！この腐った三国連合についたことを後悔しろお！」

なんとなくそれらしいことを言っただけ俺はすたこら逃亡し始めた。

「いそげえ！全員起床！総員戦闘準備！」

くそお！まさかツール国に直接攻撃を仕掛けてくるとは……………

おそらくはカサミ国にアオカゲとエイゲン様が率いる軍を当てて戦力を削らせながら時間稼ぎ、その間に2国連合でツール国を強襲するとは…………

「急げえ！死にたくないなら武器を構えろお！」

…………ここを落とされたらエイゲン様たちの部隊が挟み撃ちを食らう、

それだけは避けなければ！

「ほつ、報告う！」

慌てて部屋に入ってくる一人の斥候、まさか……

「じよ、城内に敵兵が侵入しましたあ！それをきっかけに次々と……
…もはや、この城は堕ちます！」

「黙れえ！弱気なことを口にするな！」

ここで弱気な発言を許したら俺達の精神が折れる、そうしたら……
戦にすらなりはしないだろう。

「全員に通達しろ！一人一殺！かならず一人以上殺して死ねとなあ
！」

「了解！し、失礼します！！」

駆け出していく斥候を見届け、俺も腰から二本、剣を引き抜いた。

「ふう……………この、ゲラート、100人は道連れにして見せよう……
……」

静かに、敗北確定の戦に身を投じることにした。

もうちょっと、上手い生き方が出来ればここは生きてられたのだろうが、もはや後悔はない！

「往生せえやああああ！」

接近してきた敵兵を二刀の元に切り捨てる。

「もう……こんなところに来ているのか」

思った以上に敵は侵攻が速いようだ。 もって3刻だな……

「くたばれやあああああ！」

毎度毎度この変な掛け声が出るのは癖なんだろうな……

「アオカゲ様救出作戦を開始する！」

まったく……いきなり武器を担いで敵陣に乗り込むなんて正気の沙汰ではないな、あまり大きな注意はできんが…

「エイゲン様！2000の兵、全員準備可能です。」

「分かった、セル。行くぞ！」

「全軍進め、進め、進めえ！」

「「わあああああああ」」

胸騒ぎがする……よからぬことが起きなければいいが……

「報告！約10000トル（4000メートル）先に単騎で駆けてくる人影あり！おそらくは《蒼の英雄》かと……」

「ご苦労、下がっていいぞ」

「はっ！」

ふむ、杞憂か、アオカゲが戻ってきたのなら大丈夫か？

「報告！追加で報告です！」

「なんだ？」

「後ろに大量の人影！おそらく敵兵かと、数はおよそ7000、十分に殲滅できるかと！」

……彼我の差は歴然だが、大義も何も無い敵兵に我々が敗れるとは思えんが……

「ならん！一回引く！付いてくるようなら反転して叩く！」

「了解しました！」

慌ただしい行軍の中、最前列にアオカゲが加わった。

「ただいまあ！」

ふっ……阿呆らしい声が妙に頼もしいな

いよいよ、戦いは終局………か？

第20話 そろそろ幕切れ、ネタ切れ、魔力切れ。(後書き)

どうにもこうにもこれが現界ですとも！

これでもいいなら評価を！感想を！

なんか電波が！ってな訳でステータス紹介！

あおかけりん
青景琳

性別：男

人：人間

年齢：27歳

異世界到着時

筋力：B

魔力：C

耐久：C

幸運：E

敏捷：A

宝具：B

3 連合国VS時

筋力：B+

魔力：B

耐久：B

幸運：E

敏捷：EX

宝具：A

宝具一覧

ゲイボルク

刺し穿つ死棘の槍

〔ランク B〕

『対人宝具』

放てば必ず心臓を貫く魔槍。

これは因果と結果を逆転させる為であり、放たれる前に結果が決ま
っている為かわす術は無い。

幸運の高さで因果の逆転を防ぐか、本編で見せた『同等の呪いをぶ
つけ相殺させる』より、方法は存在しない。

ゲイボルク

突き穿つ死翔の槍

〔ランク B+〕

『対軍宝具』

ランサーの持つゲイボルクの呪いを命中率でなく破壊力に全て置き
換えて敵目掛けて投擲する。

元々ゲイボルグはこちらの使用方法が正式な使い道であり上記の刺し
穿つ死棘の槍はランサーが自己流にアレンジした技。

ゲイボルク

飛翔する朱の魔槍

〔ランク A+〕

『対複数宝具』

青景琳個人がアレンジしたまさかの地上投槍、軍隊の中の心臓、つまり、指揮官に向かって飛び出すエゲツない狙撃技。
ゲイボルクの使用方法をねじ曲げた青景だけのオリジナル技。

スキル

戦闘続行：A

往生際が悪く、瀕死の状態でも戦闘を続行するスキル。
伝説に謳われたクー・フリーンの戦い方が由来ではないかと推測される。

仕切り直し：C

戦闘から離脱する能力。

ルーン：B

北欧の魔術刻印・ルーンを保有。
ルーン文字は北欧神話の主神オーディンが、自身の命を呪に巨人から盗んだものである。

矢よけの加護：B

視界内からの飛び道具の攻撃への対処能力。

ただし、超遠距離（ゴルゴ13とか？）や広範囲攻撃（乖離剣エア？）には無効。

ランサーの射的武器への耐性は“風切り音と敵の殺気”から軌道を読む。

それに対して、セイバーは“風切り音と自らの直感”で投擲武器の軌道を読む。

神性：B

神霊適性の高さ。高ければ高いほど、神との交わりが深いことをしめしている。

神話の英雄は神の混血や、まさしく神の子という存在が多いため、比較的英霊には保有者が多いスキルである。

なんか電波が！ってな訳でステータス紹介！（後書き）

えーと、少し改変されているかも知れないけれどそれは異世界に来て青景が修羅場をくぐりぬけたということで。ご理解を。

それでは、次回で！

ネタが無い。人物紹介です！

あおかげりん
青景琳 享年27歳

27歳で現世からおさらばした走ることと、クーフリーンをこよなく愛する走り屋稼業。

190オーバーの長身にがっちりとした体格からよく野球選手と間違われる。

髪色は黒の短髪。目は黒だが、奥に少しだけ蒼の色素が混じっている。

中、高と陸上部、高校時代は波乱の人生を歩むこととなる。

原因は両親の浮気の発覚、殆ど疎遠状態に嫌気が差した琳の妹である水華は高所落下による自殺を試みるが父親が止めようとして共に落下、その事を知った琳は守れなかった事を生涯悔やんでいる。

彼のベースは一般人のため、異世界でも役に立つことはないと思われていたが、異世界では、パラレルワールド並行世界からきた人間は無条件で2倍程強くなり、太陽神ルーによる神の祝福とクー・フリーンの魂の定着ゴッドプレスによりかなり強化され、兵士では何人来たところでも彼を倒せない。

所有武器

魔槍 ゲイボルク

クー・フリーンが所有している宝具、彼の魂の根幹に根ざすもので、魂と共に青景の武器となった。

使える真名開放は、従来の2つに彼オリジナルの1つを合わせて3つとなっている。

斧槍 ハルバート

錬鉄の英雄が馬鹿宝石翁により飛ばされた折に創りだした武器、彼の特徴からその武器は残り続けている。

かなり武骨な外見で琳フォルムが好きな形で、度々使用している。

大軍対用の武器といっても過言ではない。

考案中の宝具としては

永劫の剣戟 スバイラル・ブレイク

対象を空中に打ち上げ、切り上げを繰り返し、空中で縫いとめる個人用の宝具。

3段階で分けられ、一段階目は突進の後に打ち上げて一閃、二段階目は交互に切り上げを仕掛けて縫いとめる、三段階目は下からの振り抜きで高く上げ、自身も上に行って叩き落す技。となっている。

錬鉄者の斬撃 ハルバート

渾身の上段からの振りぬき、エクスカリバー宜しく光の奔流を巻き起こす。彼女は自身の魔力を使うが、彼の一撃は自身の魔力を自在に変化させて属性付与ができる。便利な一撃。

炎属性付与

錬鉄者の炎斬 ハルバート・カスタム

水属性付与

錬鉄者の水剣 ハルバート・カスタム

風属性付与

錬鉄者の風斬
ハルバート・カスタム

地属性付与

錬鉄者の地撃
ハルバート・カスタム

特殊属性付与

錬鉄者の空
ハルバート・カスタム

等々、アレンジ可能な万能宝具！

主人公だけでいいよね？

ネタが無い。人物紹介です！（後書き）

ありがとうございました

第21話 嗚呼、楽しい日々よ……（前書き）

こんにちは、空アゲです。

少し空いたけどクオリティはダウンしています。

第21話 嗚呼、楽しい日々よ……

敵兵をトレインしていた俺だが、迎えに来てくれたエイゲンと合流し、退却しています。

「敵兵接近！迎撃にはいります！」

後ろから伝令が来て報告した。

「エイゲン、俺も行ってくる」

「……分かった、行って来い」

さて、エイゲンの許可も貰ったし行ってきますか。

「よっころしょーい！」

「「「ぎゃあああ！」「「「

ハルバートで一閃して敵兵を吹き飛ばしながら後退中です。ちなみに、足を切っています。理由は分かると思うけど、機動力を奪っためっす。

「アオカゲ様！本陣が見えてきました。後は我々に！」

「分かった！気を付けろよ！」

「はいっ！」

会話を交わして、本隊に向かう。

「エイゲンツ！状況は！」

「前に20万の味方がいるはずだ。それを使って後ろにいる敵を蹴散らす」

「は？・・・・・・・・・・・・・・」

もう一度頼む」

「報告します……………トール国は……………隊ち
ました……………」

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525

信じられなかったがズタボロになった報告者を見る限り、嘘とは思えない。

さらに、俺達を絶望させる報告がやってきた。

「トール国の方向から兵影！数は約79万程かと！敵兵です！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・くっ・・・・・・・・」
「・・・・・・・・」

エイゲンも黙りこみ、他の兵士たちも一様に黙り込んだ。

不意に、琳が一步前にでた。

「エイゲン」

名前を、呼ばれた。そいつの眼は、初めて戦った時よりも深い決意を宿しているように見えた。

「なんだ……………」

掠れた声で返事を返した。

「後、任せた、俺さ……………20万、殺すから」

ああ……………こいつならやってくれるんじゃないのかと思った。
しかし、

「死ぬのなら、私もだ。共に行けば30万は軽いだろう。」

どの道、長生きはできないんだ。

ここで大輪の花を咲かそうじゃないか、真っ赤な色でな…………

第21話 嗚呼、楽しい日々よ……（後書き）

すみせん、この話で終わらせようと思ったのですが。

最終話 大いなる岐路 (前書き)

空アゲです。

この話でオリジナルが終了となります。

俺、
—— 頑張るから！

さて、なんでここまで俺達が追い詰められたか、思い出してみることしよう。

そうそう、確か、トール国本城陥落の知らせが届いたんだ。

その後、続けざまに、トール国を落とした敵の軍勢が現れたんだっけ、挟み撃ちの状態で、おいおいどうすんだよ。ってところで俺が馬鹿な事に単騎で20万殺すって言ったんだ。そしたらさ、エイゲンも死に行くって言ってそこで終わったんだよな。

で、今の状況だよな。

最悪なことに、でかい道を二手から攻められたら一瞬で瓦解するっ
て思つて横道に逸れたんだ。したら、逸れたところにも敵兵が飯を
食つて休憩してて、そこを叩いてる間に追いつかれて混戦状態、ど
うすりゃいいんだー！つてときにエイゲンと合流したんだよ。

「じゃあな！エイゲン、縁があつたらまた来世！」

「ああ！どうやらここで私は果てるようだ、
オオオオオオオオオオオオ
オオオ！！！！！」

現在、青景琳の軍勢 2 ↓ 1

総殺害数 1 3 万

現在地 敵本陣

「グウオオオオオオオオ！！！！！」

「又グウ！」

V S カサミ国従者スルト

「琳！なぜお前は俺達を裏切ったああ！」

「理由はない！なぜならお前たちに与した訳ではないからだ！」

なんて傲慢！自分でも思うよ。

「さあ、俺も暇じゃないんだ。エイゲンが、その仲間が待ってるんだよ！」

徐々に、僅かだが、押され始めているスルト、この勢いのままに押し切り、

「貰った！エイゲン！やれ！」

「なに！後ろだと！…ゲフウ！」

嘘です。エイゲンいません。死んだかも知れない………な。

「スルト、召し捕ったどー！」

「ぐぬぬ……卑怯な！琳！」

「卑怯汚いは敗者の戯言」

これ名言、メモ取っとけ。

さて、そろそろヤバイかな。

青景の軍勢 1 ↓ 3 0 (多数の味方兵士を発見、救出の折)

総被害数
14万5000

現在地 敵本陣 (ソールド帝国)

（流石に、今回は死ぬかもしれねえな）

「（そう、だな……元より死ぬ覚悟だったが……）」

——その時になつたらどうなるか分からねえな。

（人間、死には本能的な拒否感があるんだよ）

セタンタの声も意識の外へと追いやられた。

人、人、人、人人人人人人人人人人人人人人人人人人
人人人人人人人人人人人人人人人人人人人人人人人人
人人人人人人人人人人人人人人人人人人人人人人人人
人人人人人人人人人人人人人人人人人人人人人人人人
人人人人人人人人人人人人人人人人人人人人人人人人

見渡す限りの、人。

「ヒッ、イ！」

後ろの兵士が声を上げた。

無理もない、この数は予想外だ。

ちなみに、どんな英雄でも、人である限りは現界が有るんだ、どんな奴でも100日間ぶっ続けて戦えないし、50万の人を全員と相手取って勝てるわけではない。

……なにが言いたいかというと、俺は臆病者だ。^{チキン}だから、なるべく、対集団の時は囲まれないように動いてるし、あまりにも大量な敵がいたら、1対1を心がけて戦っている。最大相対数は10以上はない。

俺が殺せるのは10桁までだ。一瞬で数人を殺すときはあっても何百人も殺せるような技はない。

セイバーの約束された勝利の剣があれば別かもしれないが。^{エクスカリバー}

「青景琳、ここに大輪の花を咲かし、散ってみせる。できれば、たくさんの人を道連れにしたいけどなあ！！」

「「「オオオオオオ！！！！」」」

でも、ここは空想の場では、ない。

「最後に、出来る限り死んでくれ……………」

最速の英雄、クーパー・リン
蒼の英雄 アオカゲ リン

奇しくも 下の名が同一という奇妙さ、その人生も波乱のモノとなった。

世界は狡猾だ、同じ死に方を用意するのだから。

「最後に捧ぐ死界の槍……………これが、俺の出す最後の一撃だ」
ゲイボルク

伝説上では魔槍、ゲイボルクは無数の棘を出して対象を中から崩壊させると伝えられている。

その槍は、蹴って使うのが本当とも、

彼が使った技は、周囲の魔力を収束させ、魔槍を巨大化、棘を何倍にも増やし、さらに凶悪と化したのが棘一つ一つに即効性の毒が付着している、これにより、大量の人が死に至るだろう。使用者も例外ではない。棘が少しでも触れたら死に至るおいそれとは使えない、正に諸刃の剣、この場合、敗戦確実だから使ったとも言える。

その、死神にも等しい棘の襲来は、英雄王の宝具射出を彷彿とさせた。

「ギャアアアアア！」

「助けてくれ！助けて…グハア！」

そこに死地が広がったところに、彼は居た。

近くには、大木

英雄が死んだところは石柱が存在した。

琳の腹を貫いているは彼の宝具の棘ではなく、一般兵士が最後の力で投げた槍。

「……………おっ……………と、内臓が……………溢れ……………るところだぜ……………」

必死に、彼は倒れこもうとする足を抑えつけ、内臓を中に押し込める。

遠くでは、歓喜の声、どうやら、三連合国が勝利したようだ。

「フウ……………救われねえな」

(.....)

セタンタは、ランサーは何も言わない。自らと同じような死に様を見せつけられ、何も言えずにいる。

そこに居た約6万の兵士は、その実、10万以上いた。三連合国が脅威と判断した琳に大量の兵士を派兵したのだ。

宝具の一撃で残っていたのは、4万。
射程距離は800m近く飛んでいった。
飛来した棘の数は万を軽く超えていた。

彼は、言ったとおり、20万の兵士を殺したのだ。

「や……くそく………は………フウ、ヒュー、果たしたぜ……
……………」

彼の意識は、死へと誘われた。

その後、探索にきた兵士によって発見され、丁重に埋葬された。

トール国自体は消滅したが、生き残ったトール国の兵士の子孫は、代々、この琳を崇めたそうだ。

三連合国は、その後も良好な関係を築いたそうだが、「青景琳」の名前は禁句となったそうだ。

1111' 2111402.

最終話 大いなる岐路（後書き）

エエエエエ（、ん）エエエエエ

っていう人もいますよ。

これは、F a t eに続く道なんですよ。頑張ります！

エピソード&プロローグ

そこは、英雄が存在する場だった。

世界各国からの英雄が集う場、本来なら、その世界だけの者で構成されるはずだったその場は、その世界の一般人によって覆された。

そいつの名前は 青景琳

異世界に飛びだった、一般人。

英雄クー・フリーンを宿して、異世界で大立ち回りを演じ、20万を殺した反英雄。

英雄になる条件、認知度。

青景は、有名になりすぎた。四国戦争に介入し、殺しに殺し尽くしたのだから当然だが、何万人もの人に畏怖の対象とされ、崇められてきた。

その有り様はこの世全ての悪に近い。^{アンマユ}

ひたすら有名になった。四国全てに《大陸最強の殺戮者》として知られた為に反英雄となった。

その、青景琳は英雄として、呼ばれることとなった。

聖杯戦争に・・・・・・・・？

「ぐおう・・・・・・・・・・眠い・・・・・・・・」

「そこ！寝てんじゃないわよ！」

途端に、頭に衝撃が来た。

「痛え・・・まだ寝てねえよ・・・この乱暴ババア・・・」

「なんかいったかい!?」

「いえ！何も行ってません！」

——地獄耳め

小声で毒づいてみる。

「おい、士郎……………なんて言ってくれなかったんだよ。おかげで要らぬ罪被せられたろうが」

「すまん、琳。まさか、あれだけで怒られるとは思わなかったよ」

「まったくだ、お前の弁当のおかず貰うからな、・・・いや、貰えないか、毎回奪われていくからな」

「いや、今回は生徒会室で食べるから・・・一成と一緒に食べるんだ、よかったら、どうだ？」

「おお！それはいいや、俺もそこで食べることにするわ」

英雄になったのにまたもや一般人スタートとは・・・まあ、士郎に会えたからいいや、あとは・・・赤い悪魔と間桐の力ス野郎

とその可憐な妹か・・・

「まっ、エンジョイしますか」

「？なんのことだ？琳」

「いや、独り言」

「そこ！ぎゃあすかうるさい！」

「「すいません！」」

——うるせえのはあんただろ……………（ボソッ）

可笑しいな、なんでだろ。

なんでこうなっただろ。

「ただいま」

毎回、この静寂がイラツとくる。

「なんで独り身なんだか・・・」

練習できるはいいけど・・・

手もとに魔槍と斧槍を出現させて地下室に向かう

「じゅんせい楽ありゃ、苦々もあるさ」

一昔前の歌を歌って地下室へと向かう。

「己おのれの最高はつよを思い出せ！」

自身が紡ぐ魔術式を唱え、結界を貼り付ける。

あの死から、何年経ったか分からん。

座に呼ばれ、誰かに召喚されると思ったらまさかの転生だしさ、孤児だしさ、あれきり太陽神からの連絡もないし。

そして……

「セタンタもないし」

宿していたはずのセタンタもお別れバイバイしちゃったし、分かることはまだ、聖杯戦争が起こってない。ということだけだろ。

士郎の手は包帯グルグル巻きではなかったけど、遠坂もまだ士郎のことを魔術使いと思ってないみたいだし。

間桐の桜は相変わらず、カスは相変わらず殺したくなるウザさを醸し出してる。

一応、毎夜の巡回は欠かしてないけど……

月は一月を迎え、とうとう聖杯戦争がいつ起こってもおかしくない状況が揃っている。

毎日学校に残っては士郎をつけ回しているが……

そろそろ、直接遠坂に魔力ぶつけまくるかな？

「ありゃ……こんな時間だ」

考え事してたらかなり時間が経過してたらしい、慌てて獲物を振る
い始める。

ちなみに、魔槍はゲイボルクではなく、ブリューナクであり、グ
グニルでもある。

なんとも奇妙な魔槍を俺は手に入れていた。

ブリューナク×グングニル

なんとも気持ちの悪い掛け合いだ。

「うおりゃあああああああ！」

仮想の敵を想像し、槍を、斧槍を使い何十回も殺し尽くす。

シュバババババ

空気を存在させる訳もない得物の連撃は真空すら発生させ、想像敵
を殺し尽くした。

「あー、はー、ふー」

息を整え、上に出る。

その際、結界は解いておく。

自分の部屋に出ると、すぐにベッドにつき、眠りに墜ちた。

聖杯戦争は直ぐそこに、

「痛ッ」

「大丈夫ですか？先輩」

「ああ、なんかで切ったみたいだ」

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。祖には我が大師シュバイ
ンオーグ。」

降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国
に至る三叉路は循環せよ」

みたせ みたせ みたせ みたせ みたせ

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。
繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する」

セット

「――Anfang」

「―――告げる」

「―――告げる。」

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

「誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者。」

詠唱は整った。

「汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ―――！」

瞬間、遠坂の家にフリーフォールを決めた英雄がいた。

エピソード&プロローグ（後書き）

ぶつとんだ解釈でおくるバカが創りだした聖杯戦争。

それでいいならどうぞご覧アレｗｗ

第1話 聖杯戦争

「ああー、だりいー。…なんでこんな事しねえといけねえんだよ…」

「すまん、琳。……あつ、スパナ、取ってくれないか？」

「ほれ、これか？士郎」

全く、なんでストープの修理をしねえといけねえんだ。しかも、俺も名指しとか……

「もうそろそろ暗くなるからもう帰っていいぞ」

「ん？そうだな、もう暗いし、ここまでにしようぜ、……丁度、終わったぽいしな」

「いや、次は弓道部の掃除を慎二に頼まれてるから、琳は帰っていいぞ」

「……………」

「どうした？」

フ・ラ・ゲキタ

（。。）

！！

待ちに待った弓道部の掃除フラグ！これは、チャンスだ。

「分かった、俺もう帰るから、士郎も気を付けろよ、色々なことに……………」

そう言っで、俺は生徒会室をでで、ダッシュでその場を後にした。

「あ！琳、どういうことだ？……………ってもう居ないし」

独りになった士郎も、後片付けをし、弓道部の掃除をしに行った。

あとは、奴らが戦うのを待つだけだ。

俺は、学校をでで、近くの茂みに身を隠した。

「アーチャー、どう?」

途端、私の隣に気配が出てきた

「ふむ……どう?と聞かれたら」

「聞かれたらどうなのよ」

「敵がやって来る……ッ、そう露骨に殺気を当てないでくれるかね?」

「いいじゃねえか、………その嬢ちゃん、その野郎を連れているってことは、俺の敵ってことでもいいん——だよなあ!」

疾い!

「アーチャー! 着地、任せた!」

「了解した!」

フェンスに手を掛け、勢い良く飛び降りた。

「来たか？」

ふわりとした着地、傍らには、俺にとって憧れの錬鉄の英雄が居た。

「遠坂 凜……………赤い悪魔……………ハハハッ」

思わず笑ってしまう。あんなにも一生懸命に走っているにも関わらず直ぐそこに蒼い影がにじり寄っている、つーか残像？

「あ、回りこまれた。……………戦い始めた……………あの蒼の英霊だれだろう？」

記憶があやふやで信頼できない……………メンドクせえ。

「士郎……………何処だっけ」

探し始めると簡単に見つけた。フェンスの奥から信じられないようなものを見たかのように硬直している。

一……二……三……四……

何本弾かれてんだ、数えるのもめんどくなつた。

パキリ

音がした。

「誰だ！」

途端、蒼い英霊が士郎に向かって疾駆し始めた。……名前が思い出せない……

「追うか。……フウ」

記憶のあやふやさに溜息をついて、士郎を追いかけ始めた。

「わりいな……坊主……恨む……」

聞き覚えのある声が廊下を伝ってきた。いつも、心の中で話していた。英霊だった。

「失念してたよ……セタンタア！」

士郎の心臓を貫き、外に出た瞬間に槍を具現化して追隨して追撃をかける

「つと……てめえ、英霊じゃねえみたいだがなんで俺の幼名を知ってやがる。聖杯戦争の関係者か？」

「そうだつ、て答えたらどうなる？」

斧槍に持ち替えて構える

「そうだな……殺す!!」

瞬間、朱の魔槍が俺の心臓を貫きに趨った。

ガキン、と金属音を響かせて衝突するハルバートと彼の魔槍。

力比べは、俺が勝った。

「忘れてしまったか！クー・フリーン！」

「てめえ——!!」

さらにヒートアップし始める剣戟、これを、待っていた。

「ハハッ！楽しいなあ、セタンタ、いつかこの戦いをしたいと思ってたんだ!!」

右鎖骨の突きを弾き、回転させて唐竹割りのカウンター

ガン 塞がれ、押し返されるが、その勢いで下からの斬撃。

「ちい！」

防ぎに入るが、力ではかなり強くなり、遠心力も駆使した俺の一撃は彼を浮き上がらせた。

「貰った！」

魔槍に武器をチェンジして無数の突きを繰り出す。

「甘いんだよ！」

突きは簡単に弾かれ、避けられた。

バックダッシュで距離を取り、間合いを取る。

「だから……」

十分な間合いを取り、もう一度構える

「甘エんだよ……！」

「やばっ！」

一瞬で間合いを詰めた一撃は回避行動を許さずに眉間へと趨った。

それを、手で右へ払いつつも左に頭をズラす。

シッ！

耳元で風切音が聞こえた。

「畜生、油断した…」

今はもうかなり遠い所にいるセタンタをみてボヤク。

こめかみを掠って血が出てきた。

「やめるか……」

決めた瞬間背を向けて全力ダッシュ、明日への前進！昨日から遠ざかれ！

「逃げんのか！」

セタンタの声もお構えなし、全力で家に帰った。

結論：自分はおそらくセイバーに負ける。

第1話 聖杯戦争（後書き）

どもー、とうとう聖杯戦争に突入しました。

評価、感想よろしくです

第2話 無意味な英霊 青景琳

ランサー……クー・フリーンとの戦闘から逃走して、家について数分、原作を思い出していると、士郎が襲撃され、セイバーを召喚、その次にアーチャーとの連戦になることを思い出し、両方と戦うことを楽しみにして、家を出ることにした。

「……………ハッ……………ハッ……………ハッ」

道路を走りまくって士郎の家を目指す。時々空を見上げる、赤い主従がくるかもしれないので警戒中。

「何処だ？……………何処だっけ」

純和風の家が門が見当たらない、ここらへんの筈なのに。

あれは洋風、あれも違う、何処だ……

曲がり角を無意味なクイックターンを決めて曲がると、漸く、漆喰塗りの壁が出現した。

耳を澄ますと打撃音、重い物体が金属製の物体にたたきつけられる音。

「そろそろ召喚か……………待機しよ」

門に体を預けて目を閉じようとすると……………

「青景君……………だよね？」

「人違いです」

「嘘よね」

「その通り」

「……………」

おお怖、殺気が尋常じゃねえ。

「そついうお前は遠坂凜だよな」

「そつよ……………こんな夜中にどうしたの？もしかして夢遊病者？……………
……………それとも、聖杯戦争関係者？」

いきなり核心を突いてくるとは、交渉には向いてないんじゃないかな、遠坂は。

「んじゃ、最後の聖杯戦争関係者でいい」

「そつ……………なら、ここで寝ててくれる？」

言葉と同時に黒い銃弾が俺の横を通りすぎていった。

「いやいや、あんたは呼びじゃねえよ、ほら、アーチャーだせ、アーチャー」

「なんでクラス名を知ってるの!? あんた一体………!」

「凜、早くしないと君の言っている小僧が死ぬぞ?」

「あ、小僧って士郎のこと? ……士郎は死なないよ、早く遣り合おうぜ、アーチャーさんよー?」

中指を立てて、遠坂の横にいるアーチャーに向ける、その際、もう一方の手で親指を下に向けて更に挑発。

「もついい! 死んでも知らないわよ! ……アーチャー、任せた!」

「……………」

無言で剣を投影すると、青筋を立てながら斬りかかってきた。

「よつと、軽いねー、剣が。……ひよつとして投影魔術かねー?」

斧槍を出して受け止める。

「ッ!? ………………」

更にもう一本を出して斬りかってくる。

斧槍をしまつてすぐに魔槍を呼び出して両方を受け止める。

「もつとギア上げていこうぜ、アーチャー!!!」

剣を跳ね上げての突きの連撃、跳ね上がった剣は宙を舞うが、構わずにまた夫婦剣を投影した。

うん……………かなり厄介だね、投影魔術って。武器が奪えねえとか無いわ。

「防御一点張りのアーチャー!」

「何を言うか!」

突き出した一撃を右の剣で逸らすと、左の剣で斬撃を浴びせてきた。

「危ねえ……………刃物を人に向けてはいけないうって親父に教わらなかったか?」

「ふん……………貴様も同じようなモノだというのに……………!」

半身で避けて、左手一本で魔槍を、右手には斧槍を呼び出した。

「ほれ、これで条件は同じだ、創りだしたのはお前だぞ!」

「覚えが無いことを言うな!」

左の突きを放ってから右で振り回し、アーチャーは突きを片手だけで逸らす、振り回しを剣で防ぎきれずに小ダメージ。

「馬鹿力が!」

徐ろに両方の夫婦剣を俺に向かって投げた。

「やってやろうじゃないか！」

軌道は分かる。

魔槍一本で弾き逸らした。

弾いたときにはアーチャーの手には同じ夫婦剣が存在して、左右に投擲した。

「なんだ……？」

空中を俺を中心にするように回りだす夫婦剣、

「オオオオオオオオオオオオオ！」

更に夫婦剣を創りだして突貫を駆けてきたアーチャー、

俺は、斧槍を右前にぶん投げ、魔槍を左前にぶん投げ、徒手空拳でアーチャーに向かってダッシュした。

「なに！？」

後ろからの死神の鎌は背中すれすれを通り過ぎ、前の鎌は俺の武器に弾かれた。

あとは――

「お前の剣だけ！」

申し訳程度についている俺の鉄甲を駆使して、双剣の斬撃を防いで、アーチャーにこう言った。

「鶴翼三連、破れたり」

「グッ……………」

悔しそうにしているアーチャー、ドヤ顔の俺、もの凄く驚いた顔をしている遠坂。

「ムッ……………凜、敵だ」

「えっ…………分かった」

いきなり武装解除をして遠坂に呼びかけたアーチャーに少し驚いたが。

シユタツ、と壁を越えて現れたのは、みんなの騎士王セイバーさんです。

「ハアアアアア！」

いきなり剣を振りかぶって斬りかかった相手は……………え？俺？

ガアアアアン！

斧槍と聖剣がぶつかり合い、喧しい金属音を奏でた。

「いや、俺、一般人ですヨ？」

「嘘です！空間より武器を取り出す一般人など人ではありません！」

人外扱いありがとう！おかげで泣きそうさ！

「っ！か痛えよ、手痺れてるよ、流石魔力放出のスキル。」

「あーあ、君のせいで俺の武器が地面に埋まってるよ、どうしてくれるの、謝ってよ」

「ム……………それはすいませんでした。……………ってなぜ私が謝るんですか！」

ズガアアアアン！！

今度は魔槍で逸らした。

「あーもう、痛えよ。降参だよ。参った」

「嘘でしょう、どうせ私が油断した瞬間斬りかかってくるのですでしょう？」

ギイイイン！ズガアアアアン！

いや、この人抵抗しない俺斬ろうとしたよ、魔槍なかったらどうなっていたことやら。

「セイバー！やめろ！！………って琳！？」

「あ………」

やべえ、士郎に目撃されちゃった。

どうしよう………

第2話 無意味な英霊 青景琳（後書き）

作者の体力の問題でここで切らせていただきます

第3話 過去の為に

「それで、なんで琳がセイバーと戦っていたんだ？」

不思議そうに聞いてくる土郎、ちなみに、遠坂さんが土郎には聖杯戦争の何たるかについて話しておいてくれた。決して割愛ではない。

「いや、いきなり斬りかかってきたから無我夢中で……………」

「嘘でしょ、貴方、私のアーチャーにも攻撃を仕掛けたじゃないの、一般人とは思えないわ」

あちゃー、遠坂（笑）に逃げ道を塞がれた。

「あー面倒だな、いいか？これから話すこと、信じなくてもいいが俺は嘘をつかないことをここに誓う」

「分かった、俺は琳を信じる」

流石、お人好しベストONEに入る土郎くん、返事が速いぜ。

……………遠坂さんはー？

チラッ

「……………」

すごい睨まれてる……………俺なんかしたっけ。

「まあ、話すぞ……………俺は、この世界の人間ではない、その世界に

はおそらく魔術なんてモノは存在しなかったはずだ、俺は、一般人だった、運送業を仕事にしていたが、仕事の途中にいきなり訳の解らん連中に殺された、そこで俺は終わるはずだったんだが目を醒ます……いや、死後の部屋に行くと、クー・フリーンを名乗る男に太陽神ルーを名乗る爺に“手違いによってお前は死んだ、転生させてやるから許せ、拒否権はない、クー・フリーンを連れていっていい、後一人歴代の英雄の魂をその身に宿していい”と言われた。」

いきなりの急展開にあっけにとられている士郎&遠坂、霊体化しているアーチャーも驚いているんじゃないだろうか。

「俺は、その条件を呑み、転生した、その世界で英雄と呼ばれる存在となった、いや、反英雄か。……それはいいか、英雄になると座に呼ばれる筈だった、が、手違い若しくは運命か、この世界に転生することになった、能力を貰った、その能力は、自身に縁のある武器の召喚、条件付きではあるが、相手の武器の略奪、それぐらいだ」

「……………そうになると、貴方は英雄、ということになるわね」

「そうだ、あくまでお前たちが信じればの話だけだな」

俺はナ、の部分を強調しながら言った。

「なんで……………琳は英雄になったんだ？どうやってなったんだ？」

「私も気になる、どんな方法を使ったの？」

詰め寄ってくる士郎、遠坂、……………セイバーはあくまで静観を決め込んでいる、士郎の斜め後ろに静かに鎮座している。

「殺し尽くした、人を、殺して殺して殺して、殺しまくった、泣きながら逃げる奴の背中を切った、負傷した仲間をかばった奴も斬った、味方を殺した奴も斬った、俺を殺そうとした奴は例外なくぶち殺した。……………そして、おれは一般兵の放った槍で死んだ。……………どうだ、これが英雄の末路だ。栄華を極めた奴もいたかも知れない、国を収めた奴もいたかも知れない、何かを救おうとして救えない奴を全員殺した奴もいたかも知れない。……………やり直しを望む王もいるかも知れない。……………だけど、英雄なんて呼ばれる奴の末路は大体決まってる、救われない死か、望まない死のどちらかだけなんだ！」

ガンツ、と机を叩いた、茶が零れて茶菓子落ちた。

「そうだろう？アーチャーにセイバー」

いつの間にか実体化していたアーチャーも、今まで俯いていたセイバーも、俺を見ていた、全員が俺を睨^みていた。

「お前は、その死はどちらなんだ、救われない死か？望まない死か？」

銅褐色の眼が俺を射抜きながら聞いてきた。——俺は、前者だった、と。

「救われないと言うかも知れない、命を掛けた国は滅び、蹂躪^しされつくされたからな」

「青景琳、貴方はそれをやり直したいと思わなかったのですか？うまく立ち回り、戦いを回避できるようにしたくはないのですか？」

セイバーがそう問いかけてくるのも分かる、言っちゃなんだが同類が欲しいのかも知れない。

「もっと上手く立ち回れたかも知れないな、……………だけど、それをやったら、その時に生きていたすべての人に対する侮辱だと思うんだ、それだけは……………」

——したくない。

そう締めくくって、俺は席についた。

「そう、……………ですか」

ポツリ、とセイバーも呟き、悲しそうに俯いた。

「……………さっ！、衛宮君、教会に行きましょ、説明したと思うけど、登録が必要なの、……………といっても任意だから誰も行かないけどね」

立ち上がってさっさと外に出ようとする遠坂、

「ちょ！待てって、遠坂！」

慌てて追う士郎。

俯いたままだが、立ち上がったセイバー

鋭い眼光で睨んでくるアーチャー

そして……………

「Z……………Z……………ZZZ」

舟を漕ぎ始めている琳

「……………（ブチッ）」

何かが切れた音がした。

無言でハリセンと投影、足音一つ立てずに琳に近づくと、

「ふざけるなっ！貴様あ！」

スッパアアアアアン

「ぐおう！」

いてえ……………頭割れそう、あれ金属仕込である……………

「……………」

無言でセイバーが外に出た、次いで、アーチャーも霊体化してあとを追った。

「……………行くか」

ボケをかましても不発だったので若干テンションが下がっているが、士郎達を追うことにした。

所変わって教会

「喜べ少年、君の願いはようやく叶う」

「なっ……………！」

ギイイ

音をたてながら閉まった扉、その間から似非神父のドヤ顔を睨みつけていた。

「くたばれっ……………！ 超似非神父……………！！」

小声で毒づいていた俺を見て、遠坂は何か痛い子を見るような顔をしていた。

「帰りましょ」

所変わって教会通り、墓地近く

「俺、遠坂のそういう所、好きだぞ」

「なっ……………!!!」

「……………」

ふと、脳裏に思い浮かんだ、あの頃の記憶。

“あなた達が！私を不幸にさせたの！”

“待て！やめろ！”

こんな風景のなかで、叫んだ妹、父親。

“こんな事になるなら消えたほうがいい！”

そう言い残して飛び降り自殺を俺の目の前で計った妹、

“やめるんだ！藍！！”

手を伸ばし、妹を追う様に飛び降りた父。

その瞬間、確かに助けられる場所に居たというのに手を伸ばせなかった俺。

その瞬間からか、誰かを守ろうと強く思った。

「凜、こんな奴に助言する必要はない」

「わ、分かってるわよ！」

そう言って帰ろうとする遠坂、坂の上には

「もう帰っちゃうの？」

不思議そうに尋ねてくる小さな女の子、見た目はかなり可愛いが、俺はそいつの名前を知っている、そいつが引き連れている英雄の真名も。

「クスクスクス……………まあいいや、……………ヤツちゃえ、バーサーカー」

「■■■■■……………!!!!!!」

地響きを立てて迫ってくる狂った大英雄。

「凜……………！」

凜を連れて退避、構わず突き進んでくる英雄。

「シロウ、下がって！」

「おわっ!」

セイバーも一時退避、構わず突き進む大英雄、……………
…って、え？マジ？なにそれ怖い。

「■■■■■……………!!!!!!」

「そつなのおおおお!!!!!!」

もはやどうにでもなれの精神で斧槍を呼び出し相手の斧剣にぶち当た
てる。

ギィィィィィィィィィィ

ここに、聖杯戦争、英雄VS英雄の力勝負が始まった。

第4話 守る為の行動

「せーの、ナイバッチー！」

「セイバー！共闘するぞ！つーかそれしか無い！」

「分かりました！」

そんなわけでセイバーと共闘宣言できたので後は大丈夫。

掛け声と共に振りだした斧槍は狙い違わず狂戦士バーサーカーの斧剣を掻い潜り、体に直撃した。

「■■■■■■■■！！！！！！！！」

更に激しくなる剣の嵐、嫌になる、鬱だ。

一撃を斧槍で弾き、二撃目をステップで躲す、三撃目を空中に呼んだ魔槍で逸らす、魔槍は地に叩きつけられるのだがそれぐらいじゃ壊れない、その魔槍のステータスに痺れる憧れるう！

「頼むからクタバレよ！」

さつきから、何度も攻撃を加えているのだが、傷ついた様子はない、俺の宝具（笑）のランクはAに成っているのか怪しい所らしい、そういう所をお願いします。

すでに、場所は墓地へと変わっていて、士郎、遠坂を背にセイバーと共に攻撃を加えている、アーチャー？知らん、どっか行つた、原作どおりなら街まで行つてるだろう、そして、アーチャーは偽・螺カラス
ドボルグ

旋剣を放つはず……………

「セイバー！離脱しろ！」

「ぐっ！」「きゃっ！」

反射的に声を掛けていた、斧槍を一閃させてバーサーカーを牽制すると士郎と遠坂を担いで離脱した、セイバーは知らん、きつとどうにかなる、そういう所でお願ひします。

瞬間、爆撃されたんじゃないかと思うほどの轟音が辺り一帯を支配した。

炎が辺り一帯を包み、煤が舞う中、鋼鉄の巨人はその身を起こした。

……原作通りならここで帰るのだが……………

「■■■■■■！！！！」

そうはいかない世の厳しさ、悲しいぜ。

腹がたつたんでつい、厨二病満開してた、後悔はしてない。

頭の中に、……………天啓が走った。、天啓！って感じ？

貯めこんでおいた風魔術の結晶を斧槍に叩きつけて発動、行き当たりばったりの宝具発動だが、上手くいったようだ、斧槍が薄緑色の輝きを纏い、頭に浮かんだ言葉を叩きつけた。

ハルバート・カスタム
「錬鉄者の風斬！！」

風魔術はあまり強い方ではないのだが、斧槍の一撃が凄まじかった。宝具として発動した一閃は容易く辺りをなぎ払い、狂戦士へと殺到した。

「なっ……………！！」

遠坂がなんか慄いてる、知らん、英雄だし。

「セイバー！今だ、退くぞ！」

「しかし……………！！」

「なかなかやるのね、凜のサーヴァントは、そのサーヴァントは誰のかな？」

イリヤスフィール・フォン・アインツベルンがバーサーカーの背に乗りそうだった。

「俺？ただの冬木市に住む一般人だよ、巻き込まれただけだ」

「あ、そう、それじゃあバイバイ、凜」

興味を失った猫の様な目をして俺から視線を外すと地響き高く狂戦士は帰っていった。
バーサー

「衛宮君っ！」

遠坂の声が響いた

士郎の背中に、墓石が刺さったいた、……さっき遠坂と共に離脱時に刺さっていたんだろうな。

なんて人事で考えているとセイバーが士郎を抱えて帰ろうとしていた、遠坂も同じ。

俺も、帰ることにした。

セイバーにいきなり「鍛錬を申し込みます」って言われた、ちなみに、士郎、遠坂、俺は共闘することにしたのでノープロブレム、殺されることはまず無いはず。

「せいやああああ!」

「ぐううううう!」

ガギン、と音を鳴らし、それきり小さな金属音を響かせた。

段々と、その剣は俺の方に向いてきて、首を切り落とそうと押し出された。

「ふっ!」

右に身を投げ出し、手に持った木刀を左に流した、セイバーが持っていた木刀は勢いのままに道場の床に接近するが止まり、俺の方に追撃してきた。

「ぐおう!」

「なにっ!」

驚愕した声はセイバー、その原因は俺が右手一本で木刀を受け止め、左手一本で下からの斬撃を繰り出した事だった。

だが、敵もさる物、すぐさま切り替え、柄を木刀を合わせるようにすると絡めとり、木刀を吹っ飛ばした。

2本の木刀が宙を舞った。

「どういう事だ、セイバー」

あの時点で、俺の木刀だけを吹き飛ばすことは可能だったはず、それをしなかったことは、なにか裏がある。

「……………」

無言でその手に聖剣を出した、それを見届けるまでもなく俺は外にダッシュしていた。

「なっ！待ちなさい！」

バカ言え、聖剣と打ち合うなんて懲り懲りだ、メンドクサイもいい所、タイムリープしてえよ今畜生、1時間前の俺を「セイバーと戦うな」って言うてやりたい、っーか記憶が入るから良いのか、なんだ、安心した。

「士郎！助けてー」

「どうしたんだ、琳」

「セイバーが……………いきなり襲ってきた！」

「まじかよー！」

「まじだよー！」

「嘘です」

ギギギ、と壊れたブリキロボみたいに首を回す、後ろには、修羅がいた。

(中略)

「すいませんでした」

「分かればいいんです」

畜生、なんで俺が謝ってるんだ……………セイバー食い過ぎ、俺の分なくなる

あれから、士郎はアヴァロンの効果で傷を直したのだが、流石に寝込んでいて、朝方起きて、共闘関係を結び、そのままセイバーと鍛錬、アーチャーとは会ってない、そういう事をお願いします。

「青景君、そういえば、狂戦士バーサーカーに使った攻撃は何？あれ、尋常な魔力じゃないわよ？」

遠坂が聞いてきた、フッフ、聞きたいのか……………そうか、それは仕方がないな、と言ったところ、

「むかつく……………だけど聞かせてくれるならいいわ」

となんとも返答に困ることを返してくれた。

ってなわけで説明開始。

「俺の武器有るじゃん」

「ええ、有るわね」

斧槍と魔槍を取り出す。

「この斧槍だけ、魔術属性を変えての宝具攻撃が出来るんだ、例えば……………」

ゴソゴソ、とポケットを探るとたまたま出てきたのが炎属性の宝石、ルビー色のアメジスト、なんとも間違えそうだ。

遠坂、そんな目をキラキラさせても……………」

「なっ！してないわよ！宝石を見て欲しいなーとか思ったりしないから！」

本音ダダ漏れありがとうございます。

「……………続けるぞ、ちょいこっち来て」

庭に移動……………」

「ちなみに、俺の特性は、決まった詠唱を唱えないこと。」

俺の異能力かは分からないけど詠唱が一定しないので自由に組めるのが楽、詠唱が少ないと攻撃力も少なるのだが、即興でカバーしている。

「——Rampart in shining impre

gnable defenses that stays in
right hand（右手に宿る、光り輝く鉄壁の城壁）

—— Make to the embodiment, a
nd as commanded（具現化しろ、命ずるままに）」

結界が出来上がる、某傷んだ赤色様は誰にも察知されない結界が最上と言ったが、そんな高等技能持ち合わせていないことはないが、敵を引きつける意味でもあえて防御力重視、気配は出しまくりのを作成した。

「んじゃ行くぞー、セイバーも、アーチャーも気を付けろよー」

「ッ！？……………バレてたか」

霊体化を解き、出てきたアーチャーは俺の後について黙り込んだ

「行くぞー、士郎、少し暑いぞー」

右手に斧槍、左手に頓珍漢なルビー色のアメジスト、アメジストを徐ろに放り投げ、

「錬鉄者の炎斬」
ハルバート・カスタム

それに合わせて振り抜くと、触れた瞬間に斧槍が炎を纏い、まき散らしながら剣の形を作り結界を切り裂いた。

「ぐうつー！！」

結界を破られ、反動が来た、炎はあらぬ方向に飛び、空中に消えた。

「なに…あれ……」

遠坂が呆然としている、宝具なのに魔術属性を決められていない事に驚いたかそんな所だろう。

「とまあ、こんな感じだ、理解おk？それじゃあ寝るな」

俺は夜まで寝ることにした。

第5話 世界を敵にまわす

結論から言う、この、F a t eの世界はおそらくだがセイバールー
トもしくはアーチャールー、その二つに絞られた。

「しゝろゝうゝ！いつからこんな大所帯になっただよゝゝゝ！」

「こ、これはその！理由があつて！」

バーサーカーが襲ってきた時点で間藤桜のルートに移行することは
なくなった。

尤も、これが、本当の世界なら別の世界線には、《間桐桜が暴走し、
アーチャーが裏切り、キャスターがギルガメッシュに殺され、ラン
サーがアサシン（真）を殺す》ということもあつたかも知れないが、
その可能性はない。断言できる。

「藤村先生、これには訳があつて……………」

「言ってみなさい……………」

「実は、家が改修の折、ホテル住まいの予定だったのでですけど、
衛宮君が……………」

「そうなの、それじゃあいいわよ、士郎もこの家も好きに使ってい
いわよ」

雰囲気的に行くとアーチャールートかなあ、と思っているのだがそ

れが判明するのは少し後になるので今は何も出来ない。

……… まあ、俺の裏スキル：対英霊殺^{サイバヴァンモラー}で全ての英霊を打ち倒すだけなのだがな！フウーハッハハハハハ！！！！

…………… ごめん、無茶した、そんなキャラじゃないよ俺は。

「青景君はなんで士郎の家にいるのカナ？カナ？」

「藤ねえ、これには訳があつてカクカクシカジカ……………」

「そうなの？それならいいんじゃないかしら、青景君、好きに使っていいからね！」

とりあえず、当面はこのルートを壊さないように戦うか、俺的にラッサーと本気バトルしたい。

思い立ったが吉日、俺は直ぐに外に出ることにした。

「ちょー！琳！」

なんだか士郎の声が聞こえた気がするがスルー、少し前に鉈持った少女の声が聞こえた気がするがそれもスルー

「今日、頭痛いから休むな」

士郎に一声掛けて外に出た。

「琳！」

士郎が出てきた。

「ん？」

「気を付けろよ！」

「あいよー」

なんで気をつけないといけないんだか。

そう思いながら俺は、冬木市に行くことにした。

途中、何度か車に轢かれそうになったり、狙撃されそうになった、警官にも発泡された、問答無用で殺した。路地裏だから誰にも気づかれてない、安心したまえ。

狙撃者の対処法、ビルや、マンションなどの屋上を眺め、少しでも光った瞬間ダッシュに切り替えるこれひとつ。

車はすべて実体化させた斧槍を突き出したり、魔槍を出したり、それでも轢かれそうになったときは殴った。

.....手が折れそうになった、でも、車の前半分ひしやげた。

30数えた辺りでやめた、海に近づこうとすればするほど密度が増して来た。

間違はなく、なにかまずい事があるんだろう、世界の意思がそう言ってる気がする。

海に来た、堤防が幾つかあり、釣りをしている人が一人だけが見えた。……こんな平日に暇なことだ。

全く………あんな若いのがアロハシャツ来て釣りなんて………青髪を逆立ててはしたないったらありやしない。

全く………なんで英霊^{サーバヴァント}が釣りしてるんだか………

仕方がないが、ここで殺り合うか、引きつけるか。

「We started being strong because it is weaker than anyone, and, then, it, is not you who must be strong. (誰よりも弱いから我々は強くあるとした、なら、お前は強い筈はない!)」

先制攻撃は小規模に、あとは引きつけて戦う!

風属性の魔術は粉微塵に砕いた水属性のサファイアを巻き込み、粉塵^{ダイヤモンド・ダスト}の嵐と化してランサーへと襲いかかった。

「うお!」

殺気を敏感に察し、身を逸らして躲した、小規模台風は翻ったアロハシャツの裾を切断した。

瞬間、水がはじけ飛んだ、それもかなりの高密度、運動エネルギーは銃弾に匹敵する。

しかし、それすら全て躲した、矢よけの加護は伊達じゃないらしい。

「いきなりご挨拶だな？サーヴァント」

「平日にのほほんと釣りしてるのが悪いんだよ、ランサー」

「今、此処には人はだれもない、殺り合うか？名無しのサーヴァント」

名無しのサーヴァント、というところにすこし悲しく感じた、あんなに死地を共にしたのに……………

「それじゃ、オレの敵ってコトでいいんだよね？」

セタンタは既に戦闘態勢、元からその積りで喧嘩を売ったんだ、買ってくれなくちゃ困る。

「もちろんだ、そして、さよなら……………
ハルバート・カスタム 錬鉄者の斬撃」

大上段に掲げた斧槍が煌き、その輝きが最高潮に達した瞬間、振り下ろした、約束された勝利の剣エクスカリバーよろしく光の奔流を巻き起こし、ランサーが居た場所を焼き焦がした、一瞬だが、海が割れた、そう表現するのが一番だった。

「殺ったか……………？」

呟いたのだが、そうは思えない、あいつなら一瞬で後ろに回りこんで心臓を貫くことぐらいはしてみせるはず、そう考えた瞬間、濃密な殺気が後ろから発せられ、咄嗟に前に飛んでいた。

「チツ……………」

彼の魔槍は俺の頭の上を通過していった、背中に冷や汗が伝った。

「やるねえ、ランサー、お前の速さは世界を超える！」

「言ってる！」

またしても突きの嵐、斧槍で防ぐが、防ぐのに手一杯になり、遂に、俺の手から、斧槍が離れた。

「その首、貰い受ける！」

魔槍が朱の軌跡を残して迫ってくる。

「くっ……………そ……………」

右手を出して、わざと右腕に貫通させる。

「なにっ！」

此方も魔槍を出して突き出す、俺の槍はランサーの右脇腹を貫いた。

「ぐっ……………ふ」

共によると後ろに後退する、ぽたぽたと紅い雫が落ちてはコンクリに染みこんでいく、生命の残滓が体から抜け落ちていく、ランサーも似たような状況だが、俺は腕、奴は脇腹、出血の量が違う、みるみるうちにランサーの戦装束が朱に染まっていく。

「……………今なら、宝具を放てば或いは俺を殺せるかもしれんぞ……………」

肩で息をしながら俺に問いかけてくるランサー、俺は、笑ってこう言った。

「そうだな、……………でも、俺の宝具（笑）は生憎ながら大上段の振りが必要なんだ、片手一つじゃ暴走して俺も死んじまう、それじゃ駄目だ、遣るべきことがあるからな。」

「へっ……………馬鹿なやつだな」

「よく言われるよ、妹にも言われた」

あの時はショックで目の前が真っ暗になった。本当に、

「そろそろ、幕切れだろ……………Both healing the mate and the me in this conduct oneself, recover healing, and divide pleasure each other.（癒しを此処に、我とその相棒を癒し、回復させ、共に喜びを分かち合え）」

かなりの深手、それも二人なので詠唱が長くなってしまった、ご了承ください。

なんともベターな緑色の光が回りを包み、傷が殆どなくなった、痛みはまだ残っているが、ランサーも同じ。

「それじゃ、また今度、お前はまだ死んじゃいけない、絶対だ」

「何……………?」

あつちはまだ全快といたかないようなので俺を追うことは出来なさそうなので放置して逃げた、ちよつと走って後ろを振り返ると、霊体化しようとするランサーの姿が映った。

結果：俺、結構弱い、割とガチで

第5話 世界を敵にまわす（後書き）

フーハッハハハハハ！

後悔はしていないぜ

日常でもバトル、逃げ道はどこにもない。

青景琳

27歳、独身、高校時代に妹を亡くし、以来、守りきれなかったことを後悔している。

父親は妹を守ろうとしたが共に亡くなってしまった。
死因は高所落下、離婚寸前だった両親に嫌気が差しての自殺、それを父親が見つけ止めようとしてそれに至る。

中、高校時代と陸上部で過ごし、かなり走りこんだ。スタミナはかなりの物

年齢？

187cm 81kg

髪の色は黒だが、青みがかっている、眼は黒

宝具

楔打ち消す漆黒朱の槍 ルーカー・ウエージ ランク C

全ステータスアップ（＋表示）、その際片手でハルバートを扱うことが出来るようになる。

槍が当たった際のみ魔術的な加護を全無効化、バーサーカーの加護も打ち消せる。

一発逆転の宝具ではないが、加護を持つ者に対しては死神になる。

楔穿く漆黒朱の槍 ルーカー・ダーカー ランク C

真名開放の際に突く動作と共に朱の軌跡が飛ぶ、攻撃範囲は軌跡全体、先端は細く、3cmしか無い、燃費がいい対人・大軍宝具。

一瞬で伸縮する朱の軌跡を追いきれるものは少なく、恐るべき命中精度で心臓を貫く。

表示外スキル《守るべき人のために》で最大Aの一撃が放たれる。

楔外し翔ぶ漆黒朱の槍 ルーカー・ブラッダー ランク C＋

空中使用宝具、突くのではなく、斬る。

エクスカリバー宜しく漆黒の光が飛ぶ、危険、危ない、取扱注意。表示外スキル《守るべき人のために》のバックアップで最大Bの一撃が繰り出される。

錬鉄者の斬撃 ランク ―

斬撃を飛ばす一撃、ハルバートの銘は決まっていなかったため弱体化、銘が決まると強化、変形する。

世界越える過去への一撃 フォルクジェンス

一撃のみ、自分を傷つけた所を相手に写す、その傷は《過去から存

在した傷』となるので癒えることはない。

一撃のみだが、相打ち覚悟なら必ず殺せる厄介な一撃

軍神奮闘背水戦闘 ランク B

一騎打ちの場合、高確率で自分に有利な状況を作り出せる、複数対自分だった場合全ステータスが強化される。

スキル

戦略眼 C

その場にある状況全てを活用して勝利へと導く力、更なる上のランクに行く状況を整えられ、最大限活用できる事が出来る。

永遠無双 EX

幾度の戦闘を経てもスタミナが切れない、100万の武器を振るつても疲れない、100万無双の逸話（嘘）10万無双の逸話が具現化した結果

幾度も背負う D

背後を取られようと混乱状態に陥ることなく対処できる、アサシン暗殺者には相性の良いスキル
高ランクになると気配察知に変わる。

守るべき人のために EX

後ろに守りたいと願う人がいると全ステータスが限界突破、どんな
サヴァントでも追従してみせる恐ろしい英雄の底力

ステータス（一部、変更があります、ご了承ください）

筋力 E 幸運 D

魔力 A 宝具 B

敏捷 B

耐久 EX

ネタ話

ライダー
「経験憑依」

「これから対峙するは英雄の魂！心して掛かってこい！」

「いや、なんでいきなり戦うんだよ……………？」

青年——青井^{あおい} 朱^{あか}はそう名前を名乗るといきなり

『俺と勝負しろ、それが運命の決定だ！』

と、馬鹿丸出しで喧嘩を吹っかけてきたのが事の発端、俺に非はない、信じてください。

「おおおおおお！！！」

「スルースキル高いなあい！」

叫びながらも斧槍……………名前を付けてなかったな……………どうしよ。を振り上げて彼の持っていた杭を弾く、だが、巧みに両手に持った杭を突き出し俺に攻撃してくる。

「ちっ！卑怯者め！正々堂々戦わないか！」

自分卑怯者だけどね……………。と心のなかで呟いたが、ご愛嬌。

「出る！俺の左腕にして右足！……………ルーカー！」

「せめて手が足か統一しろオオオオ！！！」

魔槍：ルーカーを使い、今度は奴を圧倒していく、顔に汗がにじむのが分かる、奴は焦っている……

「うらぁ！」

不意に杭を投擲してきた、ジャラジャラと音を立てて迫る杭を苦も無く弾く、が奴に動く隙を与えてしまったことは確かだ。

ランサー
「経験憑依」

手には赤い魔槍を、身につけるものは蒼き戦装束、ランサーに似た奴が俺を殺すとばかりに迫ってきた。

ガガガガガッ、と壊れたブラウン管のように音を立てて火花を散らして突き出された魔槍を弾いた。

ランサー
「まだまだ！経験憑依」

一瞬だけ光が瞬いたとおもったら薄い光の膜が朱の体を覆っている。

ハルバートカスタム
「錬鉄者の——水剣！」

サファイアの宝石を叩きつけて発動、ランクはおそらくB未満……
…通るか？

水剣は奴の体を直撃したかのように思えたが斧剣に防がれた、弾けた水剣の残滓が彼の体を打ち付けるが無傷……加護持ちでした、厄

介です。

なんて化け物だ……英霊の能力を丸パクリとは……シン
ジラーレナーイ！

まあ、ふざけてるとガチで殺られちゃうので本気を出すことにした、
……余談だけど、彼、能力使い始めだね、使いこなせてない
つか、俺と同じ境遇パターン？

「ウオオオオ！」

「ぎゃー！こつち来とるー！」

強力なH U K E Nが俺をミンチにしようと襲いかかる、とんでもなく面倒です。

またもや力比べ、そろそろ腕痛くなる、筋肉痛になる、助けてー

「今作初登場！前代未聞なあらゆる魔術的な加護、神による加護を打ち消す事が出来るー！作者の都合により生み出されたとんでも宝具（笑）！作者も『これ、本当に書いちー』」

「ウオオオオオ！」

「最後まで言わせろーやって大丈夫か」バーサカーと心配になった狂戦士に対する死神宝具、ちなみに能力が付与されている武器……例えば傲慢王のエルキドゥ、これも打ち払えるすごい宝具ー！
ギルガメッシュ

話は最後まで聞きましょう、とばかりに蹴りを食らわす、もちろん、

ダメージはないが目眩ましには十分だ。

「さあ、いよいよ御披露タイム！喰らいな！楔打ち消す漆黒朱の
ルーカー・ウェー
槍イイイイ！」

「グウモオオオオオ！」

くぐもった叫び声が聞こえる、鉛色の肌に漆黒朱の槍が突き刺さっている、これ、真名開放の時しか効果発揮されんのが嫌だわ、そのかわり当たってる最中打ち消せるって最高でしょ。

「あああ！」

ぱらぱらと光の残滓が彼の体から落ちる、既に、狂戦士の面影はなく、一人の青年がいた。

「あ——」

気絶したみたいです、いきなり襲いかかれたのは良く解らんが、これもきつとそういう事なんだろっ、帰ることにしよう。

気を取り直して士郎の家に帰ることにした。

日常でもバトル、逃げ道はどこにもない。（後書き）

7月10日 ご指摘頂きました故ステータス改変、弱体化しました

第6話 F a t eへ望みを謳うもの（前書き）

題名変えました、F a t eの舞台になったんで変えました。これから
もよろしく願います

第6話 Fateへ望みを謳うもの

「それで？士郎はなんて言っただ？」

所変わって衛宮邸、日常で戦ったことは無しにして遠坂と話合っている最中である。

「士郎は学校に行く、と言ってるわ、自殺行為もいいところね」

「……………」

「俺の意見としては行っただけじゃないな、一人で学校に行くとは、自殺だな」

「……………」

士郎くん、黙ってないで発言すればいいのに。出番が三点リーダーなんて恥ずかしいぜ。

「でもまあ、セイバーを護衛として付かせればいいんじゃないか？オレもいるし」

「琳！それ、本当か！？」

「ええい！黙りこみからいきなり叫ぶな！耳が痛くなる！」

「士郎、貴方って人は本当に馬鹿なのですわ」

セイバーも加勢、これで構図としては反対派：遠坂、セイバー 中

立派：俺　賛成派：士郎

弓の野郎は外にいるらしく顔を出していない。

「セイバー、聖杯戦争の最中だからって学校を休むわけにはいかな
いだろ」

「士郎、それで敵に殺られたのならあなたの命と私の消滅を意味し
ます」

「ぐっ……………」

あらら、完全に押し切られてる、これは行かなさそうだな

「琳！お前の意見は？」

「青景君、あなたの意見、聞かせてくれる？」

「琳、あなたの意見を」

上から士郎、遠坂、セイバーの順。

「俺の意見か？」

ルートの考えると行くべきだ、つーか放っておいても行くんじゃない
ね？、と一瞬思ったが、呑み込んだ。

「行くべきだな、敵を引きつけるには丁度いい、それに、あの学校、
結界張つてあるぜ、宝具級の、中全部どろどろに溶かすエゲツない
結界宝具」

「なんですって?」

「行くべきだと、そう言うのですね、琳」

「琳、信じていた!」

お前らの着眼点そこかよ……………

「結論だ」

バン、と机を叩く、お茶が溢れる、茶菓子が飛び出す、机が折れる。
…………… ってそこまで酷いのかよ。

「「「あ」「」」

声揃えるなそこ、罪悪感が半端ない

「と、とにかく、士郎は学校に行くべき、アーチャーは遠坂の護衛、セイバーも常に学校の近くで待機、霊体化できないんだろ?その手段で行くべきだ、俺は……………護衛……………」

「要らないわね」

「要らないよな」

「要りませんよね」

遠坂、士郎、セイバーの順でお送り致しました。

「まあ、要らないから学校の調査、これでいいー!」

こうして、士郎の馬鹿野郎案は採用された。

「ここが……………ガッコウ、ですか」

「見たことは無いのか?」

「聖杯による知識にはありましたが、見たことは……………」

「そうか、よし、ここらへんだな」

士郎が示したのは、学校近くのスーパー「ダルエー」此処に行くと
だるくなることで有名だ。

「分かりました、ここで待機します」

「よし、んじゃ学校だ!」

登校する人もまばらなこの時間、遅刻ぎりぎりだよな、衛宮の虎や、
間桐の花と会ってなかったから時間狂ったか……………

「よし、見つけた……………」

集中し始めた遠坂を余所に、周りに警戒の目を配っているアーチャー

「終わったわ、次行くわよ」

「了解した」

赤き主従は授業中の校内を徘徊する

「おい、これって結界の起点だよな」

「そう…だと思う、一番甘ったるところはまだ遠いけど」

場所は屋上、ど真ん中にこれ見よがしと設置してある結界を破壊している最中である。

「ま、壊しておくことにしましょう、Destruction（破壊）Starting point end（起点終了）」

両手に魔力を集めて、結界破壊の歌を唄った。

自分のイメージを声に出すだけでいいとは…便利だな、魔術って。

毎回規定の呪文を唱えないといけないRPGの魔法よりよっぽどか

マシだと思わないか？

嬉しい限りだ。

「琳っ！不味い！一気に甘ったるい感じ……があ！」

とうとう、結界を発動された、禍々しい血色の結界が学校を包み込んだ。

「士郎っ！……^{レジスト}落ち着け、自分の体に魔力を通して、循環させるんだ、魔術師なら抵抗出来るはずだ」

ゼエゼエと声を荒らげて肩で息をしている士郎を介抱させ、校内へと入った。

「一応、セイバー呼んどけ？令呪使わなくても大丈夫なはずだ」

「ハア……ハア、分かった……」

結構つらそうだな……士郎、……あ、だいぶ良くなってる、放置でいいんじゃない？」

「琳……面倒くさいって本音出てる……」

「あ、悪い……、つつい……で士郎、こいつらは学校に居たっけ？転校生？」

「いや、こんな転校生、気味が悪いな……遠坂っ！」

「士郎！こいつらは学校の中央に向かっているわ！青景君に任せて

行くわよ！セイバーも到着したみたい！」

ガンドを放ちながら此方に向かってくる、結構当たりそうなんだが……、

槍をくるくる回してガンドを弾く、ついでにバッターの構えをして打ち返す。

「おっと！ライナー二遊間！骨の走者^{ランナー}に当たりました、粉々でアウトです！」

「どういう実況してるのよ！アンタ！！」

「士郎、凜、サーヴァントの気配がします、それも複数、急ぎましよう」

セイバー到着、アーチャー行方不明、あとで殴ることに決めた。

「セイバー……、士郎、行くわよ」

「あつ……ああ任せた、琳、死ぬなよ？」

「OK、何時でも何処でも死ぬ覚悟は持ち歩いてる、じゃあな！士郎！………錬鉄者の斬撃ウ！」
ハルバート・カスタム

斬撃は飛び、校内を粉碎しながらも竜牙兵を飲み込んでいく、一瞬にして、廊下には竜牙兵は居なくなつた………けど、すぐに階段から出てくる、まさにスライム！何回やつても全滅に追い込めない！そこに痺れる憧れるう！

「あら？そんなに余裕でいいのかしら？」

「だあまれ、くそ魔女^{ウィッチ}が、裏切るのは楽しいかあ？」

後にはコルキスの王女ことキャスター、一部ファンはキャス子の愛称で呼ばれている。

「魔女ですって……？あなた、死ぬ覚悟は出来ているのよね？」

「モチのロンさ！こんな俺でもここで活躍出来れば神様もびっくり仰天かって」

「何をブツブツと、早く死になさい」

「「キシュー！」」

「うわっキモ！錬鉄者の斬撃^{ハルバート・カスタム}」

待ったなしの偽宝具発動、こいつの名前決めたいな……

「そしてそしてー！………来い！漆黒朱の槍^{ダーカー}よ！」

手に感触、これまたイタイ宝具漆黒朱の槍^{ダーカー}。ハルバートを消してキヤスターに走りよる、振りかぶらずに閃光の如き一閃、確実に貫いた、と思ったが、思いとは裏腹に手に伝わったのは軽い感触だった、まるで……瞬間移動とかの残滓の跡とか……？

「こいつ………転移が出来るんだった……！」

（ノ、）アチャー

「フッフ……無様ね……」

「黙れクソ魔女、^{ウィッチ}お前に一片の慈悲はないぞ！」

俺は裏切りが大ッキライです！

「おらおらおら！オラオラオラオラ！」

転移した後の残滓ばかりが手に伝わるが、転移し終わった所に駆け寄りまた一閃、次第にキャスター到着から俺の一閃までのラグが短くなり……遂に……

「グッ……」

「獲った……」

その体を貫いた、竜牙兵諸共殺し尽くしていたため廊下にはもう人は居ない

「だけど……惜しいわね……フッフッ」

「だから黙れと言っておろうが、クソが」

もう一度言おう、俺は裏切りが大ッキライだ、その傀儡キャスターも嫌い。

キャスターの衣が円を描くように周り、消えた。

「チッ……」

廊下には、生きている者は一人しか居なかった。

「ボクじゃない……ボクじゃない、ボクじゃない……」

「慎二ィー！　どういう事が聞かせなさい！」

間桐が逃亡、遠坂と士郎が追いかけようとするが、教室で倒れている人たちの介抱に移った、セイバーも同様である。

数時間後……

「クソが！あんな使えないサーヴァント遣わせやがってえ！」

「少年よ、まだ戦う意思は有るのだな？」

「あん？あるに決まってるだろ！」

「丁度いい、今丁度手が空いているサーヴァントが居てな、そいつを遣わせよう」

何処か分からぬ暗闇の中、言峰綺礼は間桐慎二に最古の英雄王を遣わせようとしていた……………

続く？

第6話 F a t eへ望みを謳うもの（後書き）

どうも、久しぶりです。

馬鹿みたいですがどうかお付き合い下さい。

第7話 対物語の中の侍、琳は布石を打つ

「さて、被害報告といこう」

「死者は誰もいないわ、幸い、結界の解除が早かったようね」

俺達は、冬木大橋の所で報告を行なっている、メンバーは俺、遠坂、セイバー、士郎、アーチャーは知らん、士郎を殺そうと頑張っているのだろう。

「凜……………」

噂のアーチャーが到着、いつもの笑みを浮かべている、皮肉的な笑みだ。

「アンタ、何処行つてたのよ！アンタが居ない間に私たちがどんなに苦労したか！今から聞かせてやるから、そこに直れっの！」

「士郎、セイバー、帰るぞ、ここは遠坂が怒っているから放置するぞ」

「……………了解しました」

「分かった、遠坂、後でな」

二人から了承を得たところで帰ることにした。

いつも通り、土郎と藤村大河がギヤース力騒いで、セイバーが大食いして、間桐は来なくて、遠坂は黙々と、アーチャーは屋根の上、俺も屋根の上。違うところは俺が飯を食わずにアーチャーと一緒に居るところか。

「青景琳、貴様か」

「よう、アーチャー……………いや、英霊エミヤ」

すこし、不愉快そうに眉を顰めるアーチャー、鳶色の双眸は俺に見

少し、疑問気な視線を断ちきって屋根から飛び降りた。

深夜

衛宮士郎が衛宮邸から出た、キャスターの魔術にかかっているらしく、行き先はキャスターの本拠地、『柳洞寺』

先ほど、青景琳が言っていた意味が分かりきれていないが、この際無視だ、衛宮士郎をこの手で殺す。

その為だけにオレは、聖杯戦争に呼ばれたのだと実感した。

痛感した。

殺るしかない、そうすれば、絶望に塗れた『エミヤシロウ』は居なくなる、『正義の味方』になるうとした『衛宮士郎』も死ぬ、全てが終わる、だから、

「これでいいんだよな……………ジイさん切嗣」

ム……………少し考え事をしていたらかなり離れていたようだ、既に柳洞寺近くまで行っている模様だ。

赤い弓兵は柳洞寺に行った衛宮士郎を殺すくいに行った。

同刻

「士郎…………アーチャー」

待ちに待ったこの時、キャスターVSアーチャー&士郎、（実際は共闘しようとしてしているわけではない）楽しみで仕方がない、“剣豪”と名高い佐々木小次郎、楽しみだ。

「殺ってるね」

柳洞寺、階段、階段の奥からは既に爆発音が響いている、尤も、一般人には聞こえないように結界を張っている、俺には聞こえるが。

カッン、

足を掛け、階段を登っていく、割と気楽にいるのは、主人公補正が死ぬわけではないという理由に依っている、…別に主人公に成れないのが残念というわけではない、本当です。

不意に、

「今宵はいい日だ」

侍が、階段の上に居た。

群青色の陣羽織に薄い青の下着、袴も陣羽織と同色、片手で持っている得物、かなり長い。

「そうだな、いい日だ、月も綺麗だ、死合も出来る、そうだろ？ 佐々木小次郎」

すこしだけ、驚いた様子、動揺の色は見えない。

「これはまた不可思議、いいだろう、この身が果てる前に、尋常に――」

「応とも、早々にケリを付ける！」

「「勝負！」」

階段を駆け上がる、小次郎はその場で迎え撃つつもりだろう、防御に向いている上の有利は捨てるつもりではないだろう。

「そおら！」

ハルバートを振りかぶり、一閃

「ふっ」

長刀で流される、轟音と共に決める石段

「まだまだあ！」

ハルバートから魔槍^{ルーカー}へ持ち替えて一閃

またもや流される、構わず突く

彼も流しのカウンターで一撃を放つ、弾いて逸らす。

ゴォ！

右手一本で長刀を弾いて左手一本でハルバートを振るうがギリギリのところ躲された、あれは自信ある一撃なのに、悔しいです！

「本気はそんなモノなのか？」

挑発の声が上から振りかかる、気にせずに、三倍ぐらいの力で振りまくる、決して全力でムキになってるわけではない。

「力が入ってるな」

全部躲されたので一旦下がることにした、決して疲れたわけではない。

「侍、キサマ、まっとうな英霊じゃねえだろ」

「応とも、佐々木小次郎という英霊は存在しない、しかし、それが民の間で語り継がれ、唯一不変の存在へと昇華した」

涼し気な表情で喋る小次郎もとい話の中の主人公を余所^{エセサーヴァント}に、砕けた石段の欠片を手にとった。

「それで？その素晴らしい物語の主人公サマがこんな現世にどうした？」

「いやいや、この身は名もなき武人でな、必死に武器を振って次第だ」

「馬鹿か？ただの武士風情が英霊になれるとでも？」

「話を最後まで聞いてもらおう、……その只の武士は、剣の才能があった、努力もした、しかし報われなかった、つまらなかったのにな、ある日、戯れに燕を斬ろうと試みてな」

ポツリと話し始めた、黙って聞くことにした。

すると、侍は俺がいる石畳まで来た、階段の段差がない、石畳。……瞬間で理解した、こいつは、間違いなく俺を殺^とりにくると。

懐を探って無色透明の宝石を取り出す。

「しかし燕は疾い、斬ろうとしても避けられるばかりでな」

体を横に流した、こちらに背を向けるほどに。

「だから、太刀筋を増やしてみた、二本、まだまだ駄目だった、振るえど振るえど上下からの斬撃は横に避けられた。太刀筋を三つにしてみた、すると、斬れた。喜びのあまりそれを技まで昇華させた」

チャキ、と刀を構える侍、濃密な殺気をまき散らしながらその秘剣を剥き出しにした。

「秘剣——燕」

「させるかよお！」

「返し！！！」

・

無色透明の宝石を一気に爆発させ、石畳を粉々にした、佐々木小次郎の足元を、隠し持っていた石畳の破片を顔に投げる。……………全力で

「ムッ！」

体勢を崩された小次郎の顔面に石礫が飛ぶ、ギリギリで弾かれるが問題ではない、体勢を崩し、隙をさらけ出させたことに意味がある！

「琳っ！」

後ろから声がかかる…恐らくはセイバー、気配も同一、後は……

「任せたぜ！」

「あっ！琳っ待ちな……」

佐々木小次郎の上を飛び越え階段を駆け抜ける。

後では既に剣戟の音が上がる、セイバーも抜けようとしたところを侍が防いだみたいだ。

さて、裏切りの魔女はどうなるかな？

第7話 対物語の中の侍、琳は布石を打つ（後書き）

少々長くなりました。スイマセン

第8話 戦闘の中、琳は謳う

「うわぁ！」

こんにちは、こんばんは、琳です。侍を不意打ちして抜けてきて士郎と合流しようとしたら弓兵ことアーチャーと士郎が仲良さ気にキヤスコの攻撃を躲しているじゃないですか、驚きましたよ、ええ。

……まあ、アーチャーが捕まって干将莫耶投擲したところまでは見た。

「俺の方にも投げるとはねえ」

アーチャーは干将莫耶二本では無く、四本投擲していた、慌ててはじくが、しつこいぐらいに三度、四度と俺に刃を向ける。ねちねちなウ。

「セエイ！」

叩き落としたら完璧に消滅した。最初からそうしておいたほうが良かったです。

「——カ
ラドボルク
偽・螺旋剣？」

アーチャー秘蔵の一品宝具でキヤスコを撃墜したアーチャーはキヤスターと何かを話すと、キヤスターを逃がした。

これは、士郎が殺られるパターン、阻止しないと。

そう思つて駆け出した、が。

「邪魔は……させないっ！」

こちらにもカラドボルクを放つ準備をしているアーチャー、あれを防ぐものは俺は持つていない。

後ろに飛んで離れようとしたが、離れた瞬間、奴は宝具発射を止め、干将莫耶で呆けていた士郎を一閃した。

「罨かよ畜生っ！」

思わず毒づいたが、おそらくは死なないはず、ふらふらな士郎は階段の方に背を向けている。

「士郎っ！」

「ちっ！」

俺が士郎を突き飛ばすのとアーチャーが武器を振ったのはほぼ同時、奴もまだ来ないと油断していたのか、それとも士郎を優先させ、俺の警戒を怠ったかは分からないが、とりあえず幸運に感謝だ。

助けられたのはいいが………背中に焼け付くような痛みが発生したのは嫌なものだ。

「士郎、降りるぞ」

「えっ?……琳かつ！」

立ち上がらせて階段から……………突き飛ばした

「わあああああ！」

「達者でな」

「……………余計なことをしてくれる！な！」

「黙れ！過去なんて変わらねえよ！！！」

振り向いてのハルバートで一撃、アーチャーも干将莫耶で受け止める、階段の入口から境内に戦いの場所を移すことにした。

「貴様に何が分かる！」

「なんにも分からねえけどよお！目の前で友人殺されるのは胸糞悪いんだよ！！！」

二度目の衝突、手数では負けているが一撃の危険度は俺が上だ、一撃食らわせたなら二度と立てなくさせれる自信がある。

……………もつとも、封殺されては攻撃のしようがないのだが、もうちょい軽ければいいのだが。

「いい加減にしろっ！」

声と共に双剣の一撃、俺はワザと押し切られたふりをして階段へ落下した。

ゴロゴロガツンバキンドスンバキガスゴロゴロゴンドスバキメキメ

キチュドーン、と音を立てて階段の踊り場で停止した。

「先程は見事だったな、人の身で出しぬかれたのはお主が最初だ」

「よお、侍、攻撃はしねえのか？つーか後ろ見てみる、殺されちまうぜ？」

「ぬ？……よかろう、弓兵、一度は通したが、次は返さんぞ」

首倒立の体勢から起き上がり、侍の横に立つ。

「侍、一時協力しろ、そのほうが楽だ、俺も、お前も」

「青景琳、貴様はオレが殺す、障害を取り除いたらあの小僧を殺し、この運命を解放させる！」

怒りを声に滲ませながら双剣を構えるアーチャー、それに応じ構える侍、俺。

「一度だけ言つといてやる」

「……………」

「今のお前と衛宮士郎エミヤシロウは別物だよ、殺したところでおそらくその運命は変わりっこない」

「“おそらく”だろう、その可能性が有るのならオレは奴を殺す」

「……………もういい、お前と話すことはない、あとは殺り合うだけだ」

「もう良いか？ならば……………始めよう」

侍の号令で戦闘第二幕が始まった。

異変に気付き、居間に行くと、そこに、キャスターと藤ねえがいた。

「藤ねえを離せ！」

「……………」

「藤ねえ！」

「……………フッ」

キャスターが突き飛ばした藤ねえを受け止めて気がついた、これは俺と藤ねえを“罠”として使った、と。

ガスッ、とナイフの様な短剣が俺を守ろうとしたセイバーの胸を刺した。

「……………クッ、アアアアアアア！！」

瞬間、何かが根刮ぎ剥奪された感覚が伝わった。

「宝具、破戒すべき全ての符、あらゆる契約を無効化する、裏切りと不浄の剣」
ルールブレイカー

「アンタ——セイバーを……………！？」

遠坂が驚きの声を上げる。

「ええ、使い魔にしたのよ」

「手始めに、そこの小娘を仕留めなさい」

マズイ、これ以上俺のせいで他人を傷つける訳には……………！！

振りかざした剣を視界に収めながら、遠坂を守るために体を動かした

「オオオオオオ!!」

「ハアアアア!!」

衝突しては離れる、隙を見ては侍が刀を振るう、それでも仕留め切れないのはやはり奴が防御に長け、なおかつ立場が上にいることが大きいだろう。

「っぐ! うおおおお!!」

急激に変化させるローキックを受けた俺は直ぐにハルバートを叩きつけて後ろに下がる。

「侍! 交代!!」

「承知」

短い遣り取りで前・後衛を交代させてアーチャーを攻め崩すための策を練る。

既に剣戟の嵐と化しているが覚悟を決め嵐に身を躍らせた。

「押忍、おら、琳！」

「死ね」

瞬時に振るわれた二刀、惚けるのも大概にし、反撃、応戦を仕掛けてチラチラと侍を見やる。

「……………（コクン）」

頷く気配、視線の遣り取りを確認したアーチャーは直ぐに攻勢を強める。
それを

豪雨と見間違えるような火花の量、応戦も叶わず押されていく

待っていた

「じゃあな、アーチャー」

「……………ツム！」

一瞬だけ力をゆるめ、押されきった所で後ろに飛ぶ、その時点で侍は

「秘剣——

アーチャーは双剣の片割れを地面に突き刺した、意図は不明、もはや気にかかる暇すらない。

「燕返し——！」

フローケン・ファンタズム
「壊れた幻想」

「……………ッやられた」

二太刀を双剣で防ぎ、爆発で押し返す、彼の完璧な対応で燕返しに対処され、爆発の煙で逃げられた。

完璧に俺の負けだった。

「侍、いい共闘だった」
タカカイ

「そつだな、楽しめた」

「じゃあな、侍」

「……………逃がすとても？」

「逃げてみせる……………！！！」

懐から小さな球を取り出し、地面に叩きつける。……………途端、煙が大量に発生し、奴と、俺の視界がZEROになった。

「あばよ、とおっつつあ〜ん」

「逃さぬ！」

足を剣筋が掠めるがそこまでに終わり、離脱に成功した。

第9話 裏切りの報復

「なんだよ……………これ……………」

現在地、衛宮邸……………俺はこの惨状に言葉を失っていた。

魔力の残滓、大量の血液…既に乾いている、揉みあつた跡、机や障子が散乱、ガラスが外に飛び散っている等々。

一言で言うともさに混沌^{カオス}。

恐らくはキャスターが襲撃しかけてセイバーを宝具で強奪↓土郎怪我を負う↓離脱↓俺到着。

つてな感じだろう。

推測の理由は魔力の濃さ、俺が到着するギリギリで退散したんだろう、魔力開放の跡がありありと残っている。

ついでに言うとも結界が巧妙な手口で破られている、こんな事魔術師^{キャスター}の名を冠する者しかできぬ芸当だろう。

俺は強行突破が基本なので無理だが。

「士郎達は……………」

この様子だと、遠坂は士郎を離脱させて自分たちでキャスターに喧嘩を売る気だろう、原作を知っている俺は難なく根城を看破できる。

なら答えは一つ俺が目指す所は……………

アインツベルンの森・現代まで残る古城を目指し。

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン、バーサーカー狂戦士の両名を助太刀、救出。

それが、最善。

「ハア……………」
「……………」

片手には木刀、空いている手はさっきセイバーに貫かれた肩に置いているが既に傷は塞がり、痛みが残留しているだけだ。

教会に向かおうとする遠坂を追い、地下に降りてきたのは先ほど、階段の踊り場で身を隠すために腰を下ろした。

既にキャスターとそのマスターである何者かとアーチャー、遠坂が何かを話している……………って！

「あれは……………」

脳裏に思い浮かぶのは常に無表情で淡々と授業を進める一成が《兄貴分》として慕う教師の顔だった。

「葛木……………先生」

何故キャスターに肩入れしているのかと怒りで木刀を持つ手に力が入った。

「それで……………？死体は確認したんでしょうね」

「どついう意味かしら？」

遠坂はキャスターの返答にどんな気を良くしたのか、笑いながら言った。

「ッハハ！……………綺礼がそう簡単に死ぬタマかったの」

一瞬だけタメを置いて、キャスターを見据えて言った言葉に俺は少し驚いた。

「つくづく使えない女ね……………貴方」

つまらなそうに、本当につまらなさそうに放った言葉はキャスターを挑発するのに丁度良いらしかった。

「……………」

「……………」

遠坂とアーチャーが何かを話しているように見えたが聞き取れなかった、すると、徐ろにアーチャーがキャスターの方に歩いて行く。

俺も、遠坂に直ぐに合流できるような位置に少しずつ移動は始めた。

「竜の歯を依り代とした人形ヒトガタはフルキソウの魔術と聞く……………その王女メディアは稀代の魔女と謳われたそうだな」

「そう……………なら、この場合はどちらが優勢か分かるでしょう？……………セイバーはまもなく完全に私の手に落ちる」

「令呪を使われても、セイバーなら抵抗できる。……………それが僅かな時間だとしても、貴方を仕留めるには十分だわ！」

「不可能だな」

「えっ……………？」

ポツリと、ただ、確かに、アーチャーはその言葉を呟いた。

「以前の話、受けさせてもらう」

「フッ……………一度は断ったのに、腰が軽いコトね……………」

「状況が変わった、セイバーがそちらに着いたのなら、勝機はオマエにある」

「アーチャー……………貴方……………！」

「さっ、契約破りを使え」

遠目で上手く視認できないが、キャスターは頷く気配を見せ、スッと近寄り、短剣をアーチャーの胸に突き立てた。

光が発生したのも突然で、終わるのも突然だった。

「……………クッ……………」

敗北認めたらしい遠坂が階段の方に逃げる、俺は遠坂の背後を守るために階段から飛び降りた。

「士郎……………!？」

「ウフフッ」

……………さて、どうやって此处から逃げようか、なんにも考えてない!？

「……ック……………」

正面からのキャスターの魔力弾を正しく渾身の力で蹴散らす、それだけで強化が足りない木刀は二つに割れた。

既にキャスターは次弾なるものを手に集めている、武器がほしい……………あの魔力弾を吹き散らせるだけの武器が。

出さなきゃ、殺られる、なら、どんな手を尽くしたって、いい筈だ……………!

「^{トレース}投影——^{オン}開始！」

俺が今使える最高の手札、それが投影魔術。

此れを使つてなんとかこの局面を乗り切らないと……………

すこしだけ、両手に有るこの武器を見やる。

中華剣、干将・莫邪。

^{アーチャー}弓兵が使っていたものとほぼ同一。

キャスターの魔力弾を切り裂くために集中し、三つの魔力弾全てを斬り落とすことに成功した。

代価としては、左手の裂傷、投影具が壊れ、ガラス片が左手を斬っていた。

「待て、キャスター」

更なる魔力弾を準備しようとするキャスターに静止を掛けたのは赤い弓兵だった。

「オマエの軍門に下るためには条件がある」

「条件……？何を今更」

俺は、いつキャスターが魔力弾を撃ってきてもいいように再度投影を開始する。

「この場では奴らを見逃してやれ、……………どの道、マスターとしては機能しない者だ、殺す価値もなかるう」

後半部分で俺の事を見据えたことに若干イラッとしたが、ここで逃げられる機会を不意にする訳にはいかないので黙っておく。

……………少しだけ、キャスターが考えこむ仕草をして、

「いいわ、敗者は敗者らしく、早々に立ち去りなさい」

「……………クッ……………」

後ろで遠坂が歯を噛み締める音が聞こえる、屈辱的だろう。

「……………行きましょう」

ツカツカと階段へ足を向ける遠坂に続き、俺も続く。

最後に、アーチャーがなんとも言えない顔をしていたのが気がかった。

第9話 裏切りの報復（後書き）

7月23日、改変しました。なんだか納得いかない作だったので
w

第10話 裏切りの策略（前書き）

クオリティ低いですけど宜しくです。

第10話 裏切りの策略

現在地・アインツベルンの森

結界を発見した俺だが、薙ぎ払って壊して突破した。

もともと、あの結界は何者かが襲撃した時のみに発動するタイプだったから、俺に被害はなかった。

「すみませーん！城って何処にありますか？」

かー、かー、と反響していく俺の声、コダマですか、いいえ、俺だけ。

とりあえず、馬鹿な事をしてても始まらないので真っ直ぐに駆け出す。

急がないと、ギルガメッシュ英雄王がバーサーカーを殺しに来る、今正に、殺し合っている最中かも知れない。

急がないといけない。

「はぁ……………はぁ……………フッフ……………フーウアハハハ！」

某マッドでサイエンティストで厨二病な大学生の叫びをパクってみるがあまり元気はでない、フーか恥ずかしい。

見つかった、走り続けてようやく辿り着いた。

なんか嬉しい。

「失礼しまーす」

正面突破もありかな、と思ったので、正門？らしきものを開けて入ることにした。

「イリヤスフィールさん？居ますかー！？」

エントランスホールらしき所までやって来て、二階を見渡すが、人

の気配がない。

不意に、

「私に何の用かしら？一般人」

「話を聞いてくれないか？…士郎の友達なんだ」

イリヤスフィールは傍に狂戦士を既に配置しており、何時でも襲撃に耐えられる準備をしていた。

語弊があつたな、襲撃に対応して、潰せる準備をしていた。

「少しだけ聞いて上げる、つまらなかったら、貴方、殺すから」

「わかった！ありがとう！」

イリヤスフィールに許可を得た俺は、すぐに、自分の過去、そして、この未来が分かること、イリヤスフィールのバーサーカーがギルガメッシュと呼ばれる英雄王に殺されることを包み隠さずに話した。

「信じてくれないか………？」

「信じるわけ無いじゃない！バーサーカーは最強なのよ！」

「信じてくれ！このままだと、バーサーカーが死ぬんだぞ！」

「ほう………？なにやら雑種が一人紛れ込んでるな」

エントランスホールに響き渡る声、俺もすぐに、さっき俺が入ってきた入り口に体を向ける。

ジリジリと後退しながら。

チキンって思ったやつ、あとで覚えとけ。

「なんの話をしていたか興味が有るところだが、雑種、オマエに用はない、疾く死ね」

そう言うのと、後ろの空間から一つ武器を取り出すと、投げつけてきた。

「ハッ！………」冗談ッ」

軽く落として拾って投げ返す。

「フン………雑種、よっぽど死にたいらしいな」

「うつせ！死ぬ気なんてさらさらねえよ！………イリヤスフィール！バーサーカー連れて逃げろ！」

「ふえ？」

こういう時だけ炉利ですか分かります……………って分かんねーヨ！

「早く！バーサーカー！言葉通じるならイリヤスフィール連れて逃げろ！」

「話す暇があると思うのか？この雑種が！」

お次は四本。

二本は避けれて、一本はハルバードで落としてもう一本はルーカーで落とす。

あー、これ死ぬ確率高いなー。

なんて思いながら叩き落とす俺。

「ほらっ！上手く躲せよ！」

なんかあっち楽しんでるんだけど、失礼じゃね？こっち命かけてるのに…………

「又ウアアアアアア！……！」

なんかイラッときたわ！すっげーイライラする！

六本全てたたき落として再度構える。

次は八本。

ギリギリ掠るだろう三本は体を捻ってやり過ごす。

標準が甘い三本は避けられる。

残りの二本は、叩き壊す！

「ハア……ハア……ハア……」

疲れた……………。

「もう終わりか？余興にもならなかった、死ぬ、雑種」

次は倍の十六本

ハルバートを両手持ちに切り替えて、大上段から振り下ろす。

「錬鉄者の炎斬！」
ハルバート・カスタム

「何っ？」

ゴウマンヤロウ
英雄王が驚いた顔をしているが関係なし。

かたまって飛んできた五本は巻きとって散らせた。

刹那にも満たない時間の中でハルバートを落としてルーカーの穂先

「バーサーカー！戻るわよ！」

「■■■■■■！！！！！！」

足を止めようとしない狂戦士。

理性でなく、本能で、琳の言葉を信じた彼は、マスターの言葉に耳を貸す事無く、マスターの命を守るために駆け出していた。

第11話 裏切りは此処に

「アアアアアア！」

ギルガメツシュの危険 ドキドキ射出劇を乗り越えて、追撃をしよ
うとするギルガメツシュに牽制程度にちまちま投槍攻撃を敢行して、
逃げ切った俺は、バーサーカーに追いつくために超DASHしてい
た。

幾度も樹の幹に躓きそうになりながらそれでも足を止めることなく
走り続けた俺は、とうとう。

「あれ……？」

「よく我^{オレ}の前に顔を出そうと思ったものだな、雑種ウ！」

ギルガメツシュの前に踊り出た。

「いやいや、なんで街の方にダッシュしてたらこいつの前に出るん
だよぉ！」

嘆いてみせるが時既に遅し、後の祭り。

「せめてその散り様で我を楽しませろ！」

「ウワアオ！」

チュドン、と足元で炸裂する宝具。

緊急回避で避けたのはいいのだが、コイツの前にずっと居ると、体に穴を開けられない。

「ええい！うろちよると手間を掛けさせるな狗ウ！」

「狗っていうな！この野郎！」

シュツ、とハルバートをあの野郎の足元に投げつけて牽制すると、背を向けてダッシュで逃げた。

「逃さぬ……………天の鎖よ！」

ジャラジャラと音を立てて迫る鎖、避けようとするが、叶わずに足を捕られるオレ。

……………この状況って案外まずくね？

「うおおお！やべえ！殺られる！」

「クツ！騒ぎ立てるな雑種！」

片っ端から地面に突き刺さってる奴の宝具で斬りつける、すると、簡単に鎖が外れた。

神性が無いオレは簡単に壊せる事を忘れていた。

「何イ！？」

「あばよ！」

驚いて固まっているギルガメッシュに鎖を投げ返し、体勢を整えた

瞬間に逃走を計った。

「案外ギリギリだったあー」

「なんでそんなしんみり言えるのよ！」

いや、生きて帰れたし、いいかなと。

因みに話している人は遠坂嬢、俺もあの死地から帰れたことに安堵しすぎて性格が変わってしまった、イカンイカン。

「それで、アーチャーは裏切り、代打がランサー殿と」

「そうよ、貴方はどうしてたの、私たちがピンチだったのに！」

「バーサーカー救出してた、話したら、仲間になってくれるって」

遠坂達はあのあと、教会から撤退していたところにランサーが参上し、そのまま衛宮邸に帰宅したそうだ。

すこし食い違いはあるが、ランサーが仲間になったことに変わりはない、俺という異常が存在している以上、このようなイレギュラーは計算済みだ、大して驚きもしない。

「……そう、貴方がどうやってあの子を仲間にしたのかは分からないけど、これで戦力は十分だわ、セイバーを奪還しに行くわよ」

「ただいま……琳じゃないか！何処行ってたんだ」

士郎が居間に現れ、

「あん？あの時の奴じゃねえか、よお」

ランサー……セタンタも登場した。

「よお、セタンタ、久しぶりじゃねえか」

挨拶を交わして、全員が揃った。……バーサーカーは図体がデカイので、家の外に待機、可哀想に。

「それで？リンは何をするつもりなの？」

イリヤスフィールが遠坂に質問をする。

「セイバーの奪還、アーチャーの奪還は・・・この際置いておくわ。
・・・あとは、キャスターの殲滅」

「ちょ！遠坂、いいのか？」

「いいのよ、あいつは自分で私から離れた、もとに戻そうとしても
あまり意味はないわ」

なんてことなさそうに答えを返しているが、内心結構答えてそうだなー。

「まあいいわ、リン。・・・私はその男に助けてもらったわ、基本的に、その男を信用するわよ？」

「ええ、それでいいわ、それと、その男ではなく、青景琳という名前があるのよ」

「ふうーん、なら、アオカゲと呼ばせてもらおうわよ、いいわね？」

「了解」

今更気づいたのだが、俺の発言少ないな。悲しくなりそうだ。

「大体把握したわね？確認するわ」

おっと、哀愁にくれるあまり話を聞き逃していたようだ。

「ランサー、おそらくキャスターはアーチャーを前面に配置するはずよ、その対処、青景君もね」

「あいよ、嬢ちゃん、そっちも異論はねえよな？」

「OK、OK理解してる」

「士郎と私は、キャスターと葛木と相手をするわ」

「おいおい、キャスターと嬢ちゃんが殺り合うのか？やめておけよ」

ランサーが待ったをかけるが遠坂は首を横に振り

「キャスターに勝てるだけの戦略はあるわ、バーサーカーはセイバーの警戒に当たってもらいたいだよ」

「……まあ、嬢ちゃんがそう言うならいいぜ、俺は任された仕事をやるだけだからな」

「さあ、行くわよ」

すっと立ち上がり、颯爽と出ていく遠坂、後のメンツは

「だりゝ」

俺→

「バーサーカー？何処ゝ？」

イリヤスフィール→

「んあ？もう行くのかよ」

セタンタ→

「ちょっと待っててな、後もうちょいで料理できるから」

士郎→

さて、こんな余裕で大丈夫かな。

第11話 裏切りは此処に（後書き）

終盤、ツマラナクしてしまった。

申し訳ないです。

こんな作品でいいのなら、感想（甘口で！ココ大事！）評価（これも甘口）でよろしくお願いします。

第12話 裏切りの意味

教会に逝く坂道を悠々と歩くは、ランサーと俺。

後ろには、バーサーカーを前にして、肩にイリヤスフィール、そのまた後ろに士郎、遠坂と続いている。

士郎は武装済みで、遠坂は宝石を数えては「ああ……お金が………」
と言っていた、金喰い魔術は大変だね。

何度も何度も投影をしては「これも違う………」と言っては破棄を繰り返す士郎、納得いったものが出来たらしく武装を済ませている。

因みに俺は、異世界時代に着ていたランサーの戦装束を黒で染め上げて、胸、腹、太ももなどに、補強を加えて、鎧の色も蒼色に変えて、似ても似つかない様なモノに仕上げた。

作るのに、半日かかったのは内緒だ。……え？そんな時間ないだろ。いつ作っただ？って？知ってるか？走りながら裁縫って出来るんだぜ。

まあ、そんな馬鹿な話は置いておいて。

無言で教会へ行くこの集団は、見つかったらまず間違いなく警察通報だろう。絶対だ。

「着いたみてえだな」

ポツリとランサーが言葉を洩らした、頭を上げると赤い鍊鉄者^{アーチャー}がいた。かつこ良くいつてみた。

「ふむ……私と切れた瞬間に次の英霊と契約か、節操がないな、君は」
サーヴァント

頭の血管が破裂しそうになった。自分から尻尾振って落ちたくせにそのいいグセとは……皮肉のスペシャリストだな。

「嬢ちゃん、早く行きな、ここはオレとコイツに任せな」

ずっと穂先を向けられた俺は、ランサーを見て頷き返して、

「遠坂、早く行け！」

「っ！分かったわ」

タタタ、とアーチャーの脇を駆けていく、バーサーカーも続き、士郎もそれに続いた。

アーチャーは微動だにしない、それは俺達に牽制を掛けられていると取れるかも知れないけど、違うはずだ。

「さあ、殺ろうぜ、二体一だが、文句はねえよな？アーチャー」

「ああ、文句は言うまい、青景琳、ランサー、掛かってこい、この身は剣で出来ている、早々と取らせはしないぞ？」

「ハッ！言っなあ、弓兵い！」

身を低くして獣のように飛び出したランサー、数瞬の間を置いて自分も駆け出す。

此処に、剣戟の嵐が現れた。

「チツ！固えやつだなあ！」

ランサーが舌打ちをする。

「フツ……クー・フリーンに攻めづらいと評されるのは悪くない、なっ！」

ガンガンと遠心力と合わせて攻撃を繰り返す俺も、一瞬で一撃を加えて離脱するランサーも、奴の守りを崩すことは出来なかった。

「まったく！いい加減滅つされろ！天に召せ！一片の塵すら残すな！」

戦闘なので気性が荒くなってモータ。

「せーのっ！」

ガガガギャン！つと金属と金属がぶつかった音には相応しくない音がハルバードと夫婦剣の間で奏でられた。

後ろに飛んで間合いを取る、ランサーも既に後ろに飛んでいた。

「さて、そろそろ——死ね」

ランサーが静かに宣告して後ろに飛ぶ、俺が思いつく限り、これだけの距離を取る技は一つ。

アーチャーもすぐに気付き、言葉を紡いだ。

「——I am the bone of my sword
「.

「くたばりな——」

やがて、詠唱の終わったアーチャーは、片腕を突き出し、叫んだ。

「“熾天覆う七つの円環”——！」
アイアス

「突き穿つ死翔の槍ウ——！」
ゲイ
ボルク

衝突を起こした宝具と宝具は大量の魔力をまき散らした。

決着は数秒で終わったかも知れないし、数分激突してたかも知れない、定かではないが、これだけは言える。

ゲイボルクは強く、ローアイアスもまた、硬^{つよ}かった。

「ふむ……キャスターの方は苦戦しているらしい、監視がない」

ポツリと漏らすと、ズタボロになった左腕は垂らしたまま、右手を

上に上げて《降参のポーズ》をしていた。

「ちっ……結局そういう腹かよ」

顔を顰めて非難するが攻撃するつもりはないようだった。

俺も、正直これでいいのだ。と思ってたので特に行動を起こさなかった。

「いやでも許さん、錬鉄者の斬撃」
ハルバード・カスタム

「当たると思ってたかね？」

「当たるまで当てる！錬鉄者の炎撃、水撃、雷撃！」
ハルバード・カスタム

ゴゴゴチュドーンバシャーンとまあ擬音ばかりでした本当に有難うございましたっか。

「巫山戯だな」

「まあ否定はしない」

ランサーが問いかけて俺が応える。

「さて、そろそろいい頃合だな」

怪我の治療を終えたアーチャーが教会へ向かおうとして背を向けながら呟いた。

俺としても予測できている事を防ごうと思ってしまうものなのでついていこうとルーカーを取り出して武装し始める。

いきなり攻撃が始まるのが予測されるので取り扱いが楽なルーカ

ーのほうがいいと判断してのことだ。

ランサーにも声をかけるが「マスターからはこれだけしか許されてねえんだ、悪いな」とのことです。その場で待機してもらうことにした。

「アーチャー、俺に背中向けるなよ、危ないだろ？」

「ああ確かに、済まなかったな、……………貴様が先にいけ」

いがみ合いながら教会へ向かう俺達、案外仲がいいのかなと思った人は注意だ、刃物を突きつけて誘導してるのだから一歩間違えたら『事故に見せかけて』脇腹にブスリがあり得る。注意して欲しい。

教会の裏口にはいり、キャスターと戦闘をしている遠坂、葛木宗一郎と戦っている士郎の姿が見える。

「あつ……………」

士郎が拳を受け吹き飛ばされて、最後の一手を打とうとしていた遠坂を捕まえ、殴り飛ばした。ありや痛そうだな……………。

と思っているとアーチャーが投影を開始しようとしていた。

「ちょっと待て……………」

静止を掛けると士郎と遠坂に止めを刺そうと歩み寄っている葛木に向かつて上から襲撃をかけた。

「宗一郎様！」

キャスターが気付いたのか魔力弾を放とうとするがアーチャーの投影した剣によって腕を貫かれ、牽制された。ナイス！アーチャー。

「葛木宗一郎だな？悪いが人質になってもらうぜ！」

ルーカーを仕舞い、拳で挑む

左のストレートを叩き込み、よろめいた所を右のアップー、というとしたのだが。

「ふんっ」

躲されてカウンター喰らいかけました、戦闘能力高い一般人だと思つてたから油断してた。

「なら……こうだっつーの！喰らいやがれ！」

近づいてCCCまがいのことを仕掛けるが躲された。拳を振るったらいなされた。

だが、

「キャスターがどうなってもいいのか？」

「っ！？」

一瞬だけ、目がキャスターの方向に行った、キャスターの腕には剣が一本突き刺さっていた。

目に見えぬ動揺が広がり一瞬だけ動きが止まった、それを予想して

いた俺は、やつの体の中心に拳を叩き込んだ。
気絶させるだけの一撃を加えた俺は葛木を引きずってキャストの
前に出した。

「さて、こいつを殺されたくなければ……………」

奴の考え通りにさせまいと俺が必死に頑張ってきたんだ、外道な手
段だろうと構わない。

俺は、あいつを守るために、やってきたのだから。

第12話 裏切りの意味（後書き）

ええーと、まあ、こんな駄作でよろしければお読み下さい。

第13話 魔女の取引は蜜の味（前書き）

12話の葛木先生の驚きは、心の奥深くにあった感情の表れと思つて下さい、キャスターは殆ど拷問と同等のダメージを受けてましたから急に見せられて驚愕した。というわけです。

因みに、キャスターは足にもアーチャーの剣が追加で刺さりました。

第13話 魔女の取引は蜜の味

「さて、キャスター、交渉と行こうか」

「な・・・にを言ってるのかしら？」

致命傷とは言えないが大きなダメージを負っているキャスターに対して、琳が要求するのは一つだけ。

「手前の宝具、破戒すべき全ての符をランサールールブレイカーに使え、それだけだ、そうしたら、葛木宗一郎は助かるだろう、断るのなら・・・」

よいしょと葛木を持ち上げてルーカーを突きつけて脅す彼は、キャスターから見ると悪魔のように思えるだろう。

“魔女”と呼ばれた彼女は、とうとう屈した、最愛の人の前に。

「分かったわ・・・ランサーは何処？それ・・・と、ルールブレイカーを使ったら宗一郎様を助けてくれるのね？」

「ああ、勿論だ、約束しよう」

キャスターもここから逃げ切れるとは思うまい、アーチャーは剣をキャスターに突きつけて、護るべき主人の命も琳の手に握られている。

士郎と遠坂は効力が弱まったセイバーの方へ救出しに行き、バーサーカーは万が一に備えて見張りをしている。

完璧とは言えないが、中々に強力な布陣だろう。

「さて、交渉成立だ、ランサーを呼ぼう……土郎！悪いが表で待つてるランサーを呼んできてくれないか？」

「ん……分かった！呼んでくる」

一瞬だけ土郎はセイバーの方を向き、躊躇したが、承諾を返し、ランサーを呼びに、出口に向かおうとした。

轟音が響き渡り、出口から煙が上がり、その中からランサーが飛び出してきた。

後を追うように飛んでくる射出宝具を撃ち落としながら琳の近くに降り立った。

「アーチャー！迎撃してくれ！恐らくギルガメッシュだ！ランサー、こっちに来てくれ。バーサーカー！土郎と遠坂の保護！イリヤスフィールも一緒にな！」

一本だけアーチャーの方に飛んでいったが避けたように見えた。

「了解した、気に食わないが今はそうしよう」

「■■■■■■——！！」

「おう、いい指示出すじゃねえか」

ランサーはすぐに此方に来てくれた。

「キャスター！急げ！早く宝具を出せ！」

「分かったわ」

のろのろとした動きでルールブレイカーを取り出し、ランサーに突き立てようとする。

「うおっ！テメエ、何するつもりだ！」

「落ち着いてくれ、ランサー、考えがある、これは契約破りだいいな？」

事情を理解したらしいランサーに突き立てられたルールブレイカーはキャスターの言葉で効果を発揮した。

「^{ルール}破戒すべき——」

アーチャーが手すり上にあがり教会の方から発射されている宝具に対して迎え撃ってるが全弾必中とはいかず、周辺にも被害が出始めている。

「畜生っ！」

葛木を投げ出して流れ宝具を打ち返した琳、その間にも時は進み。

「^{ブレイカー}全ての符」

弱々しい言葉で紡がれたが、宝具は効果を発揮し、ランサーにかか

つていた契約を無効化した、間髪入れずに流れ宝具を迎え撃ちながら、琳は叫んだ。

「———告げる！」

汝の身は我の下に、我が命運は汝の槍に！ 聖杯のよるべに従い、この意、この理に従うのなら———」

「———我に従え！ ならばこの命運、汝が槍に預けよう……！」

「いいだろう！ テメエに俺の槍、預けてやるっ……！」

そして、右手に灼熱感が表れ。

契約が完了した。キャスターの横に葛木横たえてやり、稀代の魔女を労った。

「サンキューな、キャスター、テメエは最低だったが、同時に最高の魔女だぜ」

「な……にを」

困惑しているが、この際無視だ。意図はすぐわかる。

（アーチャーはギルガメッシュに手一杯、バーサーカーも流れ弾の対処に手一杯、動けるのは俺と、ランサーか。）

手早く思考をまとめると、動き出した。

「なあ、キャスター。交渉内容には“お前を殺さない”という事は含まれてないよな」

みるみるうちに顔が真っ青になるキャスター、血の流出による影響もあるだろうが、葛木と一緒に歩めない未来を想像するだけで恐怖がやってきたのだろう。

「けどな、もう1つだけ俺に協力しろ、“セイバーを解放”することが条件だ、令呪はいくつ残ってる？残っている令呪全てでセイバーを解放させる、そしたらいい筈だ。」

「くっ……令呪を持って命ず、今までの命令を取り消す”“令呪を持って命ず、戒めを破れ”」

そう言うと、キャスターはセイバーを縛り付けている拘束を解くと、また横になった、そろそろ命に関わってくるだろう。

セイバーが解放され、ふらふらの足取りだが、しっかりと立っている、大丈夫そうだ。

「さて、これで契約は履行した、なら、報酬だ。……Th
e l i f e w a s h e a l e d w i t h t h e m a n
i t o u , t h e w a y t o h e r e w a s g o i n
g t o b e h e a l e d t o t h e e x t e n t t
h a t i t e n d u r e d , a n d i t o f t e n d
i d . (魔を持って命を癒す、ここまでの道のりを耐えた分だけ癒されよう、よくやった。)」

「フフフ……私を回復させて何の益があるのかしら？」

「特に無いけど、今までの俺の方針は言峰綺礼からランサーを解放させて、守るべきものを守る、が方針だったからな」

偽善だよなー、と口にする琳、こんな事で使っている時間はないわ
けで、段々と激化してるように見える戦闘の最中。

ランサーが空気だったが、とうとう動き出す時がきた。
行こうではないか。

（さて、ギルガメッシュだけならいいが、言峰の野郎が動き出すな
ら厄介だ。）

アーチャーに加勢しようとして気付いた、真紅の外套で気付きづら
かったが脇腹に、赤いシミが残っていることに。

「ランサーア！令呪を持って命ず！」

一瞬だけ鈍ったアーチャーに剣が殺到しようとする。

「アーチャーを助けるっ！そして退け！」

右手に灼熱感が現れ、急速に冷えていく感覚を味わいながら、願っ
た。

間にあつように。と。

第13話 魔女の取引は蜜の味（後書き）

最初のランサーが逃げてきた時に油断して食らってしまったんですね。
それを顔に出すこと無く迎撃したアーチャーに拍手っ！

第14話 さあ、生存競争だ。

ランサーに早速命令を下した俺は先を見据えてギルガメッシュと対峙することにした。

アーチャーは本当に間一髪でランサーに槍で足払いをかけられ胸元に迫っていた宝具の群れをマトリックスで避けることとなった。よくやった。

「こんの野郎おおお！」

「ふん、雑種め、その珍妙な宝具は我^{オレ}の宝物庫に入れ、疾く自害しろっ！」

本気で言ってるのならそれはそれで一種の才能と思えることをつらつらと並べ立てたギルガメッシュが放った宝具弾を弾いて躲して距離を詰めながらその瞬間をまった。

セイバーは遠坂と契約し十全の力を取り戻した。此方の援護をしてくれるはず、その時までの辛抱・・・のハズ。

バーサーカーもそれによって守護の必要性はなくな・・・らないな。そのまま守護だな。

ランサーもランサーですぐに来てくれるはず。そしたら3対1で優勢になり、勢いのまま殲滅できれば万々歳だな。

「鍊鉄者の風水雷斬撃（ハルバード・カスタム・セカンドエディション）！」

即席で宝石を叩きつけまくって起こした宝具（笑）の一撃は恙無く発動され、風を巻き起こし水が押し寄せ雷が殺到し割って入るような斬撃に乗り結構いい感じの一撃がギルガメッシュを襲った。

「フンッ、それしきの攻撃でどうにかなると思ったかあ！」

余裕綽々で宝具庫から盾を取り出し攻撃を受け流したギルガメッシュ、俺としては発動されただけ儲けもんで時間稼ぎできれば最上だった。その2つとも稼げたとなると思わず笑みが零れた。

「何を笑っている雑種ウ！」

「いやなに、案外あんたの相手も楽じゃないなと思って、な！」
「ホオ、ならばこの数も受け止めれるか？」

パチンと指をならしたギルガメッシュの後ろに飛び出してくる宝具群、その数30近く。

流石に全弾命中とは行かないだろうがそれなりの密度になる事を予想して冷や汗が流れた。

「へっ、余裕だそんなもん、オレ無双してやんよ！」

「ならば10追加だ」

この時ほど自分のハツタリを恨めしく思ったことはない。

ゆっくりと槍を持ち上げて片手で装備し、余った手でハルバードを持ち上げて変則二槍斧流へんそくにそうぷりゅう↑今命名

「散り様で楽しませろよ！」

「テメエはここで死ね！」

「この量を受け止めてからその戯言を言うがいい！」

「おk、テメエを殺した後に堂々叫んでやる！」

「おのれ雑種が齒向かうか！」

「お前は王様だが俺は市民じゃねえんだよ！」

ちっ、思ったより命中精度いいなこいつ。

体に命中がかなりの量あるから捌ききれない。

撤退も視野に入れていたのだが下がったら後ろに被害が出るので無理。

あれ？結構マズイ状況な気がする。

「そのまま死ね！」

マズイ、ハルバードが飛んじまった。

ルーカーだけじゃ防ぎ切れない。

次々に命中していく宝具で体力が削られていく感覚にヒヤツとする。

体の中心や頭にあたる物を選別して落としていくが発射の量が半端じゃない。

「ランサー！ヘルプミー！」

「……………」

……………

……………

……………

心から叫ぶが反応なし。

最早此れまでと覚悟した時に、戦乙女^{わたしのてんし}がやってきてくれた。……………

いや、大飯食らいだけどね？

ともあれ目に見える助けによって俺の希望ゲージもMAXへ近づいている、FEVERしちゃいますはい。

「退いて下さい！ハアアアア！」

気合一閃とばかりに声をあげて下段からの切り上げで振りかかる宝具弾を弾き返すセイバー………いいなあ、してみたいよあんなこと。

「まだだ！まだ死なんぞ！」

「くっ！雑種ウ！逃げる気かぁ！」

命大事にが俺の第一方針ですので、ご了承下さい。

セイバーとギルガメッシュがドンパチしている間にランサーも到着した、どうやら霊体化させてキヤスターに協力を脅……ゲフン！要請したところ快く引き受けてくれたそうでアーチャーの面倒を見てもらっているとのことだ。

「ランサー、あれ、掻い潜れる？因みに俺は無理」

「やれつつたらやるぜ？腕の一本二本は覚悟しねえといけねえけどな」

「そ、わかった。………なら基本的にはセイバーの援護をして前線を押上げていく、少しでも間が見えたのなら突撃だ、いいな？」

「了解、赤枝の騎士に恥じぬようやってやるぜ」

それは心強い、ここで俺は一言いうことにした。

「よろしい、ならば戦争だっ！」

「OK、やってやるぜ！」

こうして俺達はVSギルガメッシュ戦線に参戦した。

「ぶるうううあああー！」

「だああああらっしゃあああああー！」

「ハアアアアアアア！」

「ぐっ………雑種があああ！」

縦に三人並んで交代交代に弾きながら進む俺達を阻む宝具も全て蹴散らしていく、ギルガメッシュの顔にも万が一の凶がちらほら想像できているのだろう、焦りが見える。

そうすると精度も悪くなっていき余計俺達の進軍速度を上げる要因になる、アイツのことだから撤退の文字はあまりないのだろう。

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄！」

渾身の力を振り絞って両手にもった得物を振るいまくる、振るって振るって振るって振るいまくった。

王の財宝の中にある宝具がどれだけあるのかは分からない、あいつも把握してないだろう。

幾千幾万も有るはずだ。きつと。

それが尽きるのが最初か、俺達が屍になるのが最初か、奴のもとにたどり着き切り捨てるのが最初か。

神のみぞ知るってやつだきつと。

その時、ピタリと雨がやんだ。

ギルガメッシュはあらぬ方向を向いたかと思うとポツリと呟いた。
いきなりの行動に俺達も面食らって動くに動けなかった。

「……………なに？退けたと？……………フンッ、良いだろう

ふん、命拾いしたな雑種。

セイバー、次こそは答えてもらうぞ?」

「何を戯れ言を、次に会ったときは斬る、それだけです」

「命拾いはお前だつつの、じゃあなー! 英雄王サマ!」

思わず俺も口を挟んでしまった、自重自重。

ギルガメッシュは最後に此方をギツ、と睨みつけるとすたすたと歩き去って行った。

「……………」

「……………」

「……………」

沈黙が続いたがそれを破ったのはまさかのキャスターの声だった。

「いつまでそこに固まっているのかしら?」

「うん? そんなことはないよ、よく生き残ったなー、と思っていただけです」

「…………… フツ、可笑しな人ね、貴方は」

実際俺一人で凌げたのは奇跡に近いと思われる。

英霊の中では弱い部類だろうし、やつのあの技は反則すぎて相手する気にも成れなかった。

結構な快拳を成し遂げたと自分の中で自分の祝勝会を開いてるぐらいですはい。

「まあいいわ。…………… 私はどうなるのかしら?」

「ランサーが言ったでしょ？………ってそんな震えんなよ」

「ふ、震えてないわよっ！」

「おいランサー、どんだけの脅迫………じゃねえや、要請の仕方をしたんだよ………っていねえし」

「本題に戻すわよっ、どうなるのかしら」

「いや、協力してもらえるのなら葛木も助けるしあんたにも手を出さないよ、条件としてはアーチャーをしつかり管理すること、おk？」

「………分かったわ、でもいいのかしら？私は……裏切りの魔女」と言われてるのよ？」

「裏切ったら裏切っただから、もういい？疲れた。」

「ええ………分かったわ」

キャスターはふよふよと浮きながら葛木の元に寄っていった、説明する気だろう。

さて、と。

此方も状況を整理しよう。

一、ギルガメッシュのマスターは十中八九言峰綺礼。

一、こちらの軍勢はセイバーを筆頭にアーチャーランサーの三騎士をならんでバーサーカーとキャスターと俺。あちらさんは一人。戦力差は歴然。

一、相手の本拠地が分からない、キャスターを使って搜索させる必要あり。

一、士郎の能力を開花させてギルガメッシュと対抗させれるようにする。

一、アーチャーの怪我がどの程度か見る。

一、俺の能力が何処まで通用するか見る。

……コングらいか？

さあて、チャキチャキ始めるとしましょうか。

第14話 さあ、生存競争だ。 (後書き)

短めです。

すいません、クオリティ低くて。

評価、感想お待ちしております。

第 話 無限の調理（前書き）

駄作を見ていただきありがとうございます。

これからも頑張って投稿させて頂きます。

評価、感想、よろしくお願い致します。

第 話 無限の調理

「あつ！てめこの野郎俺の飯盗るんじゃないよ！」

「フツ、馬鹿め、戦は油断したほうが負けるのだよ……ああ！セイバー……」

「油断大敵、でしょう？」

「ランサー、あそこに釣り道具あるぞ？」

「マジかよっ！……って何処にもねーぞ、ああ！また取りやがったな！琳！」

「何のことだか？セイバー、あれなんだ？」

「騙されませんよ、私は黙れません」

「士郎の手料理がたくさん乗った（ガタンッ、ドドドド）……計画通り」

ニヤリと黒い笑みを浮かべた俺は悠然と取り分けられている肉を掴んで口の中に入れた。

「モキュモキュモキュ……上手いな」

そこらの料亭に出してもいいぐらいに美味しい、士郎の食べ物争奪戦

が起きるのも無理は無いな。

「ランサー、ここは一時協定と行こ」ドドドドド、スパーン（うじや……………スベルバツ！」

「琳！私を騙しましたね！！今日という今日は貴方に天罰を下します、士郎の食事を独り占めしようという邪悪な欲望、ここで叩き斬って上げましょう！」

後ろから現れたセイバーに引倒され不可視の剣を突き付けられた俺は恐る恐ると両手を上げて言うしか無かった

「落ち着け、俺の飯喰っていいから」

「その言葉に（モグモグ）二言は（パクパク）ないですね！」

「既に喰ってんじゃねえかい！」

あまりの動きの速さに俺もついて行けなかったぜ……………恐るべし、最優の英霊、セイバー！

そんな俺の心の声を察したのかセイバーは此方を向くと、

「む、ご飯は上げませんよ」

「そこまで意地汚くは……………ない……………はずだ」

あれ？おかしいな、人に嘘を付いてまで飯を食おうとする俺が意地汚いと言うに相応しいんじゃないか？

等々、馬鹿な事をやらかしている時にことは起きた。

「みんな、よく聞いて……ってなんだこの混沌^{カオス}」

遠坂が居間に入ってきた、後ろにはキャスターとアーチャーが同伴している。

キャスターは居間に入ると直ぐに隅に寄っていた葛木の元へ行き「今日のご飯は如何でしたか？士郎に教えてもらったですよ」「…美味かった」など会話を交わしていた。

アーチャーは仏頂面のままキツチンで調理をこなしている士郎を見て、フンと大きく鼻を鳴らした。

敏感に察した士郎が後ろを振り向くとアーチャーと目が合った。

「なんだ、なんか文句あるのかよ」

「なに、あまりにも手際が悪いのでな、つついやってしまったただけだが？」

「なんだと……？良いだろう、やってやろうじゃないか。

——料理対決だ！」

ババンと効果音が付きそうなぐらいフライパンを掲げそう叫んだ士郎に賛成する声数多。

俺も当たり前のごとく賛成票を入れている。

「いいだろう、貴様が挑むのは無限の剣^{無尽の剣}。剣戟^{けんぎ}の極地^{せいち}！ 恐れずしてかかってこい——！」

「俺は——置き去りにしてきた物の為^{ため}にも、自分を曲げる事なん

て、出来ない！」

互いに互いが名言の無駄遣いをした後、バツと身を翻して調理に没頭し始める士郎。

ヴウアサア！と外套を翻すようにして体を外套で隠し、外套が元の位置に戻り、体が見えるようになったときには奴には似合うのかと思えるようなひまわりの刺繍が入れたエプロンをつけ、白色のバンダナを付けて調理を始めた。

「くくくくくく」

「笑うな喧しい！」

遠坂を筆頭にキャスター、ランサー、セイバー、俺、葛木も心なしか笑っているように見える。

あの能面のような表情を崩すとは……………アーチャー恐るべし。

“ 20分後 ”

グーギョルギョルグーギョルギョルと腹の中の合唱団が喧しい音楽を奏で始めた時に料理は出来上がった。

士郎の手料理は少ししか食べてなかったからな。腹がへるんです。セイバーは一次会（？）の食事を全部食べて尚楽しそうにフォークとナイフを両手にもってワクテカしてた。こんな感じ。+（0°・

・） + ワクテカ +

「お待たせ」

「……………」

コトンと置かれた料理はよくこんな食材があったなというほど大量だった。

セイバー対策なのだろうか別ざらにもてんこ盛りだった。

そして意識が飛んだ。

「ごちそうさまでした」

セイバー一人が静かに言った時、琳とランサーは沈没していた。キャスターも乗り気になったのか突然キッチンへ行き、料理を作ってきた。

セイバーが独占する中、お預けを食らっていた琳とランサーは一にもなくかぶりついた。外見度外視で。

殺人的な匂いの前にアーチャーと士郎は殺られ、遠坂は退室し、バースーカーは唸り、イリヤは気絶し、葛木は何食わぬ顔で殺人級の料理を食し、琳とランサーは鋼鉄の胃袋なんて持ち合わせているわけ無く。

沈没した。

《第一回 士郎VSアーチャーの料理対決》はセイバーしか審査員

は居なく、「どちらも美味しかったです」とのコメントで幕を下ろした。

第 話 無限の調理（後書き）

アーチャーさんはセイバー✓と凜✓を掛けて足して4で割ったぐらいである。

初めて間話作ったんでドキドキしてます。

ワクテカです。

評価感想、お待ちしております。

それでは！

第15話 聖杯戦争

「さて、これからの事だが」

現在、衛宮邸で俺達は会議を行っていた。

ぐると見渡すと士郎や遠坂、頼もしい顔をしたセイバーやランサー、仏頂面ながら参加のアーチャー、イチャイチャカップルのキャスター&葛木がこっちを見ている。

「敵の戦力としては確認している限りでは一人、そいつの名前は『英雄王』ギルガメッシュ」

誰もが黙り、俺の言葉を待っていた。

「やつの宝具としては“王の財宝”ゲートオブバビロン大量の宝具を召喚、射出してくる、対処の仕方としては……………士郎、アーチャー、お前らだ」

「はっ？」

「……………」

いきなり指名をくらった士郎は呆然と、予想していたのか無言のままのアーチャー。

即戦力となり得るのはアーチャーだが、アーチャーがくらった宝具が拙かった、自然回復以外の回復を阻害する宝具だったのだ、回復を待つことは即ち、真の黒幕である（俺の推測だが）言峰綺礼の聖杯誕生を許すことになる。それをさせる訳にはいかない。

だからこそその二人、万全ではないアーチャーを補い、補助させるための衛宮士郎、この緊急時では殺そうともしないだろうし、俺がアーチャーを説得（という名の脅迫）をしたから安全だと思われる。

「詳しくは後で、それで、ギルガメッシュの王の財宝を防ぐ、その際にバーサーカーとセイバー、それにランサーが討ちに入る、ここまではOK?」

「ちょっと待った、青景くん、士郎の能力はまだ完全じゃない、どうするつもり?」

「いやそれについては考えてあるよ遠坂嬢、それもまた後々」

「琳、相手はギルガメッシュだけなのですか?」

「良い質問ですね、セイバーさん」

「……………」

「……………」

池 彰気取ってるわけじゃない、本当にだ、だからそんな顔をするな士郎と遠坂！
気を取り直して再度発言を続ける。

「コホンッ、俺の推測としてはだな、ギルガメッシュのバックには言峰綺礼が居ると思う、奴は死んでない筈だ。……………だろ?ランサー」

「まあな、あいつはオレに令呪で“遠坂凜を全力で守れ”と命令し

た、だからオレはあんたと接触した、奴が死んでるのなら、キャスターに会う前にはくたばってるだろうよ」

「とまあ、こんな感じだ、言峰綺礼の戦闘力としては遠坂三人分くらいだ、バーサーカーを当たらせれば十分すぎるほどだ。そんなわけで、解散だ」

「ちょっと待ってください、琳」

セイバーが待ったを掛けてきた、真剣そうだったので話を聞いてみることにした

「何処に行くんですか？行き先、告げられてませんよ」

「あ」

「…そうだったわね」

「…ああ」

全員がなぜそんなことを忘れてたのかといった表情で頷いている、セイバーのドヤ顔がなんかイラつく。

それはさておき。

「一応、柳洞寺に行くつもりだ」

「柳洞寺、ですか」

「ああ、あそこの地下には聖杯をおろすに値する場所があるんだ、奴はそこにいるに違いない、だがな、聖杯であるイリヤはこっちに居る、だから、間藤桜を奴は聖杯として確保してるはずだ」

「琳、今の、本当か」

「本当だ、悲しいかも知れねえけど、大丈夫だ、奴が聖杯をおろすまで時間はあるはずだ、絶対に、助ける」

「……………ああ、ありがとう、琳」

こんな状況で後輩が連れ去られているのに俺に礼を言うとは……………本当にお人好しだな。

「セイバー。悪いけど士郎を呼んできてくれ」

「分かりました」

セイバーが外に出て、一人になるのを確認した俺はゆっくりと此方に近づいている奴に声を掛けた。

「アーチャー、話があるんだろ？出てこいよ」

「……………バレていたか、衛宮士郎のことだ、貴様がオレを呼んだんだろう」

「ああ、そうだ、士郎のことだが……
お前の記憶を士郎に転写しろ、お前が持ちうる記憶全てだ、それで奴は分かるだろう」

「……………いいのか。“オレ”の記憶は“奴”には毒となるが」

「構わない、それが最善の策だ、今の俺達には情報がない、万が一に万が一を重ねても不測の事態は起こるんだ、戦力は少しでも多く、手札は一枚でも多く、だろ？」

「……………承知した……………青景…琳」

「なんだ？」

「別に、……………」

「……………あいつが壊れてしまっても構わんのだろう？」

「大いに構うぜ、程々にな」

「……………」

無言なのが気になったがまあいい、次は遠坂だな。

「衛宮、士郎」

「なんだ、アーチャー、お前にかまってる時間はないんだ」

すぐに反応するが此方に顔を向けようせず投影を続けていた、あからさまなその反応に思わず笑いが溢れる

セイバーは遠くからコイツを見張ってるが青景に呼ばれてついて行った、此れで1対1、か。

「キサマは誰かの役に立ちたいと願っていたんだよな」

「ああ、それがどうしたんだ、要件はそれだけか？なら、放っておいてくれ」

「役に立ちたい……………か
ついて来い、そこでお前は絶望する」

「なんだと？…………おい、アーチャー！」

オレは土蔵に入り、奴を待った、躊躇していたのか、少し遅れてやって来た。

睨みつけるようにオレを見ているコイツを見ていると殺したくなる。

「来い、そして——見る！」

体は剣で出来ている。

I am bone of my sword

Steel is my body, and fire is my
blood

血潮は鉄で、心は硝子。

I have created over a thousand
blades.

幾たびの戦場を越えて不敗。

Unknown to Death.

ただ一度の敗走もなく、

Not known to Life.

ただ一度の理解もされない。

Have withstood pain to create
many weapons.

彼の者は常に独り 剣の丘で勝利に酔う。

Yet, those hands will never hold
anything.

故に、生涯に意味はなく。

So as I pray, unlimited blade

works .

その体は、きつと剣でできていた。」

オレが言い終わった時に広がる無限の荒野、衛宮士郎は複雑な表情をしていた。

「納得だ、アーチャー。」

お前の正体が漸く分かった。

“英霊エミヤ”それがお前の正体だ」

「そうだ、お前の未来の姿、それがオレだ。

多数を救うために少数を切り捨てる、そのやり方の体現者、抑止
カウンターガーディアン
の守護者にまで契約し救おうとした、お前の言う“救う”はこ
うことだ！

全員を救おうなんておこがましい話だ！

近くに居る後輩一人守れないお前は——！！

理想を抱いて溺死しろ——！！」

「違う！俺が言ってるのは、」

「何が違うというのだ！認める！キサマが抱いた理想は！夢は！究
極的には殺戮者に成るということだ！

全員を救う？……そんなことはできない！」

ぎゃりんと音を鳴らして鏢競り合いなる、オレが斬りかかる時には
奴もまた斬りかかる準備をしていた。

次々に放たれる斬撃を防いでいく、その目は、諦めていなかった。

「できないと決めつけるからそうなるんだ！

俺は絶対に諦めない！

お前が諦めたとしても！俺は諦めない！
その先に行く！」

「そんな借り物の理想で何ができる！」

「借り物の理想でも、後悔はしない！

絶望なんてしない！

後悔をしたお前を——俺が叩き潰す！」

「笑わせるな！そんな力じゃ！誰も救えない！
なら、いつそのこと死ね！」

言葉の応酬は剣戟にも繋がり、加速化していく剣を振るい、思った。

（いつの頃からか、オレは世界に絶望したのだろう）と。

第15話 聖杯戦争（後書き）

なんだか閉まらない終わり方でしたけど今後とも宜しくです、

第16話 剣戟の最後（前書き）

あー、駄目です。

僕には文才が足りない、構成の力が足りない！

第16話 剣戟の最後

両手に持つ夫婦剣が重く感じる。

何度、この夫婦剣がガラスのように割れていったのだろうか。

その度に、俺の持つ夫婦剣の記憶が蘇り、アーチャーの剣筋に似せていく。

その技術は、最早、オリジナル本物に近づきつつあった。

アーチャーが一生を賭けて磨き続けている技術を、俺は一足飛びに近づいていく。

一つ剣を合わせる毎にガタガタだった剣筋が纏まっていくのを感じる。

「どうした！キサマの力はそんなものなのか！」

「つるせえ！お前だけには負けられない！」

他の奴に負けるのはいい！オマエだけどな、
自分だけには負けられないんだ！」

一瞬だけ微かに目を見開いて驚いたアーチャー。

激しくなる剣の舞踏会は終局へと加速していった。

「ふうーん。無限の剣製に入って話し込んだか」

アンリミテッドブレイドワークス

なかなか思い切ったことをやるなー、アーチャー。

あの中じゃ誰も干渉できないから殺してしまっても大丈夫と踏んだか、話し合いには持って来いとは思っけだな。

まあいいや。俺にもやるべきことがある。

「さて、ランサー。……いや、セタンタ。思い出せたか？」

「ああ、あの夢のような出来事の中にいたのは確かにテメエだった、琳」

土蔵の外にはセタンタがいた、肩に担いでいるのはかつては俺も担い手になっていたゲイボルクだった。

こちらにも応じるとばかりにルーカーを手を持った。

「だけどな、今のテメエは余りにも不拔けてんじゃねえのか？」

「……………そうかもな、でもさ。オマエをしばくには十分な不拔けっぷりだと思っぜエ！」

「ハッ、言っただなあ！」

両者同時に構え、同時に地面を蹴った。

初手は様子見とばかりに下段に突きを放ってくるセタンタ、馬鹿め、甘くみおったな！

見越していた俺は上に飛んで突きを避けると、唐竹割りとばかりに槍を下に向けてセタンタの頭蓋に振り下ろした。

だが、セタンタも流石の反応力と勘で横っ飛びし、避けられた。猫みてえだな。“狗”という称号あるのに。

「……………（ブチッ）」

あ、なんか切れた音がした。

「テメエエ！なんか考えたなあ！」

「考えちゃマズイのかよおい！」

突きが弾幕化してるとか人じゃねえよあんちゃん！
目が赤く光るとかナルガ　ルガじゃねえか！

あーやめろー。そんな無双コンボしないでえ！

「ハアハア……ハア……」

「フッ……もう終わりか」

「だ、まれ……」

剣を地面に突き刺して杖替わりにして辛うじて立ってる状態を作っている。

倒れたら負けな気がしたんだ。

「あ……」

アーチャーが維持していた無限の剣製が溶けていった。

俺の魔力も限界に近づいていた。剣の投影を解除した。

「オレもまだまだだな、キサマ一人殺せぬとは。……この戦いが終わり、この次に会った時はキサマの最後だな」

驚いた、この次にまたコイツに会う確率は零に近い筈なのに。

あれだけ俺を殺そうとしていたのに。

あっさり自分殺しをやめてしまうなんて。

土蔵の外からは音が聞こえた。

なにが起きているのかはわからなかったが、敵が襲撃してきたのかもしれない。

こいつと共闘するのは腹立たしかったけど、それ以外に方法はない。

「アーチャー、外に行くぞ！」

「その必要はないだろうな、それと、外に出るな」

「え？」

もう既に土蔵の扉に手を賭けておもいつきり開けていた俺は間拔けな声を出してしまった。

ガラリ、と土蔵があいた瞬間に顔の近くの空気がおもいつきり引き裂かれた。

アーチャーは対応したようであたき落としていた、あれは………
…琳が使っていた槍？なのか。

「ハッハッハハハ！」

外を見ると、ランサーと琳が肩を組んで爆笑していた。

「いや、なんでや」

第16話 剣戟の最後（後書き）

やっちゃったぜ！

後悔も反省もしていないけど、皆さんに申し訳ないなあ。

第17話 決戦

現在地：柳洞寺階段前

「やっぱりいるよな、お前」

「だがな、この体も限界に近い、早々に決着を着けさせてもらおうとしよう」

「セイバー、任せた、俺の技術じゃ一瞬でオサラバしちまう」

「任せました」

脚甲の音を高らかに鳴らしながら前に進み出るはセイバー。

その手には誉れも高きエクスカリバーが存在し、堂々とした威容を完全に見せつけていた。

「アサシン、決着をつけよう」

「もとよりそのつもり、往くぞ」

どちらともなく剣戟の応酬を始める彼らを尻目に俺達は階段を登った。

「ハアアアア！！」

「——ッ」

次々と高速の刃が闇夜を切り裂きながら両者を行き交う。各々が更なる一撃を求めて剣を振るった。激突で石畳は剥がれ、木々は泣き叫んだ。

舞台は、空中に移った。

可憐に舞いながらもその全てが必殺とも言えるセイバー。

滑るように動き、受け流しながらも放つ時たまカウンターとして放つ一撃は必殺。

ファイトスタイルが違ふ両者は、ここで雌雄を決しようとした。

月夜に浮かぶように飛び、頭蓋を叩き割るような剣を振るうセイバーに対し、地面に足を然とつけ、泰然自若とし、長大な刀で受け流した。

——ガウウン——

剣で起こしたような音とは思えぬミサイル然とした音を発しクレータを創りだした。

しかし、避け切れらたセイバーに隙が生まれた。

「しまっ——」

叩きつけた姿勢で固まるセイバーでは無かった。

咄嗟に風王結界を纏い、瞬時に開放してブーストを作動させ、前面に猛進して避けたセイバー。

その判断力は、全英霊中最高レベルと言っても過言ではない。

「ふむ、惜しいな、あと少しだったのだが……」

「そう易々とこの頸をやらんぞ、アサシン」

「ならば、この手で落とす」

ジャ、とこの戦い初めての構えを見せたアサシン。

本能的に危険を悟ったセイバーは不転転の覚悟を決めて剣を構えた。

——最高の一撃を求めた農民と、最優を謳われた王が、ここに時代を超えて剣を構えた。

「参るッ！」

「ウオオオオオ！」

弾丸並の速さで突撃をし、一刀の下に切り捨てようと飛び出したセイバー。

対するは、
逃れ得ぬ一撃を求めた剣士が編み出した剣技“燕返し”で迎え撃つアサシン。

両者は、同時に動を起こし、合わさり、静となった。

「やはりここに来るか、雑種」

「御託はいい、始めるぞ」

アーチャーと、ギルガメッシュが相對し、

「良くぞ来た、衛宮切嗣の息子、衛宮士郎」

「言峰………綺礼………」

「綺礼イ、やっぱり生きてたわね、エセ神父」

破綻者、言峰綺礼と相對するは、衛宮士郎、遠坂凜。

ポツリと残されたのが、青景琳、バーサーカー肩にイリヤ。

「さて、俺の相手はだれだ？」

「■■■■ ウアア！！」

その二人の前に現れるのは……………

「ふうん、ライダー……………じゃないわね」

「そうだな、黒化している……………これは俺が殺す、待ってる、バーサーカー」

前に進み出る琳の手には、ある一対の剣が存在した。

斧槍の名は、世界渡生涯の武器、ナーカルディウム決戦の前に銘を決めた、瞬間、斧槍は形を変え、この二振りの剣になった。

「さ、やろつか、浄化させてやる、俺の手で」
「……………」

決戦が、始まった。

第17話 決戦（後書き）

桜が空気ww

蟲じじいも空気ww

一体どうなったwwww

第18話 決戦・弐

二振りの剣を携え、前に躍り出た琳だが、実のところ対処の方法を模索していた。

「これで何回目だバツキャロー！」

「……………」

黒化し、自我を失ったライダーは弱かった、人間の括りに居る琳でさえ何度も殺せる程だ。

これがバーサーカーだったのなら一撃で塵と化すぐらいの脆さである。

飛び跳ねるように移動するライダーだが、そのスピードは琳にとって遅すぎるぐらいで近づいては剣を振るい粉微塵にしている。……

…のだが、死なない。

今のところ心臓や、頭を潰せずに離脱されているため、そこが弱点なのかと推測できるのだが、それを阻むように両手を差し出し、琳が粉微塵にすると離脱される。なんどもそれを繰り返していた。

「世界渡生涯の武器！」
ナールディウム

……………

真名開放での恩恵はステータス向上のみであるが、ステータスさえ取り戻せれば琳は充分にこの女に対して有利に戦える。

双剣を縦横無尽に振るいライダーの投げる杭を叩き落とし、肉薄した。

一太刀が心臓、もしくは頭にヒットすれば、この黒化したものは破壊できる、そう考えての一撃を振るおうとして、

「キャアアアア!!」

■■■■■■■■!!」

絶対無敵の狂戦士であるはずのバーサーカーの絶叫と、その主であるイリヤの悲鳴が琳の後ろから上がった。

バーサーカーが影に呑み込まれ、イリヤも何かに捕まっている。

とっさに後ろを向いてしまった琳はライダーに隙を晒してしまった。

「しまっ!?!」

ドカリと蹴りを背中に受け吹っ飛び、双剣の片方を落としてしまった。

ライダーは更に杭を二本、限界ギリギリを投げてきた。吹っ飛んだ彼が当然避けれるわけもなく杭を落とそうとしても片手じゃ二本は落せない。

せめて一本落とそうと覚悟を決めた瞬間——紅い線と共に、蒼い人影が踊りでて、その手に持った槍で杭を叩き落とし、引き戻そうと手を動かすライダーより早く辿り着いたそれは、

「刺し穿つ死棘の槍」
ゲイボルグ

恐るべき速さでライダーの心臓を穿ちきった。

「ランサー……………サンキュー、……………ってバーサーカーとイリヤは!?!」

「キャスコがルールブレイカー突き刺したら消えやがった、バーサーカーは呑み込まれたが、嬢ちゃんを救えた」

「そうか……………」

バーサーカーという戦力を失ったのはキツイ、それに、琳の知識だと、黒い影に呑み込まれたのは再利用される可能性が大、非常にまずい状態だった。

失った悲しみは大きいが、それでへこたれてはこの場を勝利することとできない。強く自分を戒めて立ち上がった。

「ライダーは……死んだか」

「間違いなく死んだだろうな、俺のゲイボルクを受けて立ってる奴はそうは居ねえ」

自信満々に言い切るランサーだが、その顔はあまり晴々とした表情では無かった。

バーサーカーを助けられなかった自分を責めているのだろう。

「ランサー、あれは俺の判断ミスだ、気にするな……それよりも、あれをどうにかするのを考えよう」

「ああ……感傷に浸る暇もねえのかよ……まったく、くそつたれな世界だぜ」

「この世界はもともとから腐ってるぜ、かなり狡猾だからな」

各々が武器を構えると、その先に浮かび上がってくるは漆黒の狂戦士だった。

キャスターがその後ろにつき、数少ない支援魔術をかける。

「取り込んだらすぐに再利用か……案外余裕無いんだな、聖杯イ！」

「おっさん、ワリイな、ここで死んでくれ」

彼らが持っている宝具はどれもランクAに満たないモノだ、どうやったってバーサーカーを殺しきるのは不可能。

だが、引かない。

勝機なんてものは微塵もないが、それでもやってやらあゝと気合を見せる。

二人の男は、バーサーカー絶対強者に歯向かった。

「衛宮……士郎、衛宮切嗣の嫡子よ……」

「黙れ、お前のその腐った口で切嗣の名前を呼なけがす」

「ふむ……嫌われているどころではないな、よかろう、私が殺す、そしてその骸を私の活力としよう」

「士郎、あいつ、八極拳は達人中の達人よ、一瞬で粉碎されないように気を付けて」

「分かった」

頷いた士郎は干将・莫邪を両手に持ち、言峰に近づいていった。ある程度まで近づくと、おもむろに駆けた。

予想は出来ていた言峰はそれを遮るように前に足を出し、構えをとった。

「うおおおおお！」

「ハアア！」

裂帛の気合と共に突き出された莫邪を絡めとるように腕を出し、胸に手のひらを押し付ける。

密着状態でもはなてる寸剋は士郎の内部をズタボロにし、吹き飛ばした。

バウンドしながら、遠坂の近くに返るが、次の瞬間にはまた立ち上がっていた。

痛みに呻きながらも傷そのものは殆ど完治していた。

「…………… けられない」

「む？…………… 不発か？」

「お前だけには…………… 負けられない！」

「綺礼っ！喰らいなさい！」

全力で最接近する士郎を後押しするように遠坂は宝石を使い、一撃を放つ。

対する綺礼の対応は素晴らしかった。

危険と判断した宝石魔術に対し、腕に刻んである秘跡の塊である令呪を使用し、全力で迎え撃った。

八極拳の基本技である化勁だが、令呪の加速を受けた綺礼の腕は、人ならざる速さで動き、銃弾並の速さの炎の塊を受け流した。

明後日の方向に飛んでいった魔術の行方を確認すること無く近くにいた士郎に掌打を食らわせ、よろめいた所で右手首を掴んだ。

黒衣の長身の綺礼が蛇さながらのしなやかさを持って屈み、右手を引きこむと同時に士郎の右腕の下をくぐりぬけた。

次の瞬間には全てが決まっていた。

怪我人に肩を貸すような姿勢で士郎の腕は綺礼の背中に背負いこまれていた。

“——やられるっ！”

士郎の脳内がその言葉で満たした時、綺礼の体は士郎の腰に密着し、左腕の肘は士郎の鳩尾を一撃、その衝撃で堪らず左手の干将を落とした。

同時に綺礼の足は士郎の軸足を鮮やかに刈り払っていた。

八極拳、ろくだいかい・ちようちゆう頂肘、右手首を掴んだ時から、士郎の命運は彼が握っていた。

受け身を取ることすら出来ずに叩きつけられた士郎は全身の骨が抜け落ちたような錯覚を受けた。

ただの一撃、まともに受けただけで士郎は戦闘不能になった。

「くっ……………」

為す術なく戦闘不能に陥った士郎を悔しそつに見つめる遠坂。

黒衣の代行者は悠然と遠坂に歩み寄ろうとしていた。

第18話 決戦・弐（後書き）

見覚えがある人もいるんじゃないでしょうか。

F a t e Z E R Oの時、綺礼が舞弥に対して放った一撃です。

すごいなーと憧れてもおかしくはない筈！

第19話 決戦・参

場所は境内のと真ん中、誰よりも盛大に戦闘を行っているのが、両者だった。

「フツ……我に勝てる^{オレ}と本当に思っているのか？」

「無論だ。贗作が原初に勝てないと誰が決めた^{オリジナル}」

右手を広げ、一斉に射出準備を完了させたアーチャーは次々に射出をしていった。

王の財宝を広げ、全て破壊尽くすとはかりに宝具を投げまくるギルガメッシュ。

辺りには宝具が衝突したときに出来たクレーターが無数に存在し、激戦を物語っている。

両者ともに涼しい顔をしていながらも両者の間で激突する宝具は、他の戦いよりも盛大に火花を散らしている。

「雑種が……王の宝物である物をコピーし、あまつさえそれを我に対して差し向けるとは、許し難い罪だ、その身を以って償え」

「償え……か、償いなんてものはもうできないな……貴様を殺して私自身の償いしよう」

あくまで余裕を崩さないギルガメッシュだが、この状況を打開できないことに苛立ちを覚えている。

対するアーチャーは格上相手なんて慣れたもので、腰をすえて、時間を掛けて打開しようと策を練っている。

射出宝具の衝突が止まった瞬間、動きを見せたのはアーチャーだった。

素早く詠唱の呪文を紡ぎ始めた。

「――I am the bone of my sword.
」
「つまらぬ、疾く死ね!」

無数に浮遊し、傍に侍らせている宝具を一斉に解き放ったギルガメツシユ。

右腕を突き出すだけで、アーチャーの行動は止まった。

「熾^ロ天覆う七つの円環^{アイアス}」――!」

展開と同時に盾に衝突をする宝具群を揺らぎなく防ぎ続ける絶対無敵の盾は投影した主の詠唱を阻ませずに存在した。

I am the bone of my sword.
――
体は剣で出来ている。

Steel is my body, and fire is
my blood.
血潮は鉄で 心は硝子。

I have created over a thousand
blades.
幾たびの戦場を越えて不敗。

Unknown to Death.
ただの一度も敗走はなく、

Nor known to Life .

ただの一度も理解されない。

Have withstood pain to create
many weapons .

彼の者は常に独り 剣の丘で勝利に酔う。

Yet , those hands will never ho
ld anything .

故に、生涯に意味はなく。

So as I pray , unlimited blade
works .

その体は、きっと剣で出来ていた。

すらすらと紡ぎ出す言の葉を忌々しそうにするギルガメッシュだが、
彼が出来たのは射出する宝具を増やすだけで、盾を破壊に至らせる
ことは叶わなかった。

黒化したバーサーカーを二人で何とかしのいでいるのだが、その防御も限界に来ていた。

「ランサーあ！令呪を以って命ず！死ぬ気でここ踏ん張りぬけえええ！」

「おうよ！その命令！受け入れたア！」

五体全部をフルに使って彼の猛攻を凌ぐランサーだが、体を押しつぶすような圧力に顔を顰めていた。

すぐに斧剣を引き戻すと、再び振り下ろした。

一度防ぐのに限界近い力を発揮して抑え抜くというのに、二度目はない。

冷静な思考でそう考えると一瞬の内に離脱を試みた。

しかし、如何に最速の英霊であろうと、斬撃に先立ってその場から離脱は不可能、ならばどうするか。

もう一人が防ぐ。その考えでこれまでしのできた。

スルリと後ろに引くと同時に前に踊り込むのは琳。

両手の双剣をクロスに構え、受け止めると同時に右に剣を叩きつけるように動かした。

「もう少しだ！もう少しで！」

齒を食いしばりながら一撃、二撃とサイドステップで受け流しながら避けていく。

もう少しだと自分に言うように囁き、その時を待った。

一撃一撃が必殺の威力を、二人で交代しながら受け止めていく、かなり地道だが、効果はある。

「楔打ち消す漆黒朱の槍」ルーカー・ウェージ

ランサーが受け止めて一瞬だけ隙ができた時に真名開放状態で突き出す。

ザクリと脇腹に入った穂先を引きぬくこと無く双剣に持ち替えてランサーと共に攻勢に出る。

度々、こうして隙が出来た所をランサーと琳は攻撃するのだが、黒化して戦闘能力が若干弱体していても大英雄は大英雄。瞬く間に攻撃を受け止められ、ランサーは急いで緊急退避、琳は双剣で受け止めの体勢に入る。

「ぐううううううー！」

苦悶の声を上げながら懸命に受け止めて隙を創りだそうとする。そんな彼らを救う詠唱^{うた}が届いた。

『I am the bone of my sword .

—— 体は剣で出来ている。

「キタツ！ランサー、アーチャーに近づけ！」

「お、おう！」

「■■■■■！」

琳達を逃げたと認識したのか追いかけようとする黒化狂戦士に構うこと無くアーチャーに接近していく。

時々流れていく宝具を避けながらアーチャーに近づく琳とランサー。

Steel is my body , and fire is my blood .

血潮は鉄で 心は硝子。

I have created over a thousand blades .

幾たびの戦場を越えて不敗。

Unknown to Death .

ただの一度も敗走はなく、

Nor known to Life .

ただの一度も理解されない。

Have withstood pain to create many weapons .

彼の者は常に独り 剣の丘で勝利に酔う。

Yet , those hands will never hold anything .

故に、生涯に意味はなく。

S o a s I p r a y , u n l i m i t e d b l a d e
w o r k s .

その体は、きつと剣で出来ていた。』

「飛び込めっ！」

炎の壁が構築されつつある《固有結界》の中に三人が呑み込まれた。

「ハアアアア！」
「むっ……」

金色の剣を燐かせながら凜の前に立ったのは、紛れもなくセイバーその人だった。

一太刀二太刀と燐かせながら剣を振るうが令呪の加速で離脱をする綺礼に一步及ばなかった。

「言峰綺礼、ここが貴方の終わりの場です」

「セイバーか……この様なめぐり合わせとはな………運命とは恐ろしいものだ」

相変わらずの無表情で嘯く綺礼だったが、口の端が微かに釣り上がっていた。

「セイ、バー」

「士郎退いてください」

ズタボロにされたのにも関わらず立ち上がりとする士郎はだんだんと生気が回復していくようだった。

セイバーが近くに参上してからの回復速度が異常なまでに上がり、既に全快のところまで来ていた。

綺礼も流石に驚いたようだ。鉄面皮がすこし剥がれかけている。

「あれは仕留めたと思ったのだが………衛宮切嗣同様、中々死なないのか……」

「俺はお前を殺すまでは死なない」

挟み撃ちの状況で尚も無表情の笑みを浮かべる綺礼は、両手に黒鍵を構えると、両者に投擲、同時に士郎に向かって走りだした。

第19話 決戦・参（後書き）

なんだか、士郎が人外認定しそう。

まあ宝具の恩恵なんですけどね。

キャス子ちゃんが空気なのは仕様……ではありません。イリヤを保護しているからです。

ルールブレイカーで黒クラグ分解できるとかおかしくね？と思った人。

私も書いてておかしいなとおもいました。でもやっちゃったんで仕方が無いと納得してください。

一応、契約とか破戒できるなら桜の呪いも破戒できるかなーと思ってしまっただけです。すいません。

第20話 決戦・四

バーサーカーを引つ張つてきながらアーチャーの固有結界に引つ張つてくるといふ馬鹿な事をやった俺達は、無数に乱立する贗作群の中から、格が高い……つまり、バーサーカーの宝具を貫通するような武器を引き抜き、横合いで宝具ブン投げ合戦を完全スルーして、バーサーカーと対峙していた。

正直、宝具合戦舐めていたとしかコメントできない。

すこし離れていたからって油断していた、流れ宝具が飛んで来るとかどんなアトラクションだよ、一撃で死ぬわ！

まあ、悪いことが起きたのならいいことも起きる。

ブーメランの様に回転してきた宝具がバーサーカーの後頭部に直撃、爆発。

頭が吹っ飛んでいて、一回死んだことを確認、そして、死んで、復活したことで宝具が健在ということも完全に証明された。

一連の動きを観察していた俺は有ることに気づいた。

それは、バーサーカーの反応の鈍さだ。

固有結界に入る前のバーサーカーは、正面からは反応速度は高かったが、上から叩きつけるように振るう一撃が対処しないで喰らったり、ランサーがこっそり後ろに回って牽制したときも突かれてから反応したり、と。

おかしいことは多々あったのだ、ライダーの時も、通常より弱体化していた。

「ランサー、不意打ちはかなりの高確率で入る、俺が引きつけて、お前が後ろからそいつで突く、OK？」

「いいぜ、やってやる」

ランサーは手に持った神の槍“ブリューナク”を片手で掲げ持ちながらニヤリと笑った、俺も笑い返して、同時にバーサーカーに向かって走りだした。

「■■■■■■■■■■———！！」

俺が正面から打ちかかると同時にランサーが大きく跳躍してバーサーカーの頭を越えて背後に立った。

認識をしたバーサーカーが後ろを向こうとするが後ろから斬りつけられて俺に照準をつけた。

一撃がクソ重い斬撃を必死に捌きながらカウンターを叩きつけて挑^タ発^{ント}を積み重ねる。

ランサーは一撃で仕留めるべく力を貯めて準備をしている、それまで時間を稼ぐ、それが俺の仕事。

なんとも損な役回りだが引き受けたのは俺なのだから仕事はしっかりやる。

バーサーカーとの戦いで危機本能が危険だと思ったのか、俺の法外な魔力を存分に発揮するべく、魔力放出を無理やり行わせた。

てってれー、おめでとう、りんは『魔力放出』のスキルを手に入れた。

それにより、宝具のランクが微妙に変化した。

バーサーカーの後ろでチラチラと蒼い人影が見受けられるが目を瞑

っているように見えた。

バーサーカーがなんの芸もなく斧剣を振り下ろしたのを真っ向から筋力をフル動員しながら魔力放出を発動し、膝が地面に付き、陥没しながらも確かに受けきった。

瞬間、ランサーが動いた。

電光石火の如き速さで後ろに近づくと、

「貫くべくして鍛造された神の槍！」
ブリューナク

アレンジを加えた真名開放を行い、それを起動させるために大量に魔力を注ぎ込んだ。

完全なる担い手では無いが、オリジナル原点から派生してきたゲイボルクを完全に使いこなしたランサーなら開放ならできる筈——！

《ブリューナク》とは、『貫くもの』という意味、ならば、祝福の加護すら貫ける。

ランサーが足を地面に食い込ませながら全部の力をこめて放った一撃は推定B、普通なら貫けるわけもない一撃だったが………

バーサーカーの胸から、一本の青い蒼い槍が突き立っていたとき。
神が操った槍は神の加護を打ち破った瞬間だった。

「
■ ■ ■ ■ ■
ランサー！逃げろ！」

心臓を貫かれたバーサーカーだが、機能を回復させるのは早かった。
ブリューナクをそのままにランサーは最速の足を回転させてバーサーカーの攻撃範囲からは逃げた。

突き立った槍が音を立てて抜けていく。

そして、地面に神槍が落ちた。

第20話 決戦・四（後書き）

短めですけれどもご容赦を。

真名開放については私の主観です。

おかしいな、と思った人は申し訳ありません。

平にご容赦を。

第21話 因果逆転の槍（前書き）

ランサー＆琳VSバーサーカーのターン!!

今回は神視点で参ります。

第21話 因果逆転の槍

土煙が舞う中、漆黒の巨人が佇む。

それに対抗するように剣を両手に携えているのは琳。肩で息をしながらも最速を見せつけたランサー。

漆黒の巨人の命を二度、殺した。

その事実が、二人を奮起させるのには充分だった。

「ランサー、無事だな？」

「ハッ——あの程度でくたばっているのなら俺は英雄になんぞなつちやいねえよ」

「違うない」

無事を確かめるために会話を交わす、が。

その会話を遮るように動きだすバーサーカー、簡単には命を取らせぬと吼えた。

「■■■■■■■■——！！」

腹に響く音を足で打ち鳴らしながら構えを取るバーサーカーに呼応してランサーが飛び出した。

一瞬遅れて琳も飛び出す。

最速を以てバーサーカーを攪乱すると頭に蹴りを放つランサー、それをもろに受けたバーサーカーは一瞬だけ目を塞がれた。

その隙について琳が一撃を放つがそれはゴットハンドに防がれる。

「チィ————硬い体してやがるなあおい！」

舌打ちもそこそこに琳は槍に持ち替えて突貫をかける。

飛び掛りながら双剣を合わせるようにして顔面に打ちつけようとするが斧剣により防がれ、弾き飛ばされた。

圧倒的までの力を込められたカウンターは琳を容易く吹き飛ばした。

「がああああ!!」

「琳ッ!」

二転三転と荒野をバウンドして突き立っている魔剣の一つにぶつかり、停止した。

それを追撃するように駆け出すバーサーカー、この固有結界に入ってから初めて足を動かしたと言えるだろう。

簡単に琳の前には行かせないと立ち塞がるランサーを歯牙にかけること無く斧剣を一閃した。

鋼鉄と鋼鉄がぶつかりあい、大輪の花を咲かせ、押し負けたのは、ランサーだった。

臂力がちがう、獲物が違う。

技で打ちかかるべきランサーが力を以てねじ伏せるバーサーカーに力で勝負しては負けるのは自明の理だった。

ガゴン、と音を立てて陥没した地面の上に膝をついて押しつぶされないように踏ん張っているランサーだが、その腕は今にもはちきれそうな程に膨張していた。

傷だらけで尚抗おうとするランサーはバーサーカーの力が緩んだ隙をついて股下を抜けていった。

「——ハア——ハア、大丈夫、か……ランサー」

「んなぐれえでくたばるかよ……ペッ」

ランサーの横に降り立ったのは琳だった。

バーサーカーの頭を槍で突き刺して隙を生み出したのは彼だった。血が混じった唾液を吐き捨てながら答えるランサーは満身創痍の体だった。

琳も似たり寄つたりの体だった。

「ああ、ここにくたばったら士郎に怒られちまうな」

「……………弱気になったか、琳」

「んなわけねえよ、ここまでやって来たんだ、死んじゃ駄目だぜ」

「だよな……………これで死んだらスカアハやフェルグ스에 笑い飛ばされちまう」

そう言うランサーの眼は爛々と紅い光を灯していた。

その眼は獲物を狩る眼。

まだ行ける、殺せる。と彼の眼は雄弁に語っていた。

「あと6だ」

「いきなり何いってんだ？」

「6、俺が殺す、だから、セタンタはゆっくりしてろ」

決意を秘めた眼をした琳がゆっくりと前にでる。

「6？馬鹿言うな、俺も行ってやる、だから、殺し尽くす！」

「OK、最高にCoolな一撃を叩きこんでやる！」

不退転の意思を固めた二人は、尚もバーサーカーに立ち向かった。

柳洞寺のど真ん中で剣戟の演舞を広げていたのはセイバーと綺麗、それに士郎だった。

「セイバー、こいつは俺が殺す」

「ですが、士郎……………」

「これは、親父と俺がつけなきやいけないケジメだ」

「……………」
「分かりました」

「ありがとう。セイバー」

無言のまま後ろに引いたセイバーに感謝の念を送りながら、決死の覚悟をして綺礼の前に立った。

（相手は俺よりも格上、だけど、それが何だって言うんだ、格上手なんてアーチャーはいくらでも切り抜けてきた、なら、俺も切り抜けなくっちゃ嘘だ）

「ほお……………覚悟に満ちた顔をしている。

その顔が絶望に染まった時、私の愉悦は満たされる。

こい、衛宮士郎、貴様のその理念は私の苦悩ネガイと同種だ」

「ふざけるな、お前の願いは腐っている、その願いを俺は許容できない」

静かに、士郎は投影を開始した。

それを待つ姿勢を見せた綺礼。

両者の準備が整った時、親子二代の因縁の戦いの火蓋が切って落とされた。

静かに、音も無く躍り寄ろうとした闇は、白と黒の陰陽によって弾き出された。

拳と剣の打ち合いだというのに鋼が打ち合うような音が響き渡る。

衰えたとはいえ、絶技を極めた八極拳を振るい、士郎が産み出した投影物と拳を交えた。

士郎が後になる正義の味方エミヤシロウの経験全てを蓄積したソレは士郎の技量を数十段飛び越えた。

剣の素人から剣士へと、それから玄人へと、そしてアーチャーが辿り着いた場所に駆け上がった。

「——ムッ」

疑念の声もそこそこに、驚愕を顔に出さずに技量が飛躍した士郎と対峙する。

士郎の行動はある意味、アーチャーに似通っていた。

思い切り剣を綺礼に叩け、防御手段を取らせると瞬時に後ろに飛び距離を稼ぎ、両手にある干将莫耶を投擲する。

それを防げぬ者だったら今此処に綺礼は存在していない。それは士郎も重々理解している。

だからこそこの投擲、次に繋げるための武装の放棄。

「――トレース、オン
投影、開始」

士郎の手に生み出されたのは、アーチャーが握っていたものと同様の黒塗りの弓。

魔力を吸い取られる感覚に軽く酔いながら士郎は八節なんて通り越して照準、同じく投影した矢を放った。

すぐさま番えては放つ、放つ。

黒い影は迫る矢を眼中に入れることなく駆け出した。

黒鍵と呼ばれる礼装を両手に限界量である10を持ち、広げて趨^{はし}った。

不気味な死を司ると言われている鴉の様な構えで飛来する矢を叩き落としながら士郎に肉薄する。

「――トレース
投影、がつ――！」

矢を全弾たたき落とした瞬間に放った黒鍵は士郎の詠唱を止めるのには充分だった。

ふくらはぎを裂かれ、右腕も裂かれ、詠唱の時間さえも既に無い。

一人は立ち尽くし、一人は駆け続け、両者の距離が零になった時、ソレは晒^{わら}った。

聖職者は仕留めた、と直感した。

正義の味方もまた、仕留めた、と思考した。

黒鍵は確かに士郎の身を貫いていた。

最後に士郎が身を擦った為、即死では無かった。

士郎が突き出した干将は純白の刀身は血に濡れていた。

つまりは……………痛み分け。

いや、痛み分けではなかった。

両者ともに同じ行動を取った。

後退、である。

「士郎ッ——！」

セイバーが駆け寄り、その手を士郎の体に掛けた。

その時から、士郎の傷は癒えた。

「もう、大丈夫だ、セイバー」

声をかける士郎の顔は苦痛に歪んでいたが、それも痛覚の残留故だろう。

対する綺礼も自身に魔術をかける時間は充分にあった。

だが、一瞬で回復する士郎と違い、じわじわと回復する綺礼では、行動に制限が出るのは明白だ。

だからこそ、士郎は突っ込んだ。

快復させる暇は与えない、と。

オマエが休息を得るのはあの世だと言わんばかりに両手の夫婦剣を夜空に翳した。

「……………フッ」

この身を貰かれるという失態に対する自嘲の声か、はたまた、策も無しに突っ込んでくる獲物に対する笑みか。

長身を屈めては居たが、立ち上がると同時に傷を感じさせない動きで士郎に突っ込んだ。

またしても最初と同じく剣と拳を交える演舞。

違いは確かに存在した。

柳洞寺の地が朱を吸い込んで消えていった。

綺礼はその身に施す奇蹟も程々に士郎の迎撃に移ったのだった。

剣戟が重なる毎に重くなっていく我が身を呪いながら綺礼は思った。

“なぜ、私が圧されている”

確かに、綺礼は怪我をしている。

だが、それだけなら綺礼は十分に士郎の対処が出来ただろう。

なぜならこの身は代行者。

人外と戦って受けた傷は数知れず。

傷が癒えない呪いを受けながら戦ったこともある。

その彼が圧されているのは別の理由だった。

衛宮士郎の気迫故。

綺礼もかける気迫はある。

それを凌駕し、尚、圧する程の気迫を見せている。

「……………グッ——ハア！」

だからこそ、寡黙な彼が吼えた。

貴様には負けぬと。

私を打倒し得るのは貴様ではないと。

言峰綺礼が、此処に来て、侮っていた士郎への認識を改めた。
この身の奇跡を全てつぎ込んで殺すべき対象と。

本気を出した。

第21話 因果逆転の槍 (後書き)

やっちまった(、*ヅ)テヘッ

第22話 騎士王の聖剣

「……………グッ——ハア！」
「うおおおお！」

綺礼の身中に刻まれた聖痕が膨大な魔力へと変換され、身体に強化をかける。

それに対抗するように体に強化をかけ、双剣に無茶な強化をかけてまで黒鍵を捌く。

やや圧されているのは、士郎。

全力をだした綺礼に力で、技術で負けている士郎がここまで粘れているのはセイバーの宝具故だった。

——“アウトアロウ全て遠き理想郷”

士郎の身に埋め込まれたソレは、セイバーの魔力が流れこむだけで傷を治癒していく。

痛みは残るのだが、捌ききれなかった拳打、黒鍵の傷は全て治癒して、連続して即死級の一撃を叩きこまれないと死なない程度には回復能力は高まっていた。

柳洞寺の境内の闇に溶けこむように躍り寄る綺礼を見据えるようにして駆け出す士郎。

共に最高の一撃を敵に入れようと剣を、拳をふるった。

肉体と鋼がぶつかったとは思えぬ音が響きながら境内の中が一瞬だけ火花で明るくなった。

トレス・オン
「投影開始——！」

あれと打ち合うのは此れじゃ無理だと直感した士郎はその双剣を真横に投げた。

一瞬の内に魔術を組み立てると言葉を紡いだ。

手に持つは騎士王の聖剣………の原型。

黄金の剣は士郎の手に納まり、煌きを以て綺礼と対峙した。

詠唱を紡いだ瞬間に綺礼は後退し、様子を伺っていた、その手に持つ聖剣が高ランクと見るやいなや黒鍵にも法外な魔力を注ぎ込んで強化した。

巨大なサイズになった黒鍵を両手に2本ずつ持って士郎へと肉薄した。

「命をかける。或いはこの身に届くかもしれん」

「届くどころか、越えてやるっ！」

騎士王の手に収まっていた聖剣が綺礼へと襲いかかる。
経験に裏打ちされた剣速は士郎のをはるかに凌駕していた。

対する綺礼の攻撃は単純なモノだった。

黒鍵の一風、それだけ。

だが、拮抗してしまうとはどれだけの力が込められているのだろうか。

聖痕による自らの強化、さらに聖痕による黒鍵の強化。

「馬鹿な——」

後ろに控えるセイバーが驚嘆の声をあげる。無理もない。

士郎の剣は、嘗てセイバーが手にしていた聖剣の贋作。
黒鍵程度なら士郎の精度でも充分に破壊できる程の攻撃力が宿っ
ている。

それを拮抗に持ち込む綺礼が人外なのだ。

しかし、ここに来て綺礼は一つミスをした。

それを身を以て実感するだろう。

それに気付いたときには、既にその身は切り裂かれているだろう。

士郎の次を読んだ一手が、綺礼を上回った瞬間だった。

12の命は、其のストックを、1まで削っていた。
決して二人で削りきったわけではない。

アーチャーもこちらの状況に気づき、それとなくこちらに高ランクの宝具を流した。

ギルガメッシュの猛攻に対抗する贗作を減らしてまでこちらに武器を流していたのだった。

「これでおわりだぁぁぁああ！！！」

血を吐けとばかりに声を出す琳。

この身が果てようともここで貴様は殺し尽くすと叫んだ。
だが知るがいい何一つ守れなかった英雄よ。

あれは底なしの化物だということを。

此れで死んでいるのなら彼は十二の試練を突破などしていないと。
その手に持った獲物が何であろうと、理性など無くとも。

宝具を出してやろうと。

「■■■■■■■■！！」

斧剣が黒色に染まりきり、黒の極光を放った。

ランサーは本能で飛び退き、琳は受け止めると双剣を構えた。

琳がそれを間違いだと思うのは一瞬後だった。

「ガアアアアアアア！！！！？？？」

ドサリ、と膝を荒野の地面についたのは琳だった。

四肢が今にも千切れそうなぐらいの深手を負っている。

腕が、足が、くっついてるのが不思議なぐらいの有様だった。双剣で防げたのは首を刈る一太刀と胴体を刎ね飛ばす一撃のみだった。

発動と同時に負けを覚悟した琳は飛び退こうと体を後ろにやった。それが、ぎりぎりの生存の理由だった。

ヒューヒューと肺から空気が漏れているのがワカルキガスル。

視界に収まっている腕を見ると、白いのが見えていた。

これは骨だな、と人事のように呟くと、視界が掠れてきた。

死ぬな、これ。と思った瞬間に、琳の意識が、世界から断絶した。

第22話 騎士王の聖剣（後書き）

さて、琳は死んでしまうのだろうか！？

ランサーは敵討ちに行くのか！

アーチャー対ギルガメッシュの戦闘描写は俺じゃ無理だ！

最後は余計でしたが、次回もお楽しみ…？に。

第23話 無限の剣製（前書き）

題名に意味？そんなものございません。

第23話 無限の剣製

「オオオオオオオオオオオオ！！！！」

可能な限りの魔力を回せ。

それがオレに与えられた使命だ。

荒れ狂う剣製の世界の中で、英雄王と雌雄を決しよう。

猛々しい剣の切っ先を頸に突きつけながらもこの身が剣で有る限り敵と戦おう。

「フンッ…………——」所詮は贋作の集まり、たとえその信念が^{オリ}原^{ジナル}初^{ジナル}だとしても、贋作が本物に勝てる道理は無い」

周囲に宝具を用意し、放つ。

それだけの作業を繰り返すだけで彼は全サーヴァントの内の最強になった。

最弱にも最強にもなる彼は、この場においては完全な拮抗状態に位置していた。

表面上は余裕の仮面を被つていようと、焦りがじわじわと出てくるのが分かる。

ギルガメッシュはこのような状況に陥ることは無かった。

同じ力を持つものと対峙しなかった彼は、拮抗状態で勝つ算段をはじき出すことが出来なかった。

対するアーチャー。

数段格上と戦ったこともある。それでも彼が生きながらえて来たの

は究極の戦闘理論故だった。

生き残るためには手段を選ばなかった、手札は常に多く、
持てる戦力を総動員して敵にあたった。

故に彼は拮抗状況で焦ることは無い、故に最古の英雄王が敵と云えど彼は勝利を見据え続けていた。

常に最高の一撃を。

常に生存を視野に入れて。

視野を広く、自己犠牲の精神は今でも忘れていない。

（世話のかかる奴らだ……）

後で皮肉を大量に言ってやろう、とソコまで思考した時にはたと気付いた。

——オレはこの戦闘の後を考えていた。

それはある筈もない選択肢。

この英雄王に勝つことは、綺礼の戦力を零に近くすることだと気づいていた。

サーヴァントに勝てる程強くはない綺礼だ。

戦いが終わること即ち、聖杯戦争の集結を意味していた。

（オレも終ぞ焼きが回ったか……）

自分自身の嘲りの念を込めて思った。

終わりは有るのかと。

「……………あ、ガツ、ああ……………」

既に死に体の状況で立ち上がろうとする。

太ももに付けられた斬撃の跡から紅い生命の源が零れ落ちる。
がくがくと震える膝を血が滴る腕で抑えつけて。

腕が流れ出るモノを意識しないで。

満身創痍を遥かに超えた状態で立ち上がるとした。

[
■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■
— ! ! ! ! ! ! ! !]

「琳ッ！」

バーサーカーが仕留め損なったことに気付いたのか斧剣を琳目掛け
て振るう……………のに先んじて滑りこむようにして琳の体を掬い上げ、
バーサーカーの攻撃範囲から逃れた。

「ラン、サー……悪い、くたばるか、もしれねえ」

「んなことさせねえよ。だから、安心して休んでろ」

琳の体を横たえろと癒しのルーンを大地に刻んで治癒の結果を創りだした。

「おっさん、待ってくれるなんて気がいいじゃねえか」

だが、バーサーカーをよく見てみると体が微かに震えていた。黒化する前の意識が、殲滅しようとして動く黒化の意識を押さえつけていた。

だが、それが抑えられたのは僥倖以外の何物でもない。

ランサーが獲物を構えたときにはバーサーカーはもとに戻ってしまった。

「ウオオオオオオオオオオ!!!」

獣の様に四肢を突き立てるやうに疾駆する彼が放った槍と、

「■■■■■■■■■■!!!!!!」

不動の構えで迎え撃ったバーサーカーの斧剣が衝突する寸前。

錬鉄の英雄の固有結界が消滅した。

背中から臓腑を掻き分けて出てきたのは、父の遺品である短剣だった。

「そうか。以前、気紛れでどこぞの娘にくれてやった事があったな。……十年前か。——なるほど。私も、衰える筈だ」

「ええ、綺礼。この剣で貴方を殺すことになるとはね。世の中、不思議で一杯ね」

「土産話だ、凜。……………皮肉なことだが、その剣は、君の父を貫いたことも有る剣だ。」

まったく、あの時の時臣師の顔は、今でも思い出せる」

プツリ、と何かが切れる音がした。

「……………貴方に言いたいことは沢山あるわ。だけど、今はこれだけ、」

そこで一呼吸置くと、

「地獄に落ちなさい、綺礼」

そう言い放った凜が横に体を動かすと、綺礼の体に衝撃が走った。

——ふむ、凜の一刺しなら助かる余地はあったのだな。

流石に、衛宮士郎まで追撃となるとな、助かる見込みはあるまい。

冷静に思考を完結させた綺礼の両脇から挟むように胴を真つ二つにしようと襲いかかったのは、士郎が投げた夫婦剣だった。

干将・莫邪。

互いに互いを引き寄せあう正に“夫婦”剣と呼ぶに相応しい一对の

双剣の性能を十全に理解して、運用した土郎の勝ちだった。

「終わりだ、言峰」

「ああ、終わりのようだな」

巖の様な洪面で土郎を見やると、

「衛宮切嗣にも負け、衛宮士郎にも負けたか。」

貴様の勝ちだ、衛宮士郎。貴様に永劫の不幸が訪れることを。

そして、——……………私の負けだ。」

「終わった……………のか？」

「ええ、終わりました、シロウ」

「お疲れ様、士郎」

「後は……………」

「
「
「
ギル
ガ
メ
ツ
シ
ユ
」
」
」
」

第23話 無限の剣製（後書き）

フッフッ。なんか無理。

文才コイツ！

文才よ！来てくれエエエエエエエエ

第24話 燕返し

士郎と凜が綺礼の体を殺した時を少し超えた時。

「雑種ウウウウウウウ！！！！」

「チツ……………」

ギルガメツシュが着ていた黒いライダースーツは既に彼の体には無く、金色の鎧が彼の総身を覆っていた。

華美で煌びやかな身体とは打って変わって憤怒の表情を浮かべる最古の英雄王は“王の財宝”ゲイトオブバビロンを解き放とうとしていた。

錬鉄の英雄が出来ることといえばその身に受ける傷を少しでも減らし、反撃の糸口を見つけ出すことだけだった。

その為にバーサーカーに対しての援護を疎かにして剣製の剣を総動員せざるを得なかった。

両者の右手が構えられる。

オリジナル フェイク
原初と贋作の切っ先が敵を貫かんと構えられる。

その手が振り下ろされた時。

赤い外套を翻しながら彼は疾駆した。

夫婦剣を携えて、浮かんだ剣は自身を守護するように浮かび上がらせて。

「ウオオオオオオオオツッ！！！！」

鍊鉄の英雄は此処に来て勝算無しの突貫を仕掛けた。

「何イ！？」

全てを見通すはずの眼は、その愚行を捉えること無く。

投げられた鶴の翼は彼の下に殺到した。

難なく防がれる二刀は織り込み済み、

続いて投じられる二刀は彼を囲むように。

最後の二刀を両手に構えて最後に放った。

《鶴翼三連》

彼の必殺たる技が発動した。

目を覚ましたのは声が原因だった。

《こんにちは、異端者》

「今の時間帯はこんばんは。ここは何処ですか？」

クスクスと笑うような音が琳の脳髄に響き、

《ここは貴方の中、瀕死の貴方が貴方でいれる場所》

「つーことは、俺は今にも死にそうだと、一撃貰ったら死んじゃうようなH P 1だと」

《そういうことになるわね》

《でも、ソレは貴方を送り出した世界が認るわけがねえ》

《私と契約しなさい》

《俺と契約しろ》

交互に繰り出される男と女の声が彼の脳髄を揺らす、視界零の黒の空間で琳は返答した。

「契約したら何が起きる」

《貴方に不利なことは1つだけよ》

《厄介なことはたった一つ》

《抑止の守護者になってもらう》

《それだけだ、簡単だろう？》

「……………つまり、世界と契約して守護者になれば、俺の命は救われると、契約しないなら死ぬ、と」

《そういうことになる》

《そういうことね》

「クッ……………」

《どうしたのかしら？》

「クッハハハハッハハッハハハハ！何だそれは！俺はまだ世界に働かせられるのか！！とことん卑怯なもんだな！」

狂気に包まれたかのように哄笑を響かせる彼を遮るように世界の伝達者が言った。

・
・
・

《返答を聞かせてもらいましょう、契約しないなら貴方は、誰も救えないわ》

ピクッ、と体を痙攣させた。

いつの間にか琳の視界が広がっていた。

そこは、かつて、彼の妹が、父が死んだ場所だった。

かみ殺していた笑みがピタリと止んだ。

あーあ、と言いながら立ち上がった。

・
・

「おい、これがあんたらのやり口か？」

《なんかヒデエ言われようだが、まあその通りだ》

「覚悟は出来た、契約させてもらおう」

《いやに簡単に決意するものだな、アーチャーやセイバーは慟哭の果てに決定したというのに》

「俺の目的は誰かを守ればいいんだ、その点、守るという点では守護者は都合がいい」

《フウーン、まあいい、是非は問うまい。……汝、契約をするか》

おもむろに口調を変えた男は60代半ばの老練な賢者を思わせた。
対する琳は“いいぜ”の一言。

「世界は狡猾だという言葉、もう一回言っただいてやる」

《今度来る時は貴方が死んだ時だ、その時まで》

《最後に、世界は貴方に優しくない》

女の声が響いた時、琳は崖から落ちた。

第24話 燕返し（後書き）

遅くなりました。

第25話 射殺す百頭

「なんだその格好、いきなり馬鹿な格好してやがんな、琳」

黒い粉末に成りながら消えていくバーサーカーを視界に収めながら鎧姿の男に話しかけるはランサー其の人だった。

「るせえ、これには訳があるんだ、——…それより、傷は大丈夫か？」

「左腕が逝っちまったが大丈夫だ、ルーン刻んどきや治る。それより、アーチャーの糞野郎が見えねえ、あの趣味の悪いキンピカもだ」
「糞野郎とは……なかなか辛辣な評価を下してくれるな、槍兵」

宵闇から音もなく出現したのは錬鉄の英雄だった。

有るべきはずの左腕は消失し、全身に裂傷を負い、投影した回復増進の外套を上から着こむことで傷を癒している最中だった。
そのことに触れること無く、ランサーと琳は話を進める。

「ギルガメツシュは倒したのか？」

「仕留めそこねた、奴は柳洞寺の地下に潜った、それよりも青景、それはなんだ、見たところ一般的な騎士の鎧だが」

「………これ、世界と契約したときに着用したんだ。世界も糞ったれでさ、何も守れなかった俺に何かを守る騎士の鎧を与えやがった。皮肉はお前より上だぜ、アーチャー」

「お前………完全に英霊化してるぜ？それも世界との契約か？」

「おう、なんか英霊になってやがった。だが、なかなか悪くない。」

世界が魔力供給者だ、十全に漲ってる」

充足した雰囲気を纏わせつつも相変わらずの友人と接するような態度を貫いていた。

最も、名を世界に轟かせる英霊と話をしている時点で一般人とはかけ離れているのだが。

「琳ッ！」

「おー、士郎、無事だったか」

あんま嬉しくなさそうな表情をしながら返答した琳の表情を見ると無く柳洞寺の地下を見据えていた。

士郎は確かにギルガメッシュの気配を捉え、何かに惹かれるように地下のある方向を見続けていた。

キヤスターも漸く境内に顔を出し、イリヤと共にこちらに寄ってきた。

皆が臆病者と思ったのも無理は無いと思う。

イリヤはキヤスターの傀儡に守らせて、アインツベルンの森に帰らせた。

この状況でイリヤを襲おうとするものは居ないだろうと判断してのことだった。

紛れも無い決着の雰囲気を纏わせながら一同に会した彼らはそれぞれの武器を持ち、階段を降りていった。

「ここ……ね、魔力がここから漏れ出しているわ」

「サンキュ、遠坂。よし、行くぞ！」

遠坂が道案内をした後、キャスターが搜索の魔術をかけ、異常がな
いか検知した所。

「マズイわね……英霊の集団がいるわ、おそらく、ライダーと
同じ種類ね」

「私が行きましょう、私ならいざという時はこれが有りますから」

セイバーが自信有りげに自らの聖剣をカシャリと叩き、獰猛な笑み
を浮かべた。

それを満足気に見ながら頷いたのは琳だった。

「んじゃ、セイバーとキャスター、頼んだ」

「なんで私もっ!？」

「いや、あんた広域魔術使えるだろ、だから」

涙目になりそうなキャスターは嫌々ながら頷くとセイバーと共に肩
を並べた。

「行きますッ！」

セイバーの号令と共に地下空洞の入り口に身を躍らせた。

ホールの様に広いソコは無数の泥が蠢いていた。

気味の悪さに顔を顰めつつも斬り込んだセイバーは一太刀で数人分の泥を消し飛ばした。

「ハアアアアア!!!」

セイバーの聖剣は既に其の刃を晒し出し、十全の力を以て相手を切り伏せた。

ビシヨリと泥に成り消えていくその姿を見届けること無く次の敵に躍りかかる。

「セイバー、キャスター、後、任せたぞ!」

「了解してます」

セイバーが泥の集団に突っ込み、その集団をかき回したときに琳を筆頭に奥に進んでいった。

それを確認したキャスターが魔力を収束していった。

「セイバー、引いて頂戴」

いきなりの宣告にも戸惑うこと無く、自身の直感を信じて飛び退るセイバー。

退いた空間を抑えつけるような魔力の放出が泥の塊を襲った。

「はし奔りなさい——コピテル・ロッドネレイデス紫光弾、電蔵」

紫色の魔弾と広域に降り注いだ雷が泥の塊を貫いて消しさつていった。

しかし、それでも尽きることのない泥はセイバーとキャスターに標的を定め、襲いかかった。

琳を先頭に地下空洞を進んでいくと、細い道の中央に何かが蹲っていた。

ソレはズルズルと立ち上がると、その姿形を彼らに見せつけた。

「お前……………」

誰かが声を発した。

ソレは、黒色の何かを着ていた。

それを理解したランサーが黒い気配を押しつけて言った。

「ソレは、俺が殺す。……………だから、行け」

誰一人として反対するものは居なかった。
当然だ、今此処でソレと対抗できるのは最速の英霊であるランサー
が相応しいだろう。

最速であるが故に自身に追いつける可能性すら有る。
なら、文句なんて言えるわけもない。

「任せた、クー・フリーン」

「任せときな、さつさと片付けて追いついてやるからよ」

赤色の眼がソレを見据え、ゆっくりと前に進み出た。

両手で構えた血よりもなお深い朱の穂先を地につける程に低く構えたランサーはさながら獣のようだった。

欄らんと見据えた眼光がソレを見据えた時。

侍の形をした闇はゆっくりと刀を構えた。

そして、蒼色の影は疾走を始めた。

「行くぞ——俺の速さについて来れるか？」

20メートルもの距離を一瞬で詰め、渾身の突きを放った。

対する侍は闇に落ちて尚落ちぬ剣技で突きを捌いた。

それは、明鏡止水の心が作り出した一種の奇跡だった。

「んじゃ、さつさと追いつけよ？」

琳が零した呟きは確かにランサーに届いた、が、答えようとはしなかった。

だが、琳はそれを追求しようとはせず、前に進んだ。

出来れば、すぐに殺せるような弱者に成っていてくれと切に願っているが。

第25話 射殺す百頭（後書き）

これって、一応20話程で終わらせる予定だったんですけどね。

どうなってるんだ。

第26話 守護者の槍（前書き）

上は青景のことでございます。

第26話 守護者の槍

場は地下空洞、最奥――

そこに至るまでの通路に現れた泥の悉くを瞬くの内に撃滅しながら進軍を続けていった琳たちが見たものは。

「な、んで……………お前が居るんだ……………」

――言峰……………」

「綺礼……………」

「なに、そう驚くことではあるまい。私を貫いたのは凜でよかった。刺した時の感触で気付かれる場合があつたやも知れないからな」

漆黒の黒衣に金色の十字架クロスを身に纏った元凶は此処に至るまでの説明をさも愉快気に始めた。

「人形を知っているな？あそこに居た私は人形だ。能力などは私に劣つたが、外見だけなら肉親にすらバレることは無いだろうと思えるほどの完成度だった。

私は、元からそのつもりで用意をしていたのだがな。

衛宮士郎、貴様に殺されていたのならバレていたかも知れない。改めて礼を言おう、凜。

オマエのお陰だ」

クツクツと肩を上下に動かしている様は確かに笑っているととれただろう。

だが、

余りにもその笑い方は酷薄に過ぎた。

一触即発の雰囲気壊したのはある男の声だった。

「言峰君。ネタバラシは済んだかね？」

面白がっているのもまあいいが、それぐらいにしていたかどうか」

口調を変化させて言峰に言葉を投げたのは蒼黒の鎧を着た琳だった。ガシャリ、と鎧が震えたかのような音をたてながら綺礼に近づいていた。

それでも尚止まらない綺礼の哄笑を咎めるように何かを投げた。

「……………ムッ」

俯いていた綺礼だったが流石は代行者、一瞬でそれに気づき、たたき落とした。

からり、とゴツゴツした茶色の地面に落ちたのはただの石ころだった。

「最後に一つ。

デメエは本物か？」

紛れも無い殺意を受けながらも飄々とした表情を崩さずに返答した。

「無論だ」

「なら、死ね」

一切の慈悲無しに双剣を手に執った琳は駆け出した。

流石の綺礼もサーヴァントになっている者相手はまずいと感じたのか、後ろに後退した。

だが、後ろに後退したからといって逃げ切れるほど琳は甘い存在になつたのでは、ない——！

瑞々しい肉を断つ音が聞こえようとして——、前から声が届いた。

「逃げるツ！琳！」

「ふん、雑種が」

士郎の焦つたような声を聞きつけた時に彼は既に回避行動をとっていた。

後ろに翔ぶのは危険過ぎると判断し、それでも後ろに飛び退った。

双剣を後ろに投擲しながら言峰の事を完全に眼中から外した琳は空中から弾丸宜しく飛んでくる宝具を迎え撃つような事はせずに回避行動をとった。

その数は、少なくとも三。

しかし、三本は彼を後ろに飛ばせぬような意図をして縦に投じられていた。

「ん？何処かで見たことのあるような雑種かと思つたら………お前はあの時の雑種ではないか」

「顔を覚えていただけるなんて光荣だ、英雄王」

双剣を油断なく構えている琳が漸く上を見た。

言峰の後ろにある一枚の岩から出来た小さな崖。

その上に、これ以上無いくらいの存在感をしてソレは降臨していた。そのまた後ろに、邪悪にすぎるオーラを纏い、黎くろい黒い孔があつた。

アーチャーから逃げ帰ったと思いきや、ピンピンしていることに琳は舌を打った。

だが、と心の中で思い直し、油断している所が俺達はまだつけ込めると判断した。

「士郎、遠坂、綺礼頼む。サーヴァントの相手はサーヴァントって相場が決まってるんだ」

「……ああ、絶対に帰ってこいよ」

士郎の一本の剣を思わせるような決意のこもった眼に圧されながら確かと頷きを返した。

「青景、友情を確かめている所悪いが、私も参加かね？」

「たりめえーだボケ、使えるものは悪魔だろうと使うんだよ」

やれやれと溜息を付いているアーチャーは放置をかまして、それぞれの相手をすべく、各々が戦場に入った。

「行くぞ英雄王、死への覚悟は充分か——！」
「戯け、雑種がよく吼える——！」

赤い波紋を出しながら空に出てくる無数の宝具を睨みつけながら彼は走った。
後ろにいる弓兵に意識が向かないように。

「そら、一分は持ちこたえてみる！」
「冗談、一分で膾卸しにしてやる——！」

琳が執った槍が射出された宝具をはじき飛ばした時。

丁度、彼の男たちの戦いの火蓋が切って落とされた。

b
o
n
e

o
f

m
y

s
w
o
r
d
.

I

a

m

t

h

e

て
い
る
。

—
体は剣で出来

詠
唱
だ
ろ
う
。

な
ん
て
皮
肉
の
効
い
た

d
y
,

a

n
d

f
i
r
e

i
s

m
y

b
l
o
o
d
.

S
t
e
e
l

i
s

m
y

b
o

血
潮
は
鉄
で

心
は

硝子。

こんなにも、奴は真つ直

ぐに生きたというのに。

I have created
over a thousand blades.

幾たびの戦場を越えて

不敗。

その先に待つものを知

らずに。

Unknown

to Death.

ただの一度も敗走

はなく、

終着点を見ようとせ

ずに。

w n t o L i f e .

N o r k n o

れない。

ただの一度も理解さ

いつか、死ぬ。

ただ、救いを続けた彼は、

p a i n t o c r e a t e

H a v e w i t h s t o o d
m a n y w e a p o n s .

利に酔う。

彼の者は常に独り 剣の丘で勝

を救ったというのに。

世界と契約して、世界中の人間

d s w i l l n e v e r h o l d a n y t h i n g .

Y e t , t h o s e h a n

なく。

故に、生涯に意味は

は。

こんなにも、この詩

u n l i m i t e d b l a d e w o r k s . S o a s I p r a y ,

来ていた。

その体は、きつと剣で出

悲しそうなんだ。

第26話 守護者の槍（後書き）

最後は、私の私見といたしますか。

友人からの意見といたしますか。

とにかく、意見ある人は感想お願いしますね！。

第27話 英雄王の宝物庫（前書き）

し、知ってるか。

空アゲは、話が27話を超えるとサイコーのぐちゃぐちゃエンドをしたくなる。

気を付けろよ。

式が登場したり。志貴が来たり、シエルとか来たり。
バゼット来たり。

第27話 英雄王の宝物庫

「その詩をやめろおおお!!」
「止めさせる気は微塵もないっ!」

俺の発言を機に、更なる雨を降らせる宝具を、掻い潜りながらギルガメッシュの下に奔ろうと足を動かした。
視界に入る宝具全てをたたき落とすなんて俺の技量じゃ無理、鎧の硬度は精精宝具の威力を減衰程度。
現に鎧は破れそうだしな!ハハハハハハ!!……じゃねえよ。
槍とか、魔力をフル動員で何とかしているが開始数秒でその場に縫いとめられたぜ。

一歩前に行くたびに密度が上がる死の雨は俺にとっちゃ“弱点”そのものだ。

だが、それもここまで。
アーチャーに狙いを絞った時。
お前は俺に致命的な隙を晒す!!

「^{ルーカー}楔穿く漆黒朱の^{ダーカー}槍」
「……………フッ」

俺が宝具発動寸前になった時。
奴は不敵に笑った。
その笑みの真意は、この宝具が放たれた時に気付いた。

こいつは焦ってるように見えていたが。

完全に俺の拳動を見逃しちやいなかった。

ピタリ、と宝具群が一瞬だけ止んだ。

ギルガメツシュがぼうぐが放たれた刹那の内に取り出したのは、鏡のような盾だった。

俺が持っているこの宝具はランクC、この鏡の様な盾がどれだけの硬度を持っていようと貫くッ！

だが、彼は知らなかった。

英雄王は何故この盾を持ち出したのか。

相殺するなら他の武具でも十分叶うはずだったのにだ。

かの盾は“反射”の概念を持った盾。

ゴルゴンの石化の視線すら弾き返す絶対反射の盾。

ビームのように放たれたその槍は、ランク負けに依り。

「……………グッ、ハア」

寸での所で体を捻ったお陰か、心臓を突き破られるような事はなかった。

鎧は貫通したが、そこは修復を始めている。

ゴロン、と横になった。

いや、なるしか無かった。

心臓近くの場所を貫かれたのはかなり痛い。ダメージが深刻すぎる。クソウ、流石英雄王。痩せても枯れても英雄王だったと言ったことか。

これは、少し。

眠っちまいそうだ。

「そのまま眠れ、道化」

その言葉に次いで、宝具が雨あられと降り注いだ。

自分で自分の眼を疑った。

青影琳は心臓を突き破られ、死んだ。

その後のギルガメッシュの宝具による掃討。
間違い無く死んだ。

カア、と脳内、身体、全ての血液が沸騰しそうに成り、はたとその
血液は急激に冷えた。

“———体は、剣で出来ている”

そう言い続けたのは自分。

鋼は、熱くなるのは遅いが、冷めるのは速い。

取り乱さず、ただ目の前の元凶を消すことに専念しろ———！

その体は、きつと剣で出来ていた

「 So as I pray , unlimited
blade works . 」

轟と耳を打つ強風。

空を見ると、鉄のような薄暗い色と鮮やかな橙^{オレンジ}に
彩られた世界が見える。

その空に、無限と回る齒車が在る。

微かに、回る音が聞こえる。

チラホ

ラと飛んでいく火の粉は次第に消え。

自身が作り出し、此の丘に突き立てた劍軍が姿を表した。

「ここが……ここがオレの終着点だ。ギルガメッシュ。

ここで、お前は果てる」

「何を戯けたことを。」

王に対してその妄言、最早死すら生ぬるいわッ！」

ゲートオブバビロンから次々と放たれる劍を、こちらも劍の丘から引き抜き相殺させる。

この場においては、オレは奴にギルガメッシュに対して有利に在り続けれる。
その利点を活用することで奴に対抗する——！

丘から劍を引き抜き自身の武装とすると大量の劍を操ってギルガメッシュの劍群に対抗させる。
そして、駆けた。

「ウオオオオオオオオ！！！」

「戯けるな、雑種ウウ!!」

奴も射出の剣から武器を引き抜き、打ちかかってきた。技量ならこちらのほうが上、なら、瞬く内に肉片に変える。

打ち合うたびに剣が火花を打ち上げる。

鋼と鋼が打ち合わされる度にオレが高揚している事を知る。紛れもなく、

オレは誰か個人の為に剣を振るうことを是としていた。

右が振るわれ、左が抜かれる。

左が割ると、右が突く。

奴も必死の形相でオレの剣戟を受けようとしていた。

胴部分は最低限の防衛だけで、後は鎧の硬度に任せ、剥き出しの頭を防衛することに専念していた。

此のままだと攻めあぐねることが確実と判断し、剣を突き立てると、

フロークン・ファンタズム
「壊れた幻想」

「なっ———!!」

視界全てが粉塵に包まれてオレは後ろに後退した。

煙の中から何かが飛び出したと思ったら、金色の鎧を土に汚し、整えられていた髪型は無残に下ろされ、憤怒を顔にするギルガメッシュが居た。

「我が骨子は捻れ狂う」

カラドボルク
「偽・螺旋剣」

数十も離れていない距離をコンマでゼロにし、ギルガメッシュに衝突した。……………かのように見えた。

青景を殺した鏡の盾と、脇に待機させた補助の防具でダメージをゼロにしたのだった。

両手に重量を感じ、それをギルガメッシュに投擲する。

「——鶴翼、欠落ヲ不ラズ（しんぎむけつにしてばんじゃく）」

続けざまの投影に僅かな負担が掛かる。

「——心技、泰山ニ至リ（ちからやまをぬき）」

「——心技黄河ヲ渡ル（つるぎみずをわかつ）」

——唯名別天ニ納メ（せいめいりきゅうにとどき）。

——両雄、共ニ命ヲ別ツ（われらともにてんをいだかず）……………！

“鶴翼三連”発動するが最後、決して逃れ得ない剣の檻。

言うならばアサシンの生涯をかけた秘技、燕返しと同種類のモノ。息の呑んだのはギルガメッシュ。

一瞬でその性質を看破した彼がとつたのは。

「……………くっ」

宝物庫にある盾全てを動員して要塞を創りだすことだった。
だが、そのせいで剣の射出は止まった。
アーチャーは剣全てをギルガメッシュに向けて、要塞を突き壊さ
んと降り注がせた。

.....

.....

.....

.....

...

剣の雨が止んだ。

鶴翼三連は彼が不要と判断しその必殺は止められた。

剣の雨も彼を殺すこと無く止んだ。

だが、そこで止めるほど甘い男でもアーチャーは無かった。

ブロックン・ファンタズム
「壊れた幻想——ッ！」

流石の彼もその反動は大きかった。

十や二十で効かない剣をその全てを爆散させるなんて狂人のやるこ
とである。

だが、実行した。

彼がその言の葉を紡いだ時、勝敗は決したようなものだった。

固有結界一杯に広がる光でギルガメッシュは敗北を認めた。

瞬間。

固有結界を破壊し尽くすほどの爆発が見境なく生物を殺害した。

第27話 英雄王の宝物庫（後書き）

琳は受肉することであんなさーとの契約を維持しております。

矛盾だらけの本作を呼んでいただけるだけで感無量です。

ではでは。

第28話 代行者の黒鍵

「……………ハア……………クソッ」

口から流れ出る鉄の匂いをした赤い液体を乱暴に拭いながら再度投影の詠唱を口にする。

トレスオン
「投影開始」

脳裏にある設計図は今までに無いぐらいの精度で、少ない魔力で投影を可能にした。

士郎の保有魔力はそこまで多くはない、それをカバーしていたのは精度を上げて消費魔力を下げるという技だった。

「ふむ……………まだ立ち上がるか」

黒衣の代行者は能面の様な表情の中で口に笑みを浮かべていた。僧衣から引きぬかれた黒鍵は6、最早何処にそこまで隠せていたという量を士郎に射出している。

弾丸じみた勢いと、正確無比な狙いで士郎を追いつめた。

だが、そのままやられるほど甘い誓いを残してきたのではなかった。がたついた足腰に活を入れ、血だらけの腕に剣を抱かせながら、士郎は疾走を開始した。

「……………まだ甘く見ていたな」

「綺礼、あんたの敵は私よっ……………！」

士郎の背後に立つ赤い人影は、士郎が倒れこむように走りだしたのを見越したように掃射を開始した。
黒い球弾は綺礼の僧衣をかすらせるに留まった。
だが、凜もこれでかたがつくとは思っていない、直ぐに士郎の援護に走りだした。

「ゼアアアアアア！！！」

士郎が綺礼に到着するのはそう遅くなかった。
直前まで凜の掃射に対応していたため、一瞬だけ反応が遅れたが、黒鍵を巧みに操って士郎の剣閃を受け流した。
裂帛の気合は黒の刀身に遮られ、夫婦剣は奴の体を裂くことなく士郎は撤退した。

士郎が引いた途端浴びせられる掃射を避けながら黒鍵を投擲した。

「——ッ！」

苦悶の表情を浮かべながらも、声は上げずに我慢した。
黒鍵は避けきれずに凜の脰くびの肉をこつそりと抉っていった。
身動きが取れなくなった凜に猛進を駆ける綺礼。

「行かせるかよッ！！」

見逃しはしないと夫婦剣を投擲、挟みこむように投げられた夫婦剣は難なくかわされたが、士郎は足を止めずに投影を開始した。

「——」

無言の詠唱を経て生み出された剣の重みを感じながら綺礼に肉薄する。

士郎に先んじて凜に到達した綺礼は、凜のガンドが発射される前に凜の意識を刈り取っていた。

“秘技——箭疾歩”

意識と意識の間に滑り込んだ綺礼の歩法は、凜が視認する前に、その勢いで出された体当たりが凜を吹き飛ばした。

「がつ——アはっ！」

全身の骨がバラバラになったかのような衝撃を受けた凜は、あっさり意識を手放した。

「て——めえ！」

目の前で吹き飛ばされた凜の仇を討たんと右腕を振り上げた。振り下ろされた右腕は綺礼にガードされたが、それはフェイク。左の莫耶を突き込むように放った一撃は、綺礼に当たった。

「これで——」

「グッ——」

僅かによろめいた綺礼の隙を見逃さずに放たれた回し蹴りは——
|、

「ガッ——！！」

「ラストオ！」

綺礼の側頭部に吸い込まれるように入り、二、三メートル吹き飛ばした。

じりと地面を具足で踏みつける音が洞窟内に消えていった。

先程から間断なく起こる地響きなどは恐らく戦闘故だろうとあたりを付けてランサーは槍を持ち直す。

黒い侍は先程からだらんと刀を下げており、隙だらけのように見えたが、いざちよっかいを仕掛けようと殺気を漲らせた瞬間に油断ない構えに入った。

紅い穂先が自身の魔力と連動するように脈動する。

「ハアアア！」

先に動いたのは——当然のごとくランサー。

離れていた距離は近づき、間合いに入った時には紅い軌跡を残して放たれた。

それを刀の一閃で受け流される、が、続けざまに放たれる連続する突きの対処に追われることになった。

槍を、放つ。戻す。また放つ。

それらの動作だけのシンプルな攻勢だが、放たれる場所の全てが人的急所ばかりでは、肉を切らせて骨を断つなんて真似事は出来ない。

キヤキヤキヤと壊れたテープみたいな音を響かせながら何十合目かの突きを弾かれた所で、後ろに飛び退いた。

「チツ、相変わらず攻めづらい事しやがる。だが——」

「そっちの方がやり甲斐があるってもんだ。悪いが、ここであつたばれ」

ジャリツと踏みつけた土が音を鳴らし、再びの静止が場を支配した。侍はゆるりとした動作で唯一の構えを取る。

「いいねえ、それを破って俺は先へ進むぜ」

その動作で放たれる最悪の結果を勘で把握したランサーがとつたのは防御の構えではなく……一撃で相手を仕留めんと攻撃の構えをとつたことだつた。

ゲイボルクの穂先が真紅に染まっていき、ランサーの肉体が膨張し、最高の一撃を繰りださんと準備している。

侍が刀をちやきと鳴らし、音もなく進み出て、刀を振るつた。対するランサーは迷うことなく最大の加速を以て侍の懷に飛び込んだ。

「秘 ■ ——— 燕 ■ ———」

肉を突き破る音と、裂く音が、洞窟内に響いた。

凜を背にして黒衣の代行者の猛攻を防ぎきれるかと言われたら、否。ならば、奴を打倒することで後ろの凜の安全を確保するを考えるのは当然だった。

幸い、剣技だけならアーチャーにも迫るほどになっている。奴の戦闘経験は脅威だが、こっちの経験も半端じゃないんだ、と気合を入れて夫婦剣を執った。

黒衣の代行者はぐらりと揺れる脳みそを抑えつけようと頭に手をやって、こちらを見据え続けている。

それを好機と取り、士郎は地を駆けた。

「うおおおおお!!」

「くっ、ハアア!」

三半規管を揺らされた綺礼はぐらつく足で士郎の対処に追われた。

士郎が執った行動はひたすら走ってかき回すこと。

攻撃を弾かれたと見るやそのまま綺礼の脇をすり抜け、また背後から斬りかかった。

なるほど、確かに良い作戦だった。

だが、綺礼の不調が治ったときには此の作戦は意味をなさなくなるが。

四度目の背後からの襲撃を掛けた時に、異変が起きた。

綺礼がぐらりと今までになく隙をさらけ出した、それを見逃さずに特攻の一撃をかけようと疾った。

駆けた士郎は勢いを殺さずに翔んだ。

瞬間、後ろから熱波と共に自身が加速した事を実感した。

その正体を判じる暇は無かったが、綺礼の虚を付けることに感謝して、その命を刈りに行こうじゃないか。

「ザアアアアアア！！！！！！！！！」

「又オオオオ！！」

それに対応するように繰り出された掌底は、一撃を求めて放った白の刀身の脇をすり抜けた。

剣を弾くためだけに出された掌底は士郎の髪を塵と掠めるに終わった。

迫る刀身を見ながら、自身の終を感じた。

致命となる剣閃を肩から受けた綺礼は、ボトリと落ちた腕を追うように地に臥した。

「ハア……ハア……終わった　のか？」

背中が燃えるように熱いがこの際無視だ。

言峰綺礼という元凶を殺した今、多少の休憩は許されるだろう。ガクガクの足腰に活を入れて最後の活動と行こう。

「遠坂、おい、遠坂ってば——」
「——……んあ……し、ろう？」

起きたみたいだ。ホッと胸をなでおろしながら気付けをして行く。起きた遠坂を連れて、終わりを見に行った。

第28話 代行者の黒鍵（後書き）

あと、二話……………かな？

最終話 望みを謳うもの

ブスブスと煙を上げて踞っている塊がズルリと動く。

金色の鎧は原型を残さずに破壊され、その身を守るはずの盾も粉微塵に消えた。

整った髪型は無残に形を残さずになっていた。

よくよく見ると、焦げた体のせいかな、あまり見えなかったが、黒い泥が確かに蝕んでいた。

「おのれ……………」

ボソリと、そう、塊は呟いた。

解せぬ。一介の弓兵ごときに自身が害されたことが。

解せぬ。自身が最も頼りにしていた鎧が、何をも反射するであろう盾が、最早意味を成さなくなったことが。

ゆらりと幽鬼の様に立ち上がると覚束無い足で歩き出した。

「この冬木に、災禍あれ……………」

半身を黒に染めながら、殺戮だけを思念に宿しながら彼は歩いた。

「オオオオオオオ！！！」

セイバーの気合と共に繰り出された剣閃は確かに泥の核とも言える頭と心臓を同時に斬り裂き、泥は形容しがたい絶叫を残して消えた。ふう、と息を整え、再度魔力を編み、聖剣を隠した。

「これで終わりですか——？」

「ええ、少なくともこの場には泥は居ないわ」

「行きましょう。この場に留まっていたは士郎たちの様子が分かりません」

「そうね」

同意したキャスターを守るように戦闘に立ちながら、前に進みだしたセイバー。

キャスターもそれに続いていった。

ぐらりと姿勢が傾いたのは黒い侍だった。

ドサリと倒れ伏す侍を見遣りながら、自分を見た。

左腕が、無かった。

「チツ、野郎め、なかなかいい腕してやがる」

悪態をつきながら簡単な治癒のルーンを刻んだ。

血に濡れた半身に気を欠けることなく静かに腕の治療を開始した。

といっても、腕を完全にくっつけても意味はない。治癒を行い、自身の体調を確認してから、さあ行くぞ。という時だった。

「ランサー！」

聞き覚えのある声だった。

振り返ると、セイバーとキャスターがこちらに向かってきていた。

合流して直ぐに最奥に向かった。
急いで最奥で奮闘してるであろう契約主を助けるために走った。

士郎と凜が、地面に臥している青景琳を見つけたのは数分後の事だった。

「琳、大丈夫か!？」

「……………あ、大丈夫だ、氣い失ってただけだ」

ふらふらしているが、琳は立ち上がり、士郎に事情を説明し始めた。
尤も、琳は大半を氣絶しており、話せることは少なかった。
ふと……………琳が、ある一点を凝視していた。

「琳?……………どうした——、」

琳はいきなり士郎と凜を引き倒し、その反動で立ち上がった。
士郎と凜は琳の背中に隠れるように倒れこんだ。

瞬間、肉を抉る音が無数に士郎と凜の耳朵に響いた。
士郎は、ふと、弁慶を思い浮かべた、余りにも琳の今の姿勢が似ていた、というのが理由だった。

「琳ッ!……!」

「青景君ッ!」

立ち上がり、琳に駆け寄る二人が見たのは、禍々しい雰囲気擁した、英雄王の姿だった。

背に出る空間の歪みからは絶対の弾丸が顔を覗かせている。

その貌

かお

は影になって伺うことは出来なかったが、総身から溢れ出す王気オーラ

は黒く染まっていた。

次なる魔弾を放った時に、士郎達の前に二つの影が飛び込んできた。

「ヤアアアア!!」

煌く聖剣の一振りで一蹴され、蒼い人影が取りこぼした宝具を処理していた。

数秒の内に状況は変化した。

セイバーは燦然の輝く聖剣の光に身を包みながらその顔は琳を助けられなかった悲しみに浸されていた。

ランサーは一瞥をくれるだけで直ぐにギルガメッシュに視線を戻した。

「小僧、琳を下げとけ。嬢ちゃん、出来る限りの治療を頼む」

「ええ、分かったわ」

突き刺さった剣、槍をそのままにして後ろに下がっていく姿を瞬間で捉えながらランサーは油断なくギルガメッシュを見ていた。

ギルガメッシュは何を言うこともなく空間から一振りの剣を持ちだした。

「——ッ」

ぞわりと二人の総身が身震いした。
ランサーはその剣を見たことはなかったが、直感で理解した。
‘あれは打ち合えるモノではない’と。

“剣”は挽臼を三枚重ねたような不恰好な形だった。
臼を引くようにそれは回転を始めた。ぐるぐると、ぐるぐると。
回転は次第に速くなり、

「天地乖離

エヌマ

す——

必勝を手に、貴き宝剣の柄が手にあるかぎり、迷いはない。
望みを載せて、今こそ相応の力を見せつけよう。
謳うべき真名は唯の一つ。

「約束

エクス

された——

ギルガメッシュの持つ“剣”の回転を最高潮となり、開放の時を今
か今かと待っていた。

天地を裂き、次元すらも捉えるその宝具の名を、ギルガメッシュは
謳い上げた。

「開闢の星

エリシュ

「！」

「勝利の剣
カリバー」

「！」

彗星の如く放たれた金色の奔流が、大気を裂き、次元を壊しながら進む一撃と激突した。
拮抗は一瞬。

最大出力で臨むギルガメッシュに不覚を取ることとは無かった。

「くっ」

悔しさに臍を噛むが、それで押された一撃は元には戻らない。

圧倒的な破壊の閃光がセイバーの矮躯を吹き飛ばした。

宙を舞うセイバーの体を受け止めたのは、宝具の激突が始まる前に離脱したランサーだった。

ぷすぷすと煙が燻るセイバーの体をそつと置き、ランサーは槍を手にとった。

「次は貴様か、狗」

ここで初めて、黒色の英雄王が口を開いた。

放たれた言葉は嘲笑の音もなく、ただ単に確認の意味だけがあった。
無表情の貌で王の財宝を展開しはじめた。

「あの英雄王と相手取れるなんて光栄の極みだが、俺の戦友
リン

をボロボロにした奴に掛ける情けはねえ。かかって来な」

「フツ、吼えるな狗。我に齒向かうのは天上天下にただ一人のみで

「良い！」

ランサーの四肢が強張り、発射はまだかと軋みをあげた時に銀色の箆手がランサーの肩を叩いた。

ボロボロの状態だが、まだ戦闘不能には陥っていないセイバーだった。

ギリリ、と箆手に力が加わり、ランサーを行かせまいとしていた。まだ潰えては居ない、と。その翠緑の目が訴えかけて……ランサーが折れた。

「チツ、しゃあねえ。共闘だ。セイバー」

「ええ、分かりました。ランサー」

ただそこに佇んでいる英雄王は決して手をだそうとはしなかった。

セイバーとランサーが戦闘態勢になって始めて、彼は動いた。

幾千幾万の宝具を“弾”に見立て、放つ彼は“銃身”だった。

右手の振り下ろしが、機関銃の引き金を引き絞る動作、放たれる弾は一撃で致命的な破壊の嵐だった。

そんな中、宝具の雨をすり抜けるように奔るのはランサーだった。

柔軟な体と、直撃する宝具を見極めて叩き落す技量。

最速の英雄たる真価を発揮し、ギルガメッシュに近づいていく。

歩みを遅くする宝具の密度は近づけば近づくほどに大きくなった。

あと数メートルがこんなに遠く、あと数秒がこんなにも長くなつてランサーを苦しめる。

「なっ——！！？ テメエ！」

不意に、ジャラジャラと音を響かせて、“鎖”が槍兵の体を縛り上げた。

“神性”を持つものを律する鎖は、ランサーの四肢を完全に封殺した。

続けざまに迫る宝具を何とか身を擦らせて避けた。

これ以上は避けられないと覚悟した時にセイバーが鎖を絶ち切ってくれた。

槍を拾い上げながらセイバーとランサーが後ろに引いた。

引きざまにギルガメッシュの挙動を見咎めたセイバーは瞠目した。

エクスカリバーを打ち破った“剣”を再び引き出していた。

ランサーもそれを悟って再び離脱した、今のランサーは琳への負担を減らすために宝具が使えないのだ。

——騎士の祈りを一身に受けた星に鍛えられたとされる聖剣の開放を再びセイバーは行おうとしている。

凛への負担は大きいが、そこは目を瞑ろう。

——膨大な魔力を収束させて放つ「最強の斬撃」を以て今度こそ最強の幻想

ラスト・ファンタズム
の真価を発揮させよう。

「約束された勝利の剣
エクスカリバー

——！！！！」

「天地乖離す開闢の星
エヌマ・エリシュ

——！！！！」

再び、最強と最凶が見えた。

二度目とあって威力が減衰して尚、エクスカリバーと拮抗する威力

を叩き出す破壊はセイバーを巻き込まん光の極光を貪りながら迫る。

——また、負けるのか。

セイバーの思考にそんな言葉が忍びこんできた。

——否、負けない。私は敗北を許されない

思考の湖に入った墨汁を消し去る言の葉が、セイバーを奮い立たせた。

「——オ、オオオオオオ！！！」

自身の残存魔力さえも投入して文字通り全力をこの一撃に掛けた。ギルガメツシュも強大な斬撃に負けじと体を蝕んでいる泥から魔力を引き出した。互いに全力を振り絞った一撃は数秒で決着が着いたのだった。

体中に響く痛みを堪えて俺は体を起こした。

洞窟に響き渡る音源は何処かと首を動かそうとしてやめた。痛かった。

士郎たちは気づいていない。俺に気付いた遠坂は何かに堪えるようにして喋れないようだった。

そつと自身の宝具を具現化させた。

ギルガメツシュは恐らく生きてるだろう。なら、俺の手で終わらせる。

そしたら、俺は望みを謳えるから。

“誰かを守る”という望みを。

首を無理やり動かしてセイバーと彼方にギルガメッシュを幻視する。セイバーが押しているがそれも直ぐに押し切られて負けるだろうと当たりを付けて覚悟を決めた。

俺の持つ最後の宝具をして、俺の生涯を掛けた悲願を成就させる。すつ、と胸骨に穂先を据える。

あとは、障子突き破るような勢いでこの槍を墮とすだけ――！
士郎が漸く気付いたがもう遅い。遠坂は手を伸ばそうとするが届かずに終わった。

「誰かを守れて、俺は良かった――」
「琳ッ！」

最後に、ポツリと呟いた俺は士郎の静止を無視して、自身の左腹を突き破った。

そして、奴を終わらせる最後の一言を静かに言った。

「“世界越える過去への一撃
フォルクジエンス
”」

ぞぶと胸に残る異物感を抑えて言った言葉は俺の持つ魔力の殆どを喰らって、ギルガメッシュに降りかかった。

違和感が発生したのは、セイバーと打ち合っていた正にその時だった。

放った姿勢で硬直していたが、首を下に動かすと、自身の宝物庫に

無い宝具の柄だった。

恐らく、後ろに貫通しているだろう穂先は、忌々しい狗が憑依した男のものだった。

泥に吞まれかけていた意識が一瞬で覚醒し、迫り来る“死”の極光を見つめた。

貫かれた時に出来た隙は致命的だった。勝てるはずだった宝具に負けた彼は少し清々しそうだった。

「さらばだ、セイバー……………そして、転生者よ」

敵かに言った言葉は聖剣の光に吞まれて誰に届くことなく消えた。

「本当に、これで終わりなの？」

「ええ、聖杯は現存していますが、争う理由は有りません。休戦して、聖杯戦争が終わるその時まで待ちましょう……………ランサー？何を泣いているのです？」

不思議そうに尋ねるセイバーに答えることなく、ランサーは歩き出した。

轟音を立てて消えていく洞窟への穴を見つめながら、静かに黙祷を捧げた。

その眼は涙に濡れていた。

完

最終話 望みを謳うもの（後書き）

すこし、継ぎ接ぎですが宜しく願います。
これにて、本作は終了と成ります。

今まで、有難うございました。

読んでいただいた方、感想、批評、くれた方、このような拙作にお
付き合い頂き、本当に有難うございました。

それでは、次回作（あるのか？）でお会いしましょうッ！

エピソード：60話記念w（前書き）

どうも、お久しぶりでございます。

空アゲです。

この度は、望みを謳うもの、見ていただき有難うございました。

エピローグ：60話記念w

奴の死に様はあまりのも呆気なかった。

だが、俺の理想に、一つの波紋を呼んだ。

俺の理想である、正義の味方を崩すにはあまりも弱い波紋だった。
俺の理想は、何百人もの人の命の上にあるものなのだから。

大火災の時に助けた爺さんの顔があまりにも嬉しそうだったから、俺もそうになりたい、そう思ったことで生まれた理想。

だけど、琳の死の理由を見ることが少しは皆の言っている事が分かった。

曰く、自分を大事にしろ。

イリヤに言われた事だけど、自分が死んだら、そのあと守れた人を守れなくなってしまう。

琳は、本当に全てを投げ出してセイバーを守り、俺を守り、遠坂を守った。

あの、俺の前に立つ琳の姿が、少しだけ、アーチャーと被ったことは、誰にも言っていない。

聖杯戦争は終わったが、ランサーとセイバーは、一生懸命、生きている。

何故か受肉を果たし、益々食事の量に拍車がかかったセイバーも。毎日の如く釣りに行くランサーも。

この生を受け入れて生きていた。

そしたら、俺も、死なないように誰かを守ろう、そう考えた。

「シロウッ！ご飯はまだですか！」

「さっき喰ったばかりだろ……セイバー。」

商店街、行くけど。着いて来るか？」

「行きます、シロウ」

即答を返すセイバーに苦笑しつつも、外に出た。

「うつ……」

今日は、確か商店街で夏の締め祭りがあるんだよな。
それで俺の家を通り過ぎる人が多いのか。

それにしても、

「暑いですね、シロウ」

「そうだな。そろそろ夏も終わりなのにな」

そう言いながら、二人並んで歩いた。

商店街へ向かう途中に、こんな暑い中だというのに黒のコートを羽織っている変な人が居た。

まあ、あの人寒がりなんだろう、と結論づけて歩みを続けた。

商店街で、ジュースを購入して、ベンチに座り込んだ。

両手に下げた食材を下ろし、上を見上げた。

セイバーも俺の隣に座り、上を見上げていた。

「綺麗な青空ですね」

「そうだな、こういうのを雲ひとつ無い青空、って言うんだぞ」

「雲は少しありますけどね」

「はは、……そうだな」

のんびりと、日常は回る。

いつか、俺が正義の味方に成るとしても、その時は。

次回予告！！！！！！

遂に現れた妖怪。

ここ、冬木にもそれを退治する為の男が派遣される！

しかし、道中で事故にあい、一般人を刺殺してしまう！

さあ、大変。大変大変と思いつつも、妖怪殺しは、同じ仲間の妖怪殺しに殺されることになった――。

殺される寸前で現れる救いの手！それは、男の運命をねじ曲げる、呪いの手だった！

次回：化物殺しの名を叫べ

お楽しみに。

エピソード：60話記念w（後書き）

書いちゃいました。

定番中の定番の召喚モノを。

やっちゃったな！

是非とも見ていただきたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8354p/>

望みを謳うもの

2011年11月13日09時13分発行